

平成 16 年

神奈川県感染症

平成 17 年 12 月

はじめに

近年、公衆衛生を取り巻く社会環境の変化は目覚ましく、時代の変化とともに、結核、マラリア、ウエストナイル熱、SARS、鳥インフルエンザ、エキノコックス症など種々の感染症の脅威に、常にさらされています。特に、平成 16 年には、79 年ぶりにわが国でも高病原性鳥インフルエンザが発生し、二次感染が大きな社会問題へと発展しました。

神奈川県では、過去の感染事例を教訓にし、健康危機管理の観点からマニュアルの見直しとその徹底等、健康危機管理体制の構築を計り、健康危機発生時の対応を含め、感染症対策の充実に努めております。

『神奈川県の感染症』は、本県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものであります。

今後の感染症対策の実施にあたり参考にして頂ければ幸いです。

さて、平成 15 年版までは冊子による情報提供を行ってきましたが、本 16 年からは、冊子に代わって CD-ROM を作成することとなりました。

なお、ホームページにおける情報提供は従来通り行います。

最後に、『神奈川県の感染症』の作成にあたり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 12 月

神奈川県衛生研究所長

今井光信

目 次

はじめに

感染症発生動向調査

1 全数把握対象疾患	1
2 週報対象疾患	8
3 月報対象疾患	19

細菌性感染症

1 腸チフス・パラチフス	
(1) チフス菌等のファージ型別結果（神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市）	23
2 腸管病原菌検出状況	
(1) 散発下痢症からの病原菌分離状況について（神奈川県）	25
(2) 海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況（横浜市）	26
(3) 下痢症患者からの腸管病原菌検出状況（川崎市）	27
(4) 散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況（横須賀市）	29
(5) 2類及び3類感染症発症者の家族等の病原菌検索について（相模原市）	31
3 河川等の環境調査	
(1) 河川水腸管系病原菌調査（神奈川県）	32
(2) 腸管系病原菌検索（横浜市）	34
(3) 河川水腸管系病原菌検索（横須賀市）	37

ウイルス性感染症

1 インフルエンザ	
(1) 神奈川県の発生状況	40
(2) インフルエンザの動向（神奈川県）	41
(3) インフルエンザの動向（横浜市）	43
(4) インフルエンザの動向（川崎市）	47
(5) インフルエンザ感受性調査（神奈川県）	49
2 ノロウイルス	
(1) 神奈川県のノロウイルスによる感染性胃腸炎の検査結果	51
(2) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果（神奈川県）	52
(3) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果（横浜市）	52
(4) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果（川崎市）	52

(5) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果（横須賀市）	52
(6) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果（相模原市）	52

3 ウエストナイルウイルス

(1)ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス（神奈川県）	53
(2)ウエストナイルウイルスのサーベイランス（横浜市）	53
(3)ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス（川崎市）	55
(4)ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス（横須賀市）	56

4 その他の感染症

(1) 日本脳炎感染源調査（神奈川県）	57
(2) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況	57
(3) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況	58
(4) HIV 患者・感染者の状況について	59

その他の感染症

1 神奈川県で発生したつつが虫病について	71
----------------------	----

～資 料～

1 平成 16 年 全数把握対象の感染症	72
2 細菌検出状況	73
3 ウイルス検出状況	75
4 予防接種実施状況	79
5 神奈川県感染症機関分布図	81
6 神奈川県感染症機関一覧表	82

感染症発生動向調査

全数把握対象疾患

《一類感染症》

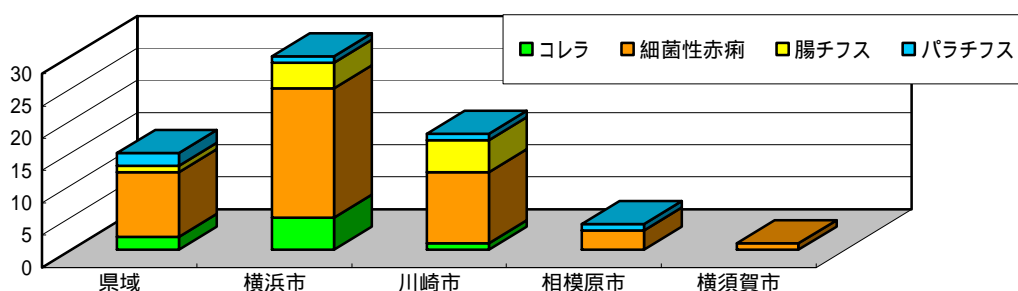
感染症法の改正により、新たに一類感染症に指定された「重症急性呼吸器症候群」および「痘そう」も含め、県内で一類感染症の報告はなかった。

《二類感染症》

コレラの報告は県内で8例の報告があり、その内訳は県域2例、横浜市5例、川崎市1例であった。細菌性赤痢は県内で45例の報告があり、その内訳は県域10例、横浜市20例、川崎市11例、相模原市3例、横須賀市1例で、そのほとんどは海外渡航者による持ち込む例であった。腸チフスの報告は県内で10例の報告があり、その内訳は県域1例、横浜市4例、川崎市5例であった。パラチフスは県内で5例の報告があり、その内訳は県域2例、横浜市1例、川崎市1例、相模原市1例であった。

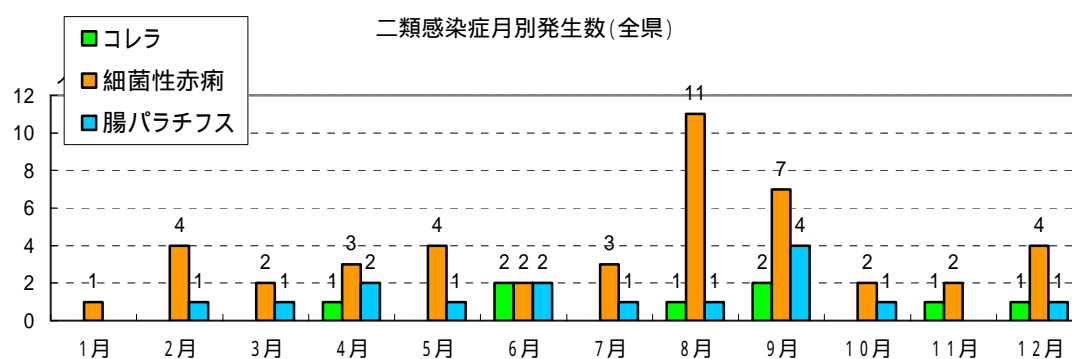
その他の二類感染症ジフテリア、急性灰白髄炎の報告はなかった。

(1) 県域・政令市別発生数

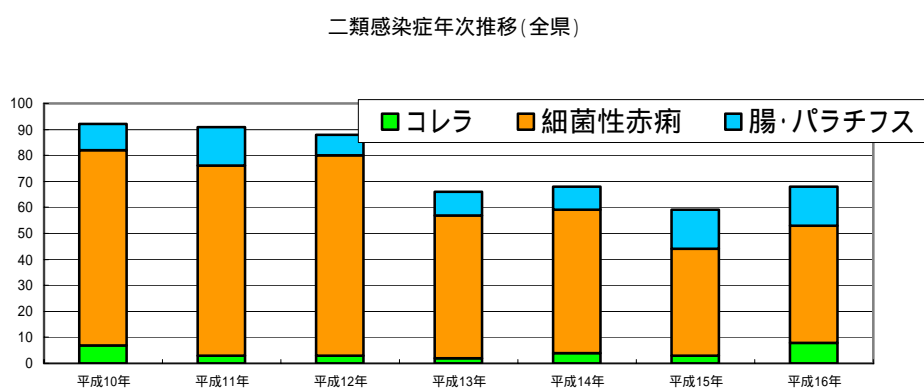


	県域	横浜市	川崎市	相模原市	横須賀市	合計
コレラ	2	5	1			8
細菌性赤痢	10	20	11	3	1	45
腸チフス	1	4	5			10
パラチフス	2	1	1	1		5
合計	15	30	18	4	1	68

(2) 月別発生数



(3) 年次推移



	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
コレラ	7	3	3	2	4	3	8
細菌性赤痢	75	73	77	55	55	41	45
腸・パラチフス	10	15	8	9	9	15	15
合計	92	91	88	66	68	59	68

(4) 海外渡航状況

	発生件数	海外渡航有	渡航率
コレラ	8	6	75.0%
細菌性赤痢	45	41	91.1%
腸チフス	10	6	60.0%
パラチフス	5	5	100.0%
合計	68	58	85.3%

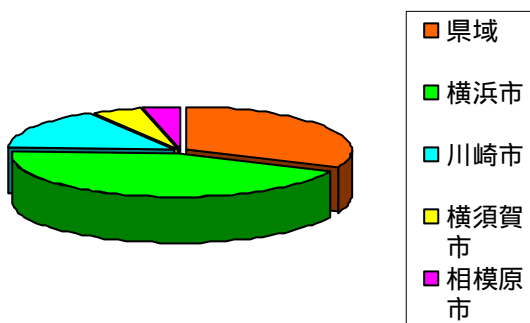
《三類感染症》

県内で170例の報告があった。その内訳は横浜市76例、川崎市27例、横須賀市8例、相模原市6例、
 県域53例であった。菌型は例年と同様O157がほとんどを占めた。

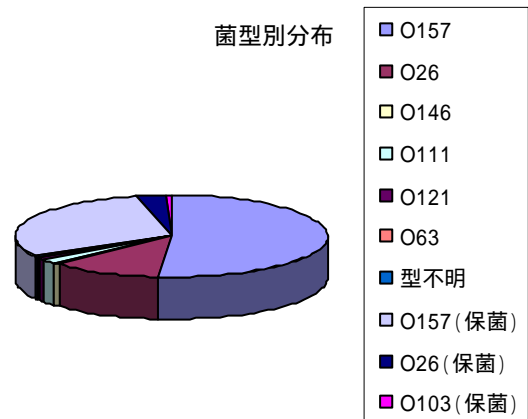
(1) 発生状況

	発生件数	患者数										保菌者			
		O157	O26	O121	O126	O111	O103	O159	O63	O146	型不明	O157	O26	O103	
総計	170	86	19	1	0	3	0	0	0	1	1	3	49	6	1
横浜市	76	43	8			1				1	1	2	17	3	
川崎市	27	20	3										4		
横須賀市	8	3	1			1							3		
相模原市	6	4				1									1
県域	53	16	7	1	0	0	0	0	0			1	25	3	0
平塚	3	2	1												
鎌倉	1		1												
藤沢	4	1											3		
小田原	22	4	2										16		
茅ヶ崎	6	4											2		
三崎	1	1													
秦野	8	2	3											3	
厚木	6	2		1								1	2		
大和	2												2		
足柄上	0														
津久井	0														

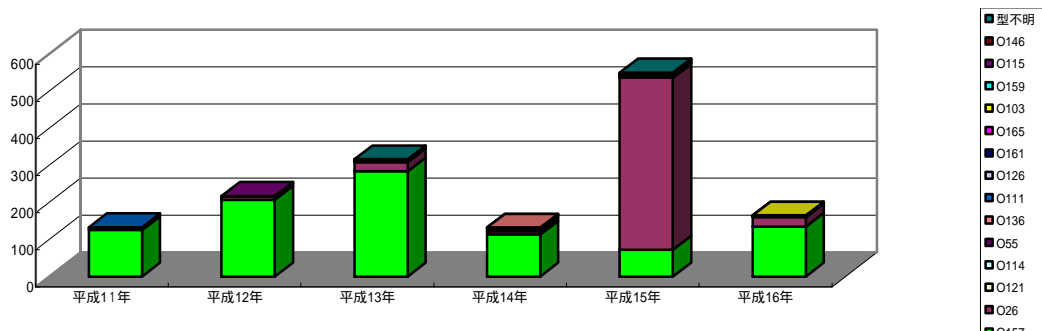
地域別発生分布



菌型別分布

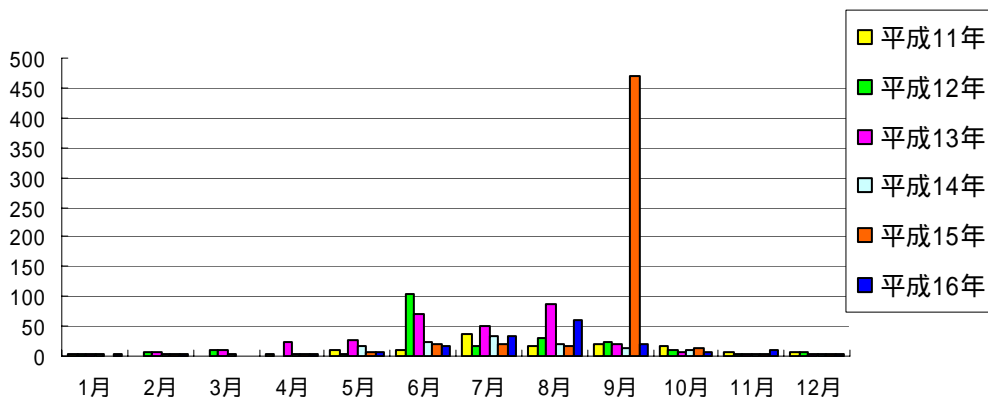


(2) 年次推移



	O157	O26	O121	O114	O55	O136	O111	O126	O161	O165	O103	O159	O115	O63	O146	型不明	総数
平成11年	125	6					2										133
平成12年	207	8	1										1				217
平成13年	284	25		1			3		1	1						1	316
平成14年	113	9	5	3	1	1											132
平成15年	73	462	1				3	1			5	1		1		4	551
平成16年	135	25	1				3				1			1	1	3	170

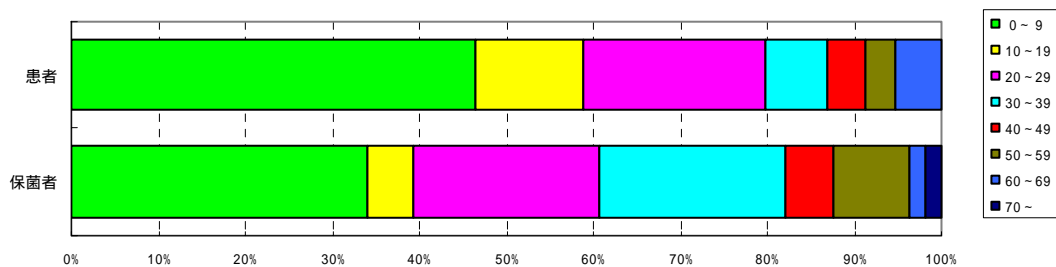
(3) 月別発生状況



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
平成11年	5	1		3	9	10	38	18	20	16	7	6	133
平成12年	2	7	9	1	3	104	17	31	23	9	5	6	217
平成13年	2	7	11	25	26	72	52	88	21	7	3	2	316
平成14年	3	5	3	2	16	22	32	21	13	11	2	2	132
平成15年	1	2		2	6	19	19	16	469	12	3	2	551
平成16年	3	2	0	5	6	17	35	60	20	8	11	3	170

(4) 年齢別分布

腸管出血性大腸菌感染症・年齢分布 (平成16年)



年齢	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~	計
患者	53	14	24	8	5	4	6	0	114
保菌者	19	3	12	12	3	5	1	1	56

《四類感染症》

全数把握対象 30 疾患のうち、県内で報告のあった疾患は 8 疾患で、A 型肝炎 8 例（県域 4 例、横浜市 4 例）、オウム病 2 例（県域）、コクシジオイデス 1 例（県域）、ツツガムシ病 19 例（県域 18 例、川崎市 1 例）、デング熱 5 例（横浜市）、マラリア 8 例（県域 1 例、横浜市 6 例、川崎市 1 例）、レジオネラ症 2 例（横浜市 1 例、横須賀市 1 例）、レプトスピラ症 1 例（横須賀市）であった。

（1） 患者発生数

疾患名	全国	神奈川県	（県域）	（横浜市）	（川崎市）	（横須賀市）	（相模原市）
A型肝炎	136	8	4	4			
Bウイルス病	0	0					
E型肝炎	35	0					
Q熱	7	0					
ウエストナイル熱（脳炎を含む）	0	0					
エキノコックス症	25	0					
黄熱	0	0					
オウム病	39	2	2				
回帰熱	0	0					
狂犬病	0	0					
コクシジオイデス症	6	1	1				
サル痘	0	0					
腎疾候性出血熱	0	0					
高病原性鳥インフルエンザ	0	0					
炭疽	0	0					
つつが虫病	296	19	18		1		
デング熱	45	5		5			
ニパウイルス感染症	0	0					
日本紅斑熱	67	0					
日本脳炎	5	0					
ハンタウイルス肺症候群	0	0					
ブルセラ症	0	0					
発しんチフス	0	0					
ボツリヌス症	0	0					
マラリア	73	8	1	6	1		
野兔病	0	0					
ライム病	4	0					
リッサウイルス感染症	0	0					
レジオネラ症	162	2		1		1	
レプトスピラ症	18	1				1	

《五類感染症》

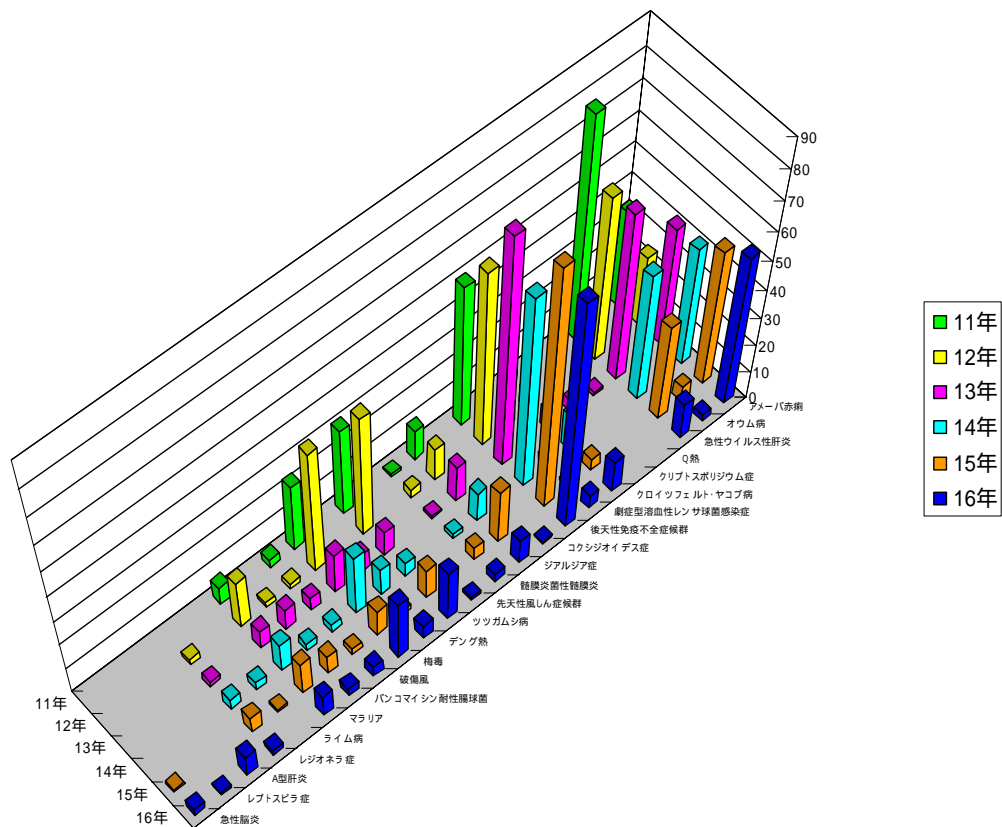
全数把握対象疾患 14 疾患のうち、県内で報告のあったのは 12 疾患であった。

アメーバ赤痢 53 例（県域 7 例、横浜市 27 例、川崎市 11 例、横須賀市 4 例、相模原市 4 例）、ウイルス性肝炎 13 例（県域 9 例、相模原市 4 例）、急性脳炎 3 例（横浜市 1 例、横須賀市 2 例）、クロイツフェルトヤコブ病 11 例（県域 2 例、横浜市 5 例、川崎市 2 例、横須賀市 1 例、相模原市 1 例）、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 5 例（県域 2 例、横浜市 2 例、相模原市 1 例）、後天性免疫不全症候群 82 例（県域 22 例、横浜市 29 例、川崎市 19 例、横須賀市 3 例、相模原市 9 例）、ジアルジア症 9 例（県域 1 例、横浜市 6 例、横須賀市 2 例）、髄膜炎菌性髄膜炎 3 例（県域 1 例、川崎市 2 例）、先天性風しん症候群 1 例（県域）、梅毒 22 例（県域 5 例、横浜市 7 例、川崎市 4 例、横須賀市 3 例、相模原市 3 例）、破傷風 4 例（県域 2 例、横浜市 1 例、川崎市 1 例）、バンコマイシン耐性腸球菌感染症が 3 例（県域）であった。

（1） 患者発生数

疾患名	全国	神奈川県	(県域)	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)
アメーバ赤痢	580	53	7	27	11	4	4
ウイルス性肝炎	299	13	9				4
急性脳炎	157	3		1		2	
クリプトスポリジウム症	91	0					
クロイツフェルト・ヤコブ病	167	11	2	5	2	1	1
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	53	5	2	2			1
後天性免疫不全症候群	1,119	82	22	29	19	3	9
ジアルジア症	85	9	1	6		2	
髄膜炎菌性髄膜炎	22	3	1		2		
先天性風しん症候群	10	1	1				
梅毒	516	22	5	7	4	3	3
破傷風	100	4	2	1	1		
バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	0	0					
バンコマイシン耐性腸球菌	49	3	3				

四類・五類感染症患者発生の推移

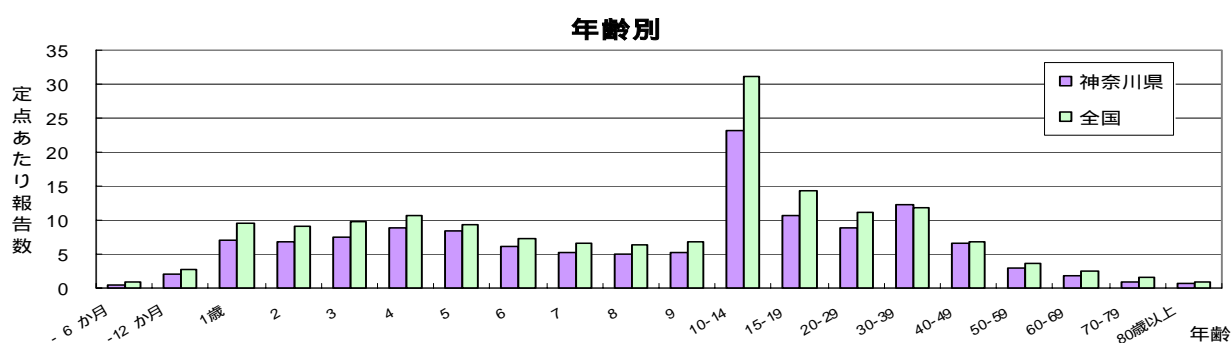
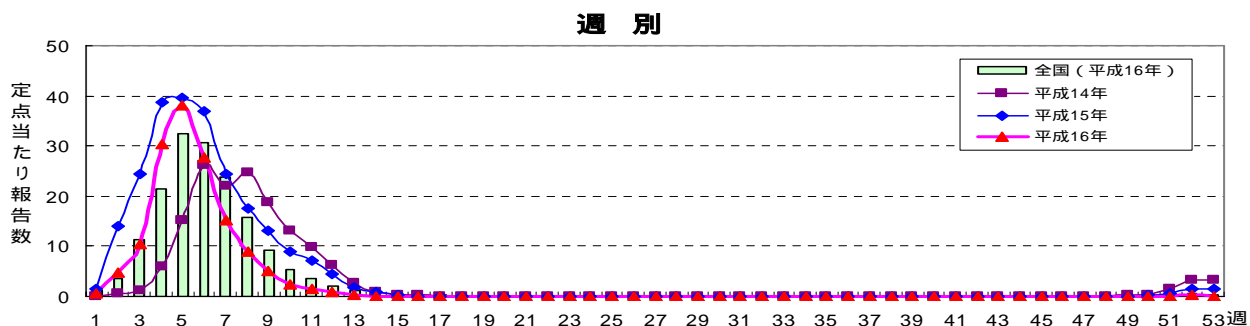


	11年	12年	13年	14年	15年	16年
アメーバ赤痢	34	25	42	42	48	53
オウム病					5	2
ウイルス性肝炎	78	58	59	45	34	13
Q熱			1			
クリプトスポリジウム症			4			
クロイツフェルト・ヤコブ病	5	7	7	13	4	11
劇症型溶血性レンサ球菌感染症		4	2	3	1	5
後天性免疫不全症候群	51	63	82	69	86	82
コクシジオイデス症						1
ジアルジア症	11	12	13	11	20	9
髄膜炎菌性髄膜炎	1	3	1	2	5	3
先天性風しん症候群						1
つつが虫病	32	45	9	5	11	19
デング熱			7	10	2	5
梅毒	25	46	15	23	10	22
破傷風	3	2	5	3	2	4
バンコマイシン耐性腸球菌		2	8	3	7	3
マラリア	7	18	7	11	12	8
ライム病				3	1	
レジオネラ症		2	2	4	6	2
A型肝炎						8
レプトスピラ症						1
急性脳炎					1	3
合計	247	287	264	247	255	255

週報対象疾患（週別は横浜市・川崎市を除く）

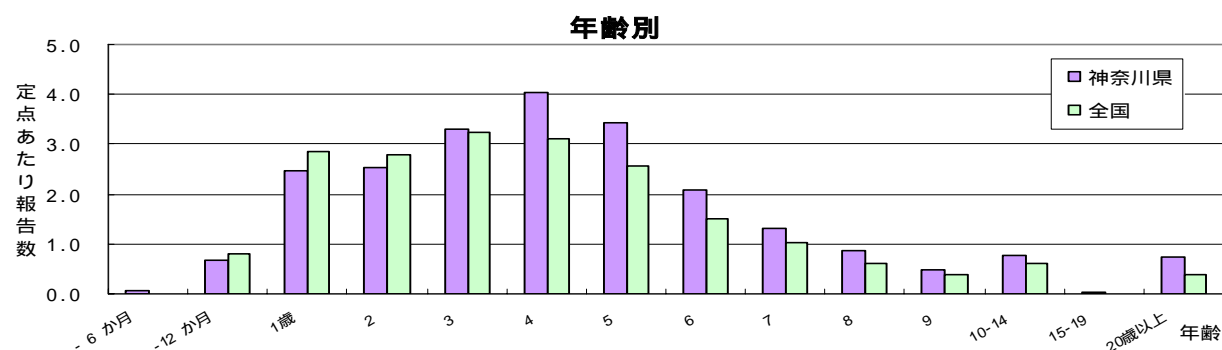
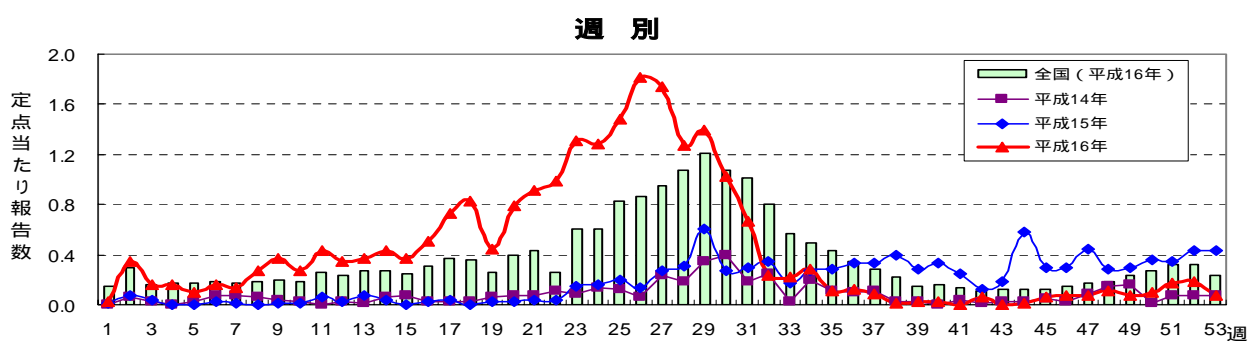
インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）

平成16年は5週にピークがみられその後全国定点あたり報告数を下回った。年齢では10～14歳に報告が多くみられた。



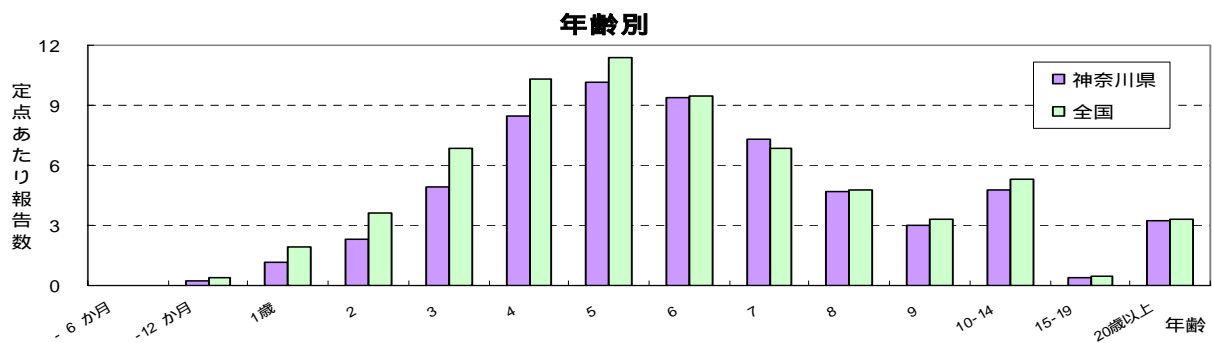
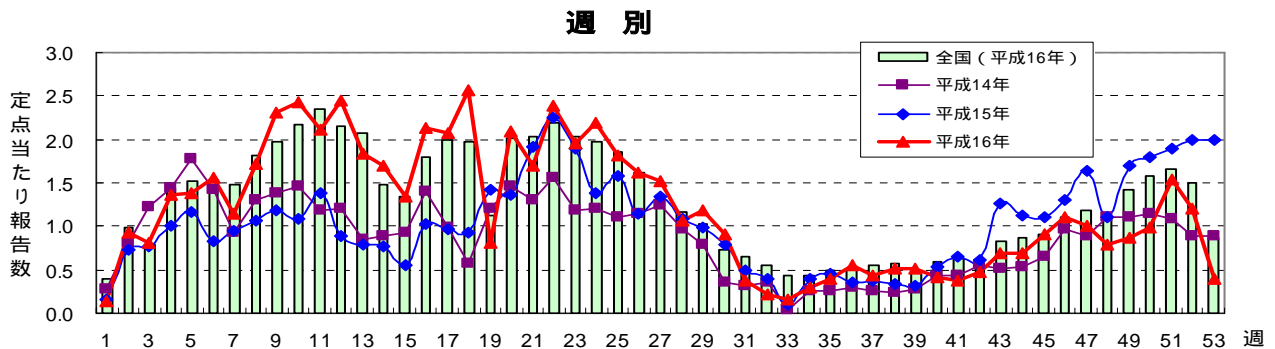
咽頭結膜熱

平成16年は例年と異なり26週がピークとなった。年齢では例年同様6歳以下に多く報告がみられた。



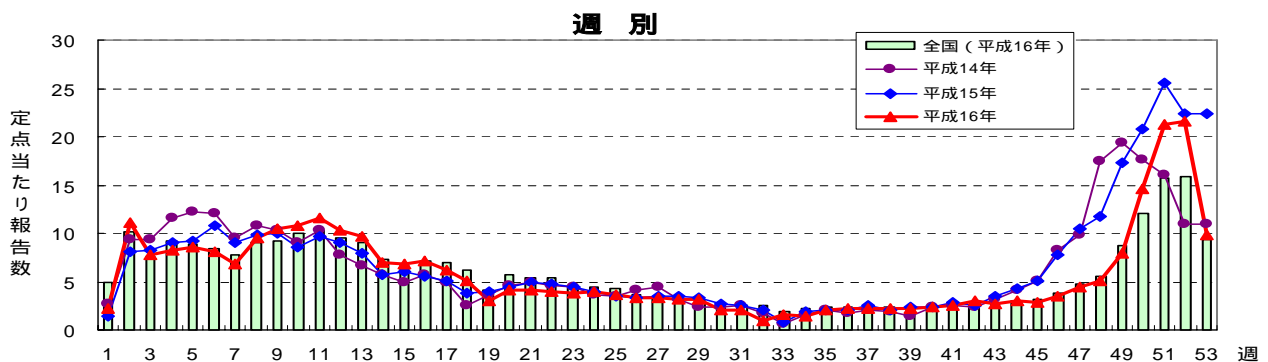
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成16年は4週から27週にかけて断続的な小流行がみられた。年齢は10歳代以下でほとんどが占められていた。

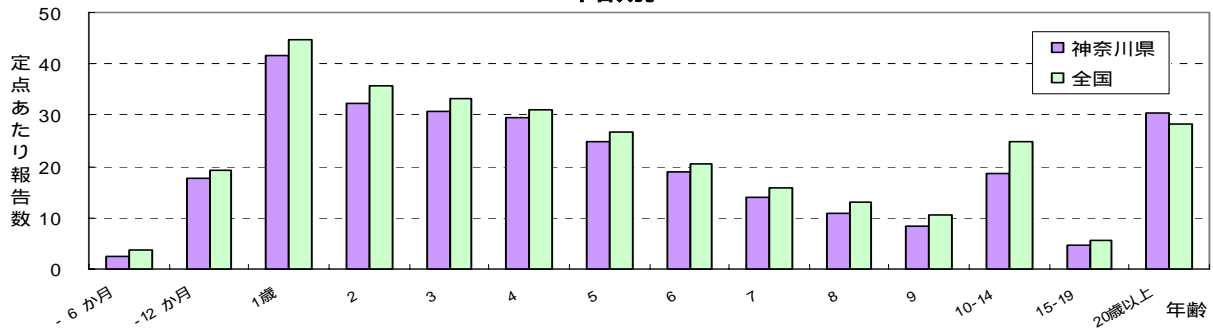


感染性胃腸炎

週別、年齢別とも例年同様の傾向がみられた。52週にピークがあり全国状況とほぼ同様であった。



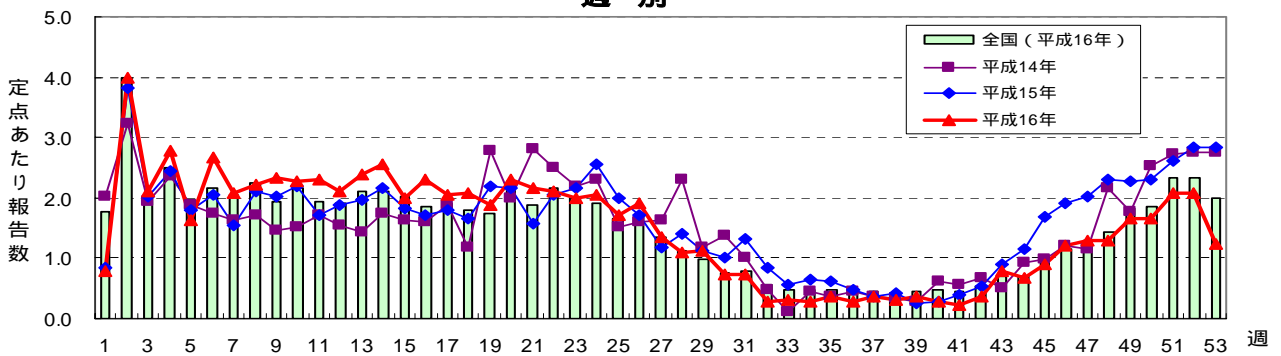
年齢別



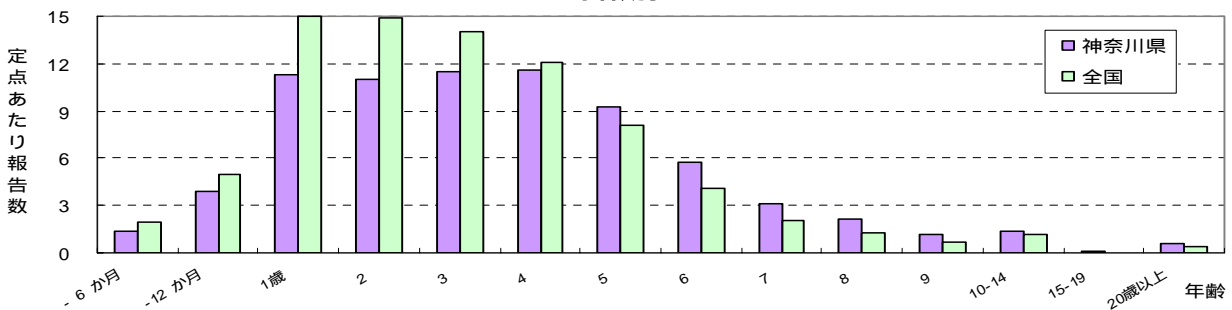
水痘

例年、年末から初夏にかけて流行がみられる疾患である。全国とほぼ同様の発生傾向で推移した。

週別

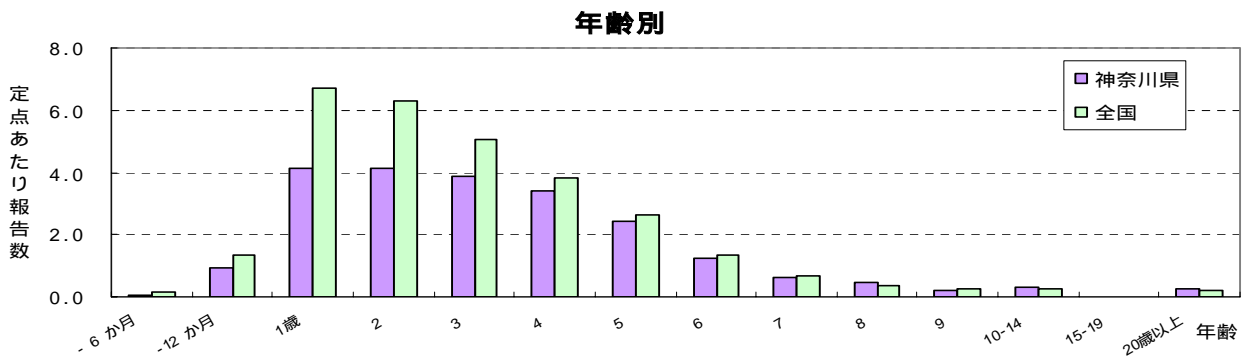
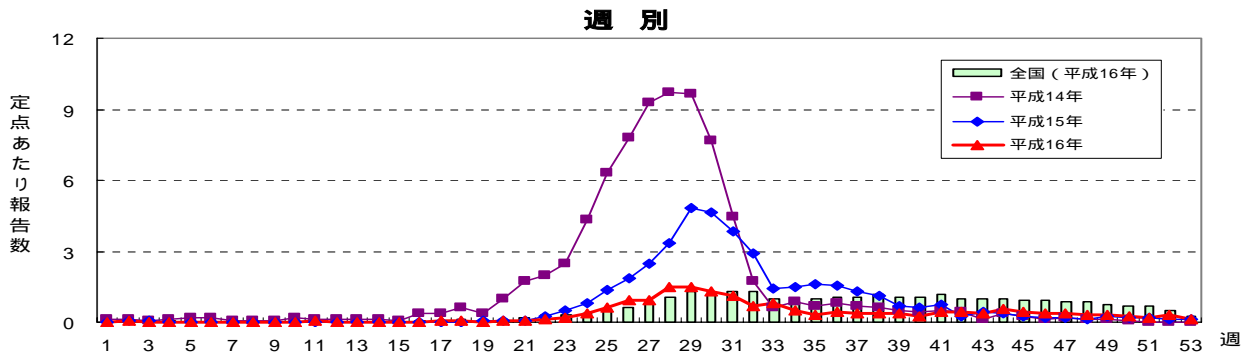


年齢別



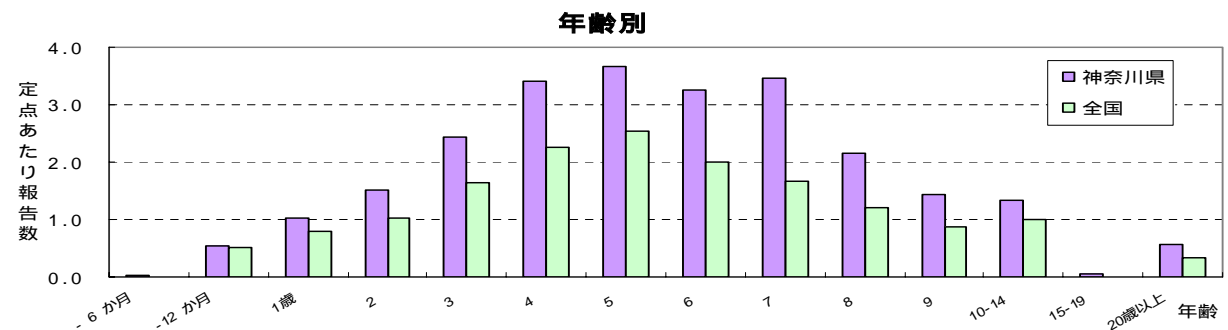
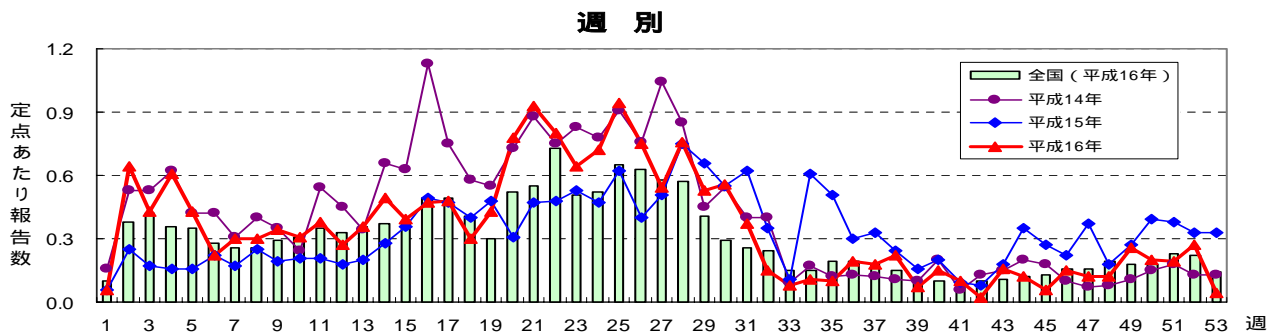
手足口病

全国と同様の傾向を示し、平成16年は大きな流行はない。年齢は5歳以下がほとんどを占めていた。



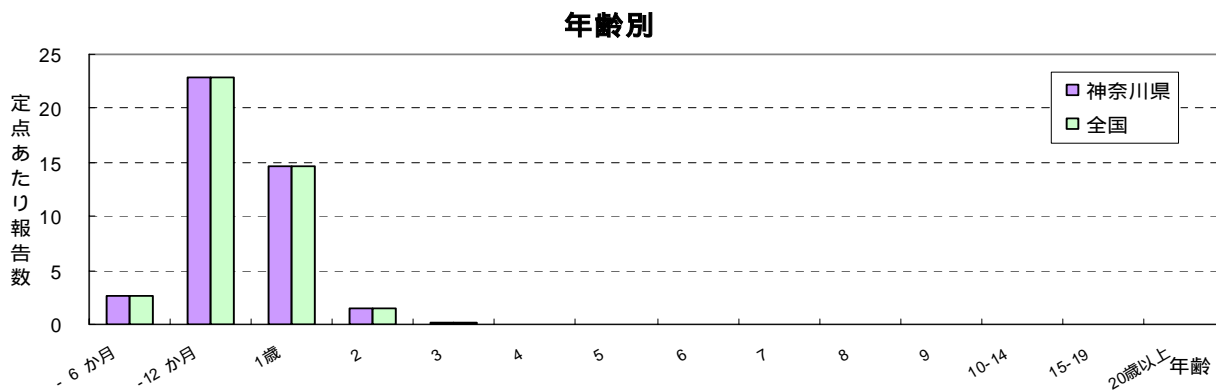
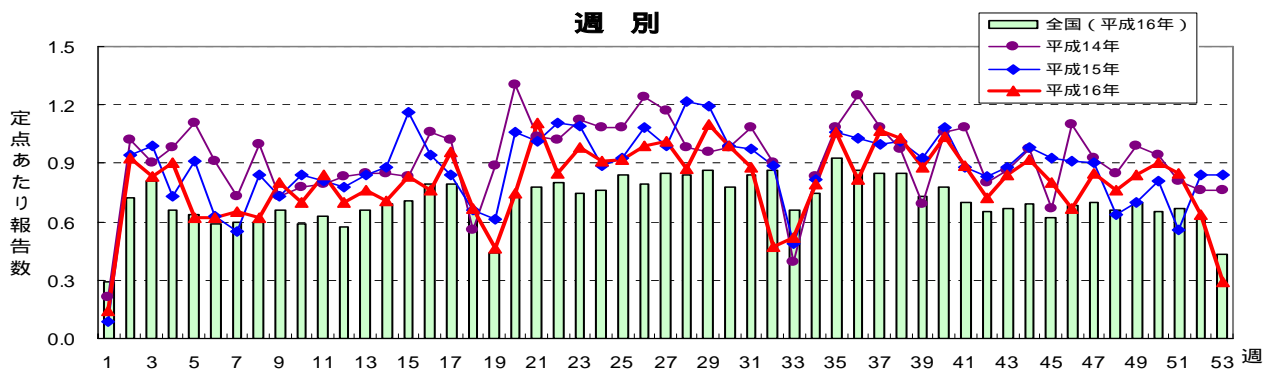
伝染性紅斑

例年、春から初夏にかけて流行がみられ、平成16年には25週にピークがみられた。年齢は10歳代がほとんどを占め全国平均を上回っていた。



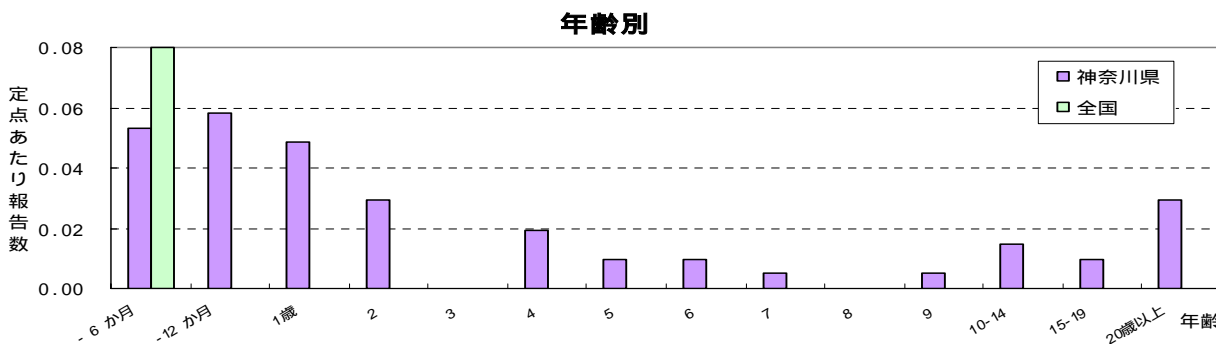
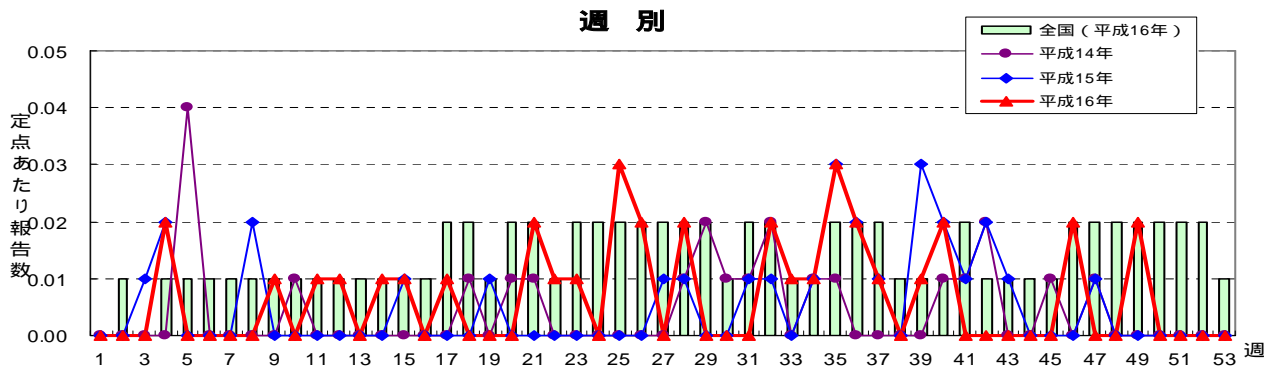
突発性発しん

ほとんど季節変動はなく、年間を通して流行がみられる。全国に比べやや高い傾向がみられた。



百日咳

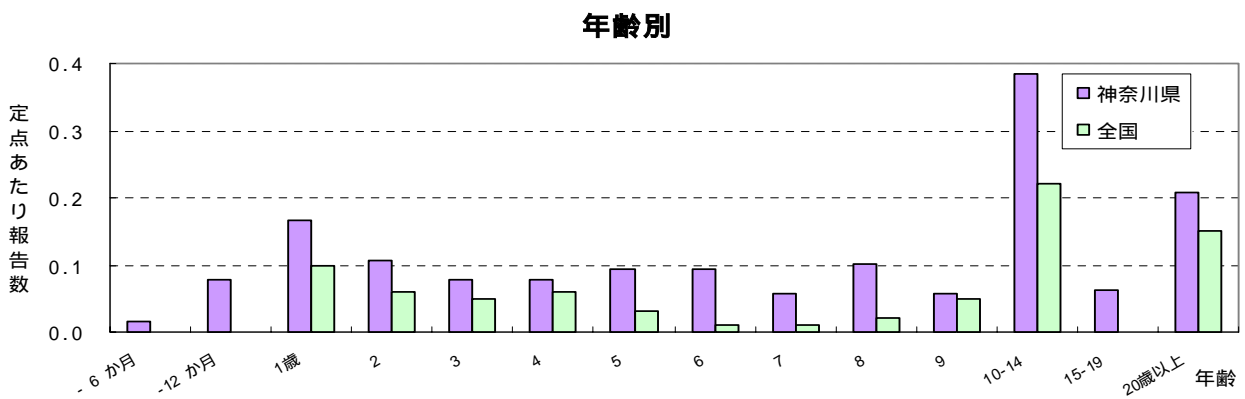
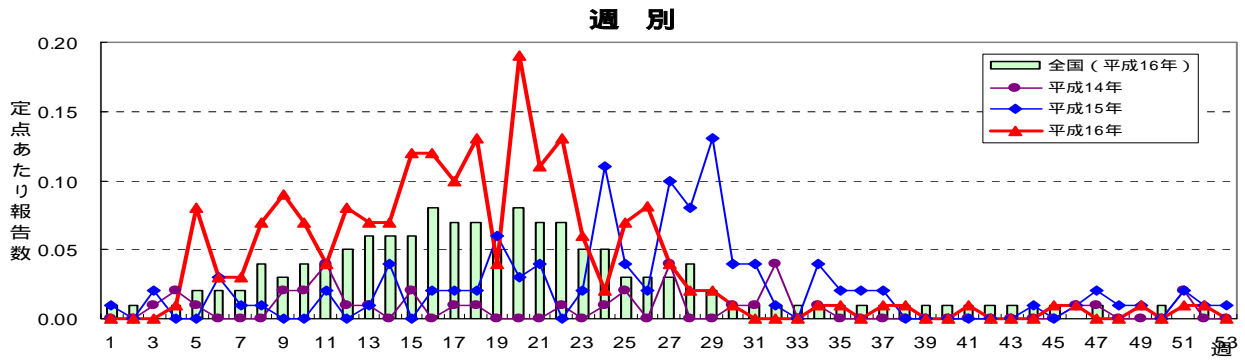
年間を通じ散発的な発生がみられた。



風しん

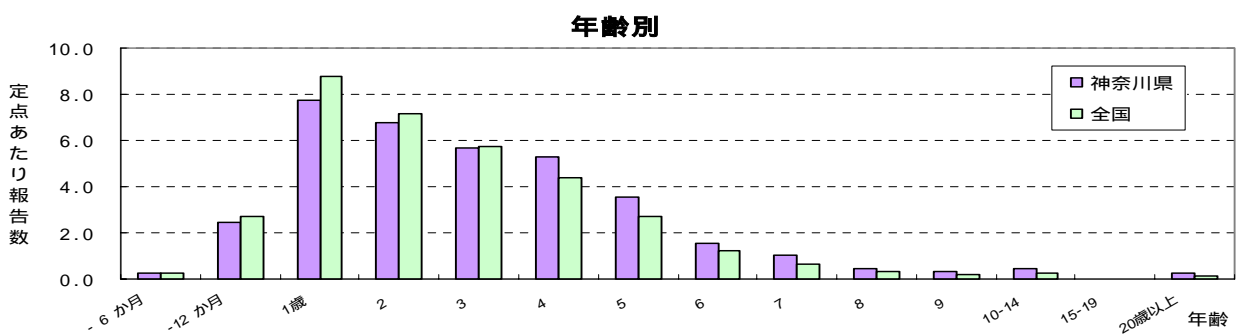
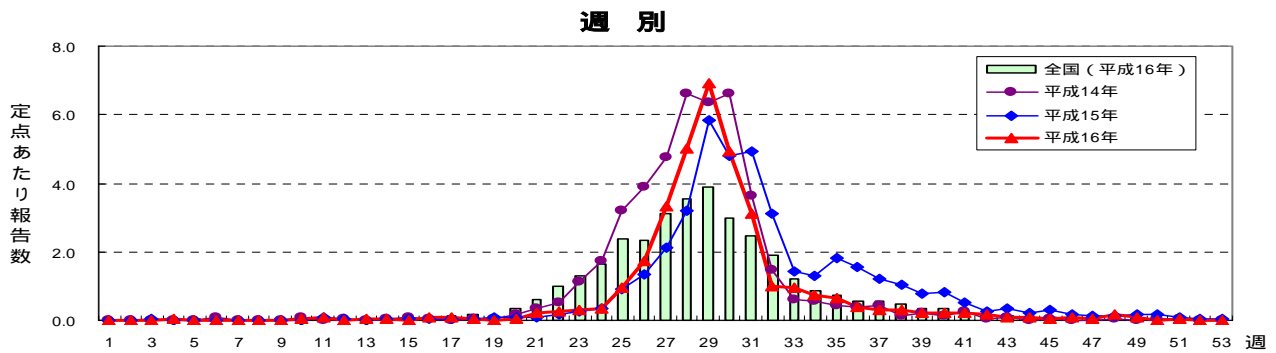
平成16年は5～27週で全国状況を上回り20週にピークがみられた。平成16年は10歳以上で多くみ

られた。



ヘルパンギーナ

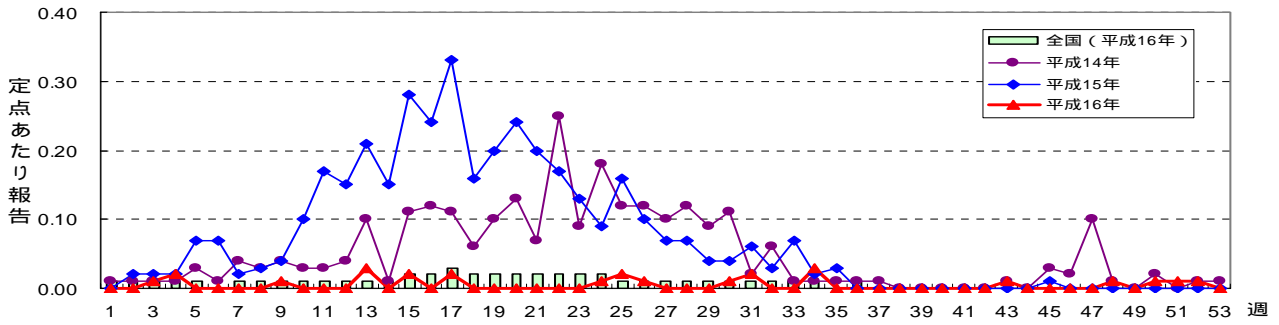
例年、夏季に流行がみられている。平成 16 年も 29 週にピークがみられた。年齢は 10 歳以下で多く占められる。



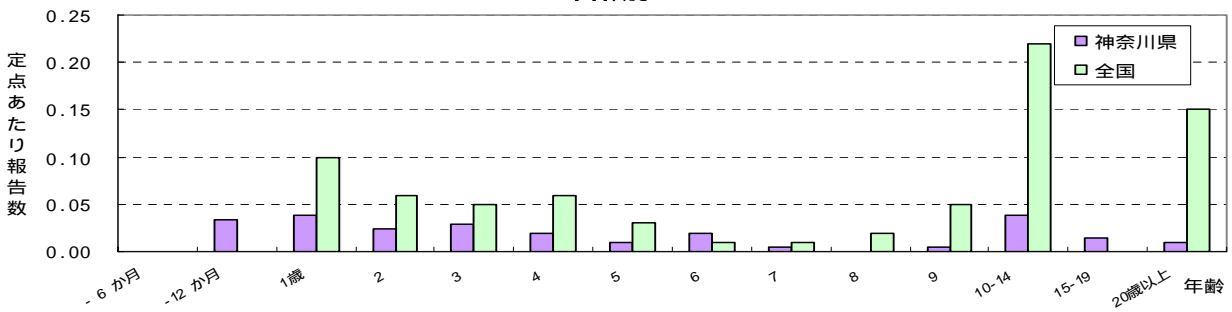
麻疹(成人麻疹を除く)

平成16年は目立った流行は見られなかった。

週報



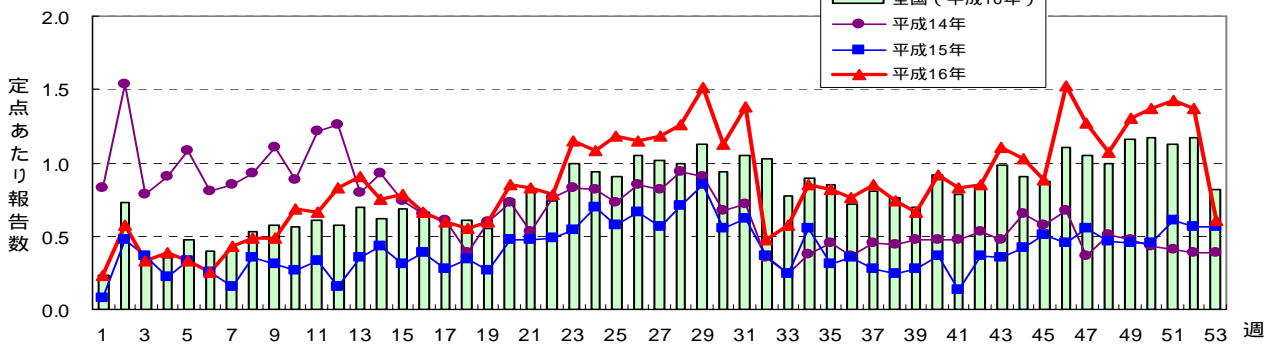
年齢別



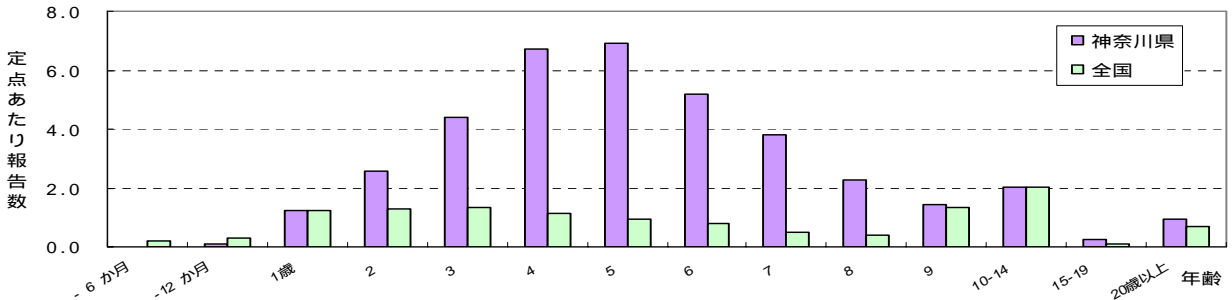
流行性耳下腺炎

平成16年は全国とほぼ同様な発生傾向を示したが、目立った流行はなく、全国平均を上回っていた。

週別

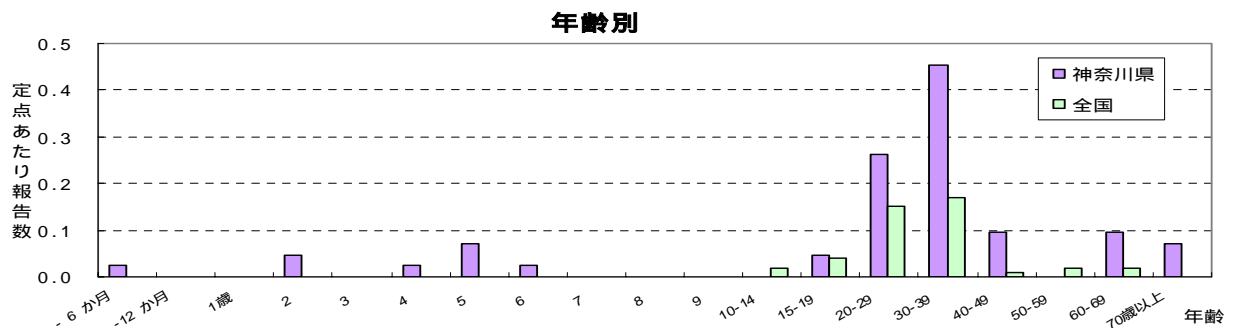
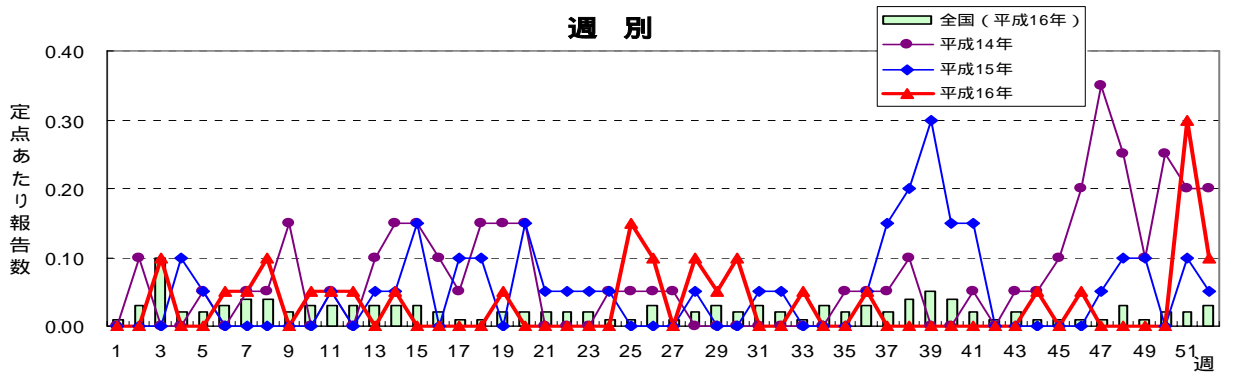


年齢別



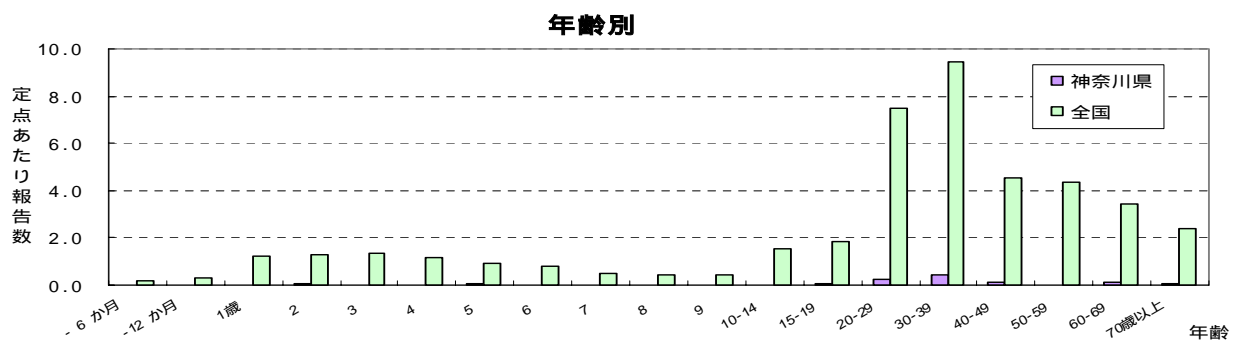
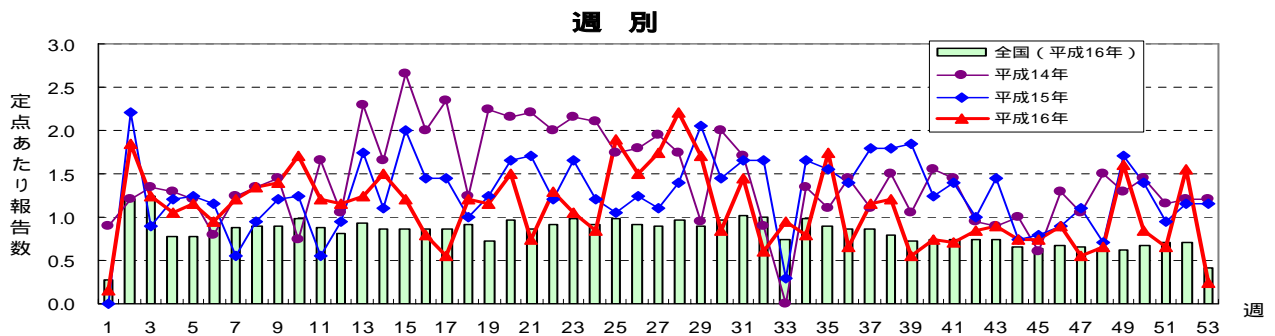
急性出血性結膜炎

散発的な報告がみられ、成人における報告が多いのが特徴である。



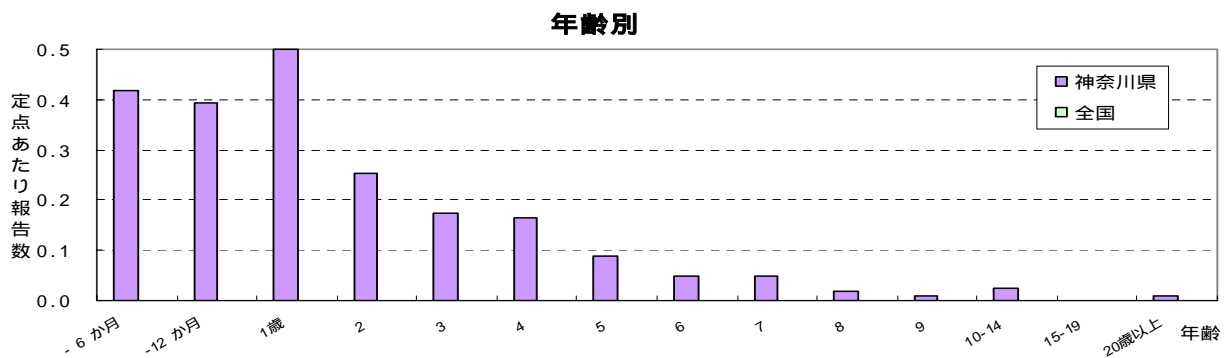
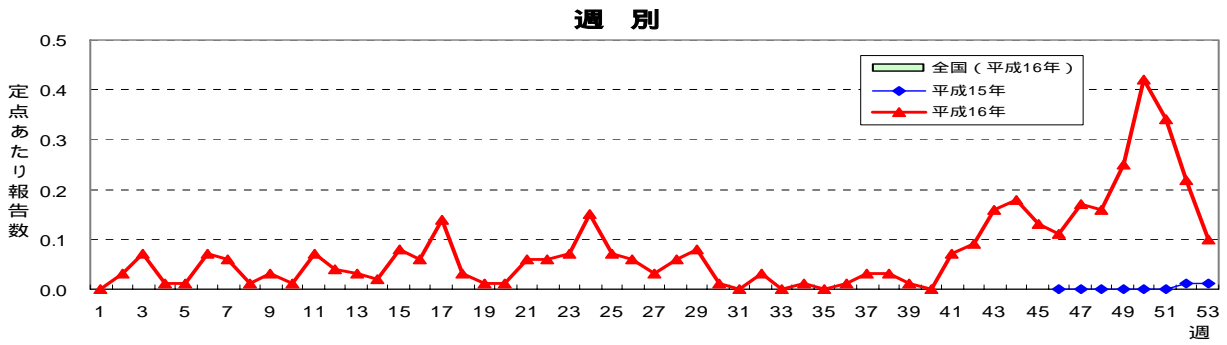
流行性角結膜炎

平成16年は目立った流行はなかったが、20歳から30歳代に集中していた。



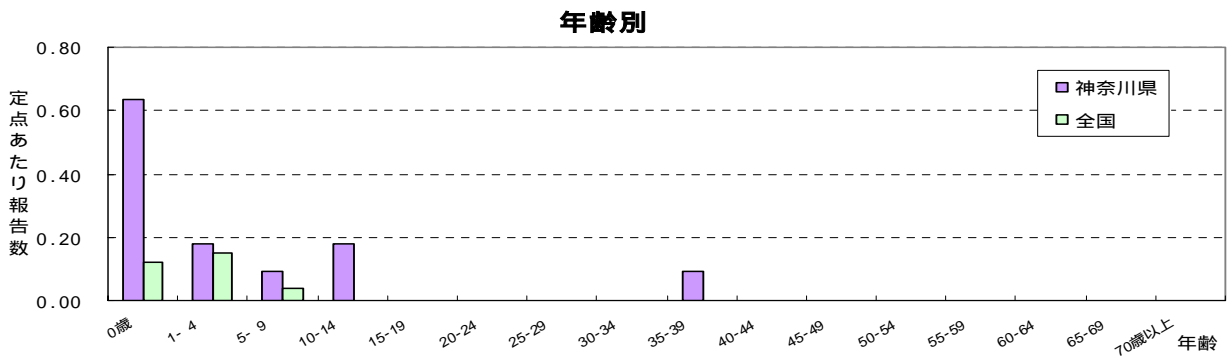
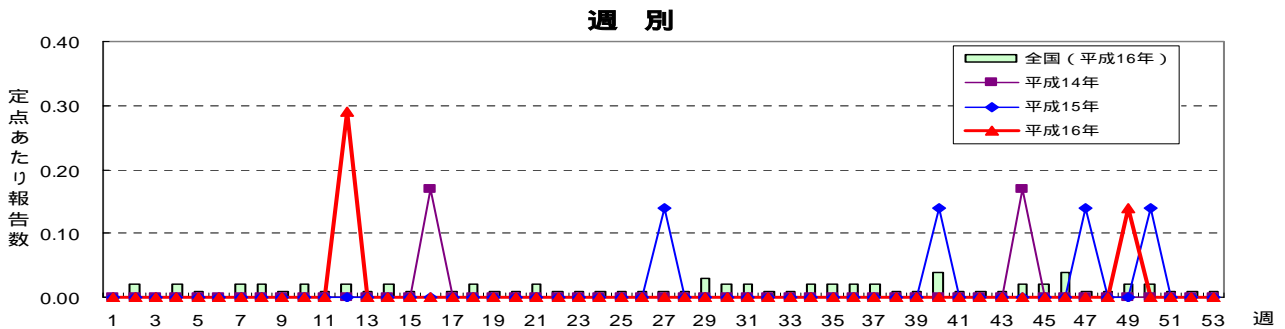
RS ウイルス感染症

平成 15 年 11 月から定点報告の感染症となった。51 週にピークがあり年齢は 10 歳以下で占められている。



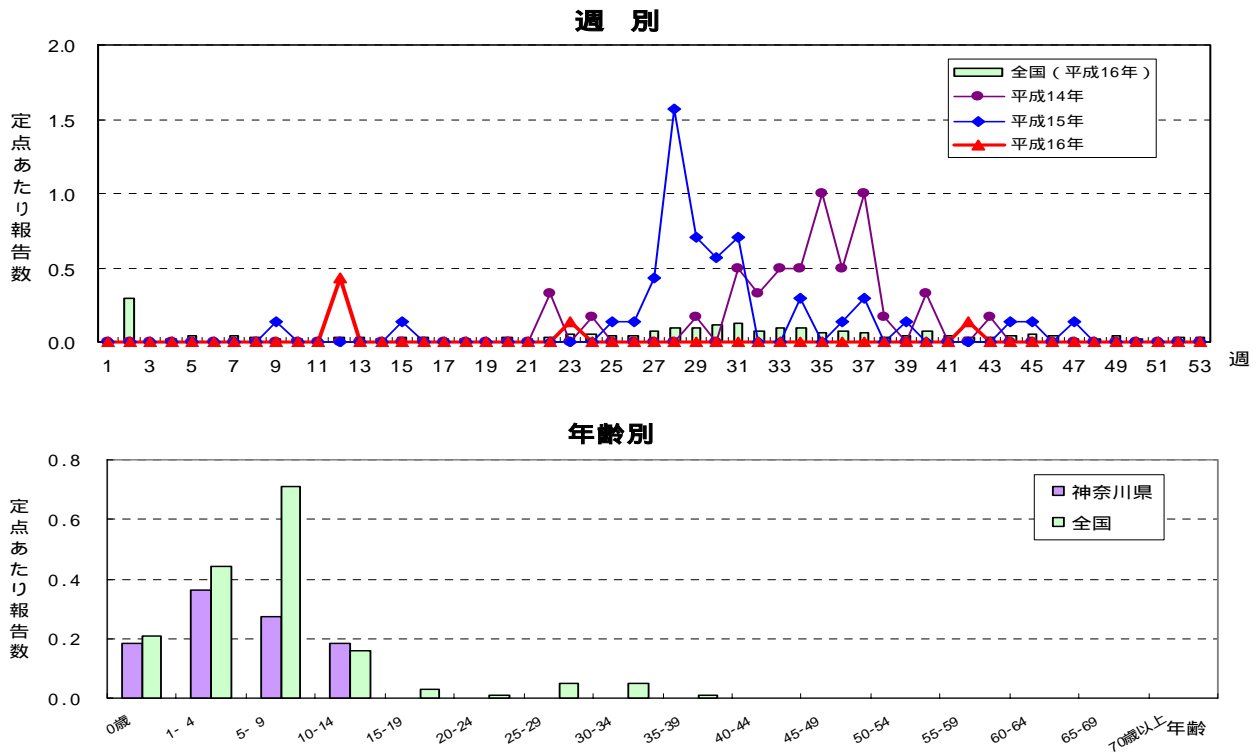
細菌性髄膜炎 (真菌性を含む)

平成 16 年は 12 週と 49 週に報告がみられた。



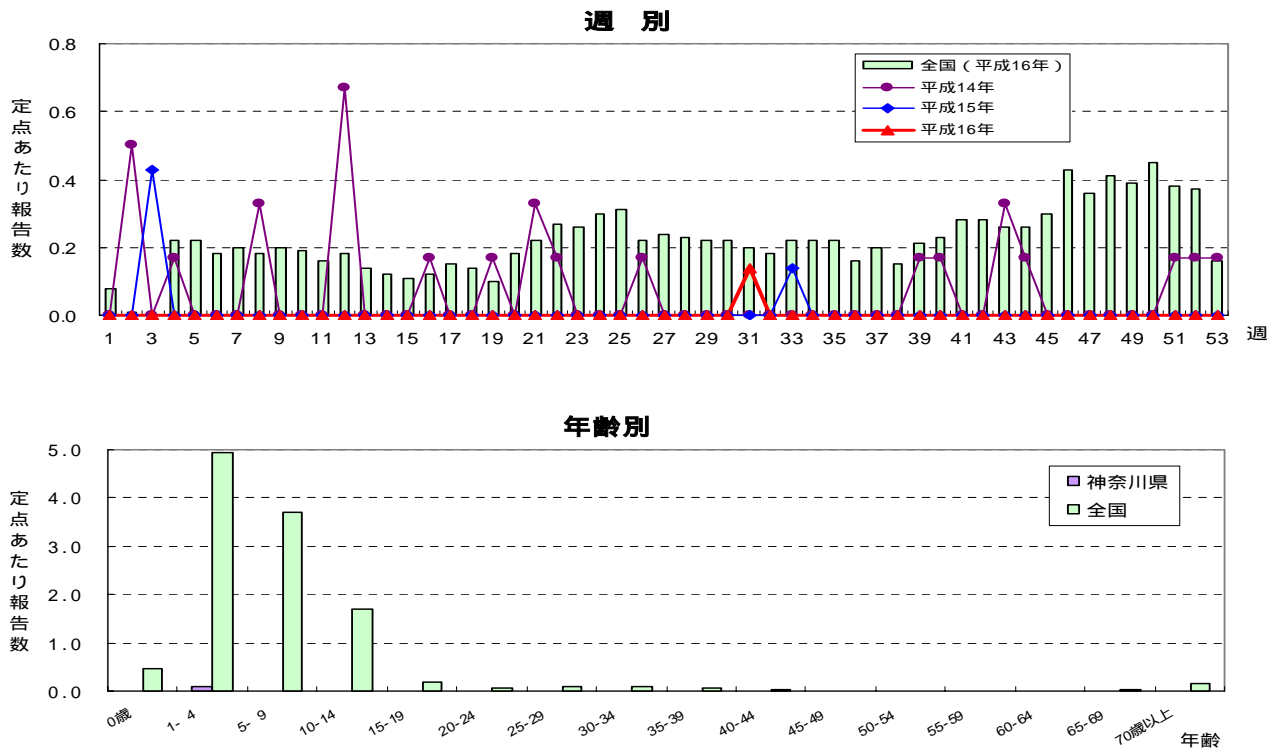
無菌性髄膜炎

年間を通じた散発的な発生がみられ、ほとんどが10歳以下にみられた。



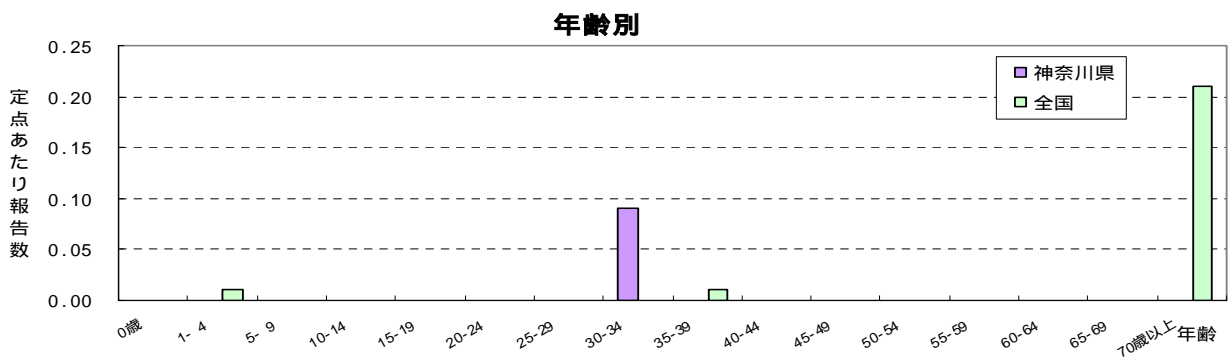
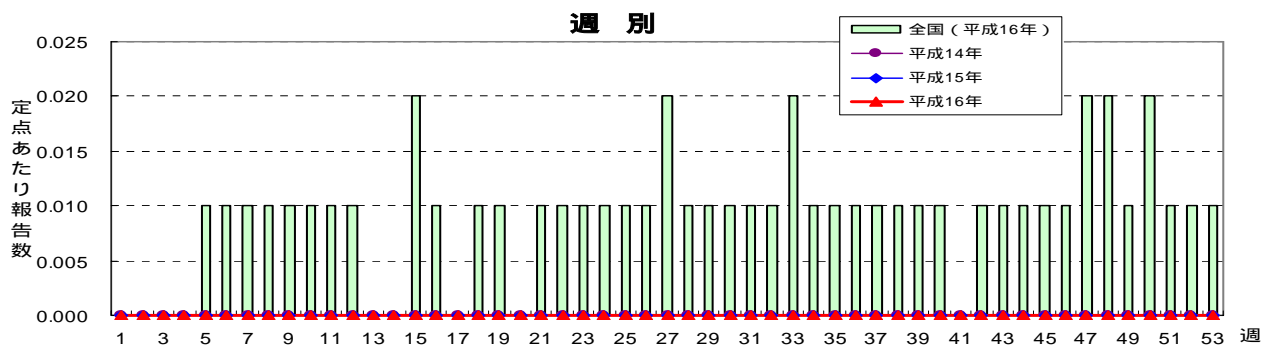
マイコプラズマ肺炎

例年、秋から初冬に報告が増加する傾向がうかがわれ、年齢では若年層に多くみられた。



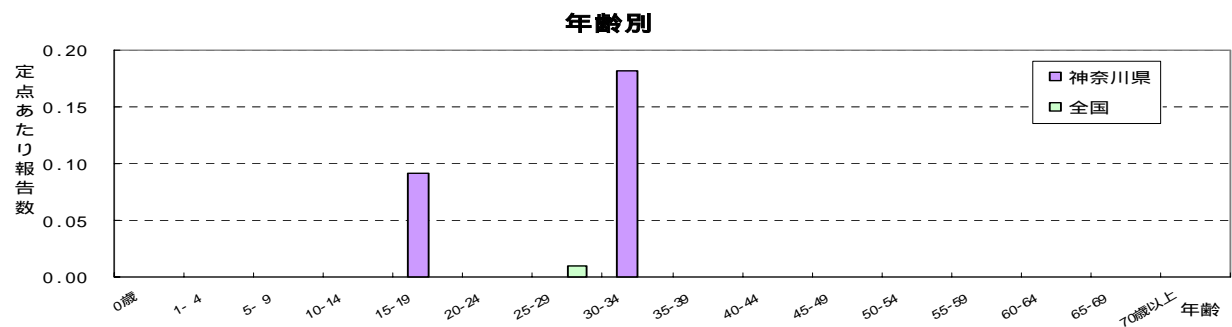
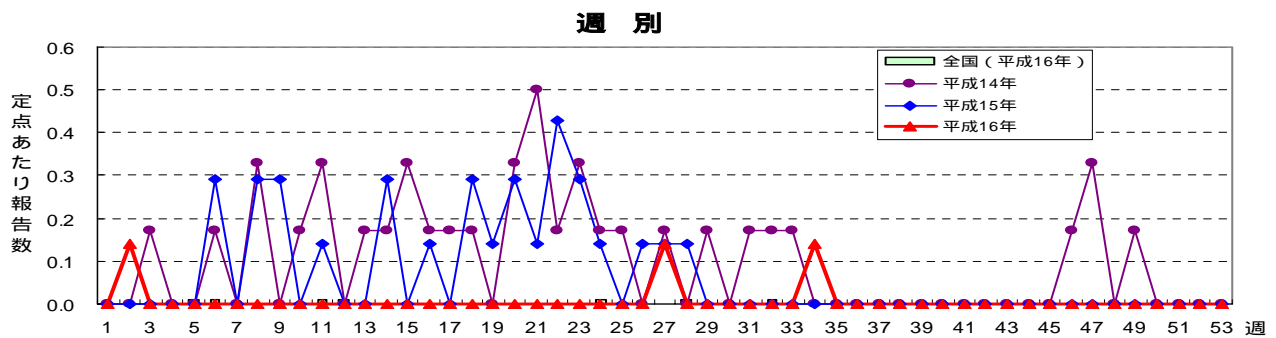
クラミジア肺炎(オウム病を除く)

平成16年は、県域での発生報告はなかった。



成人麻しん

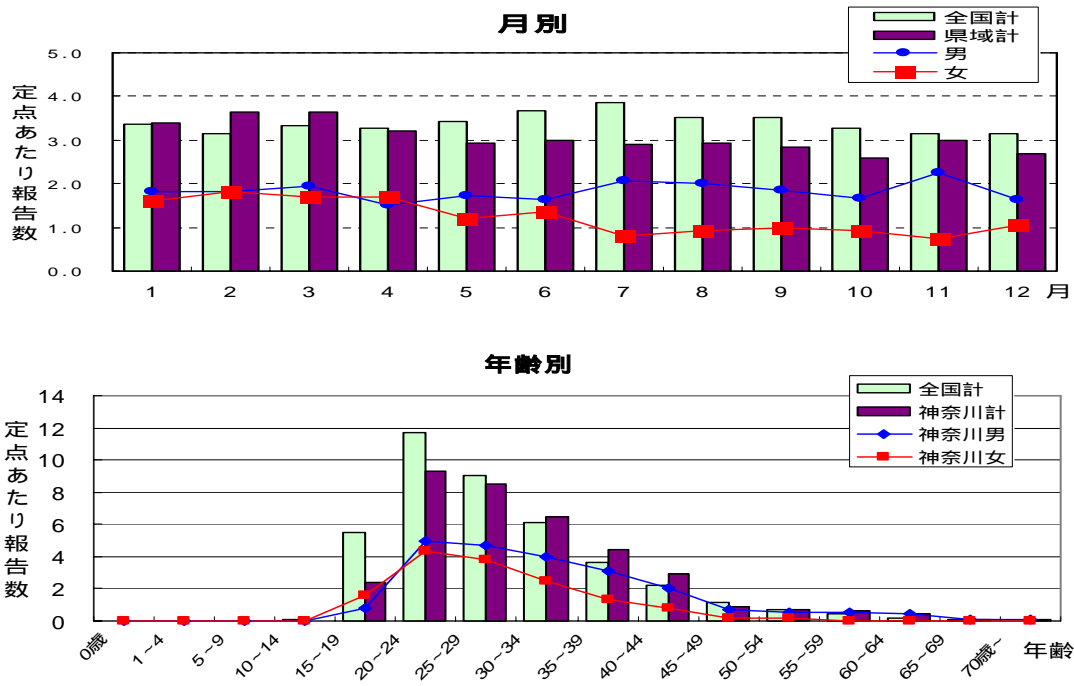
年間を通じ散発的に報告がみられた。



月報対象疾患（月別は横浜市・川崎市を除く）

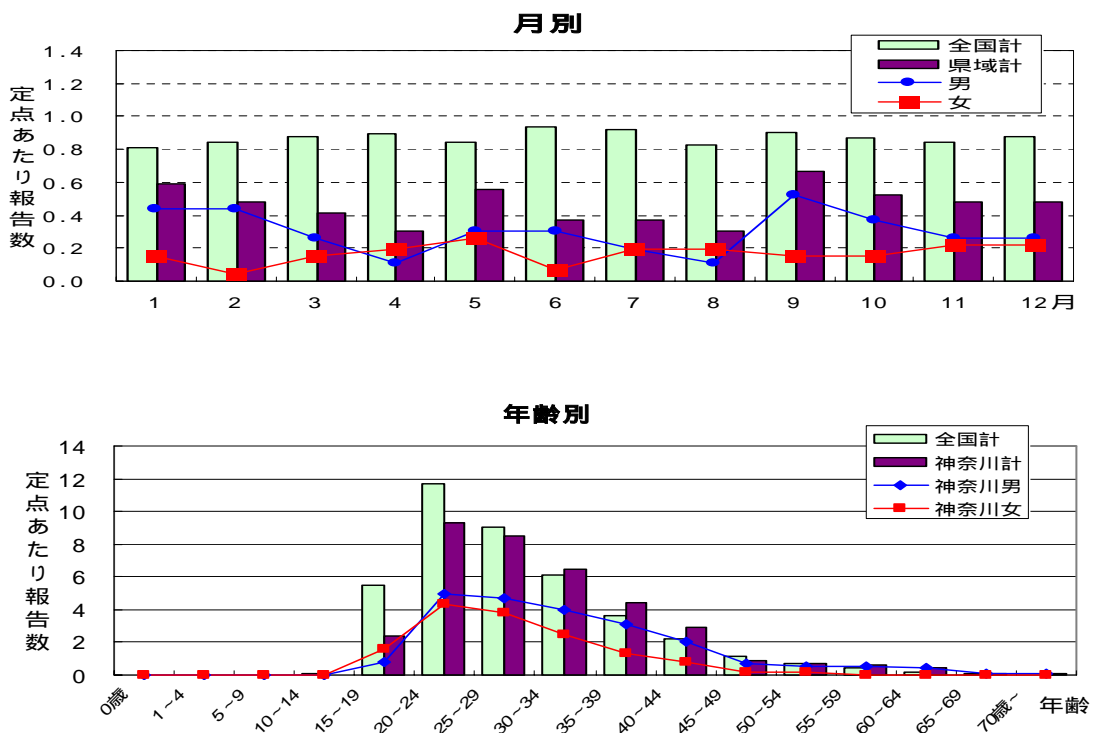
性器クラミジア感染症

年間を通じて報告数に大きな差がみられなかった。年齢別では青年層に多く女性の若年化傾向がうかがわれた。



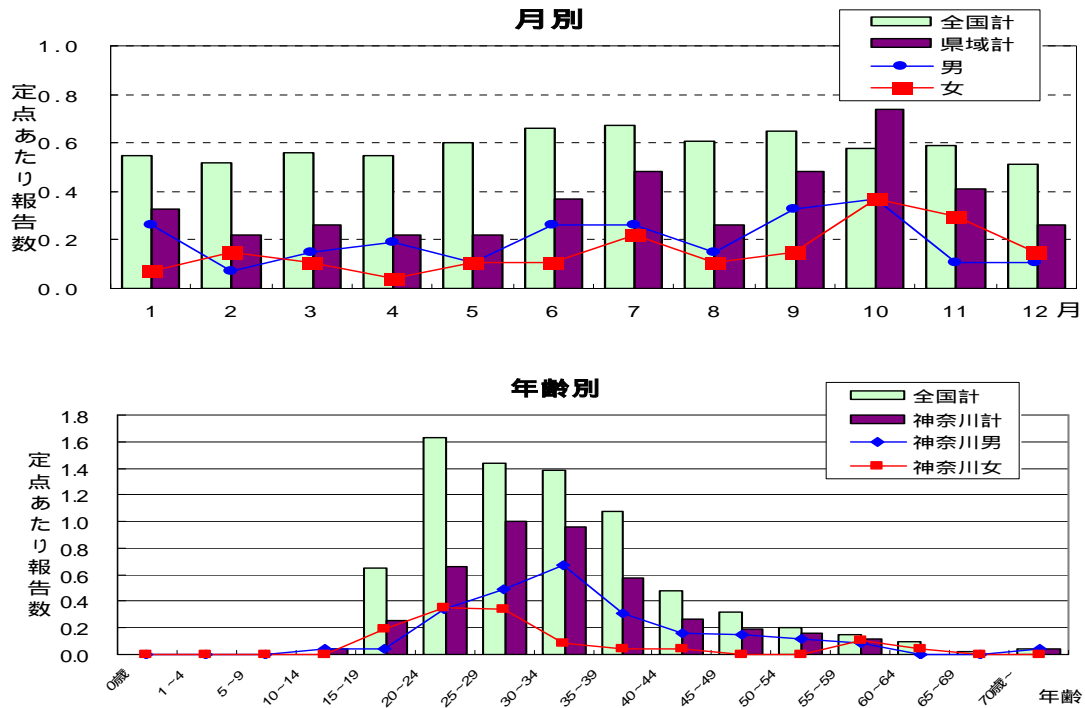
性器ヘルペスウイルス感染症

1月と9月にピークが見られたが、年間を通して報告が見られた。年齢別で女性の若年化傾向が見られた。



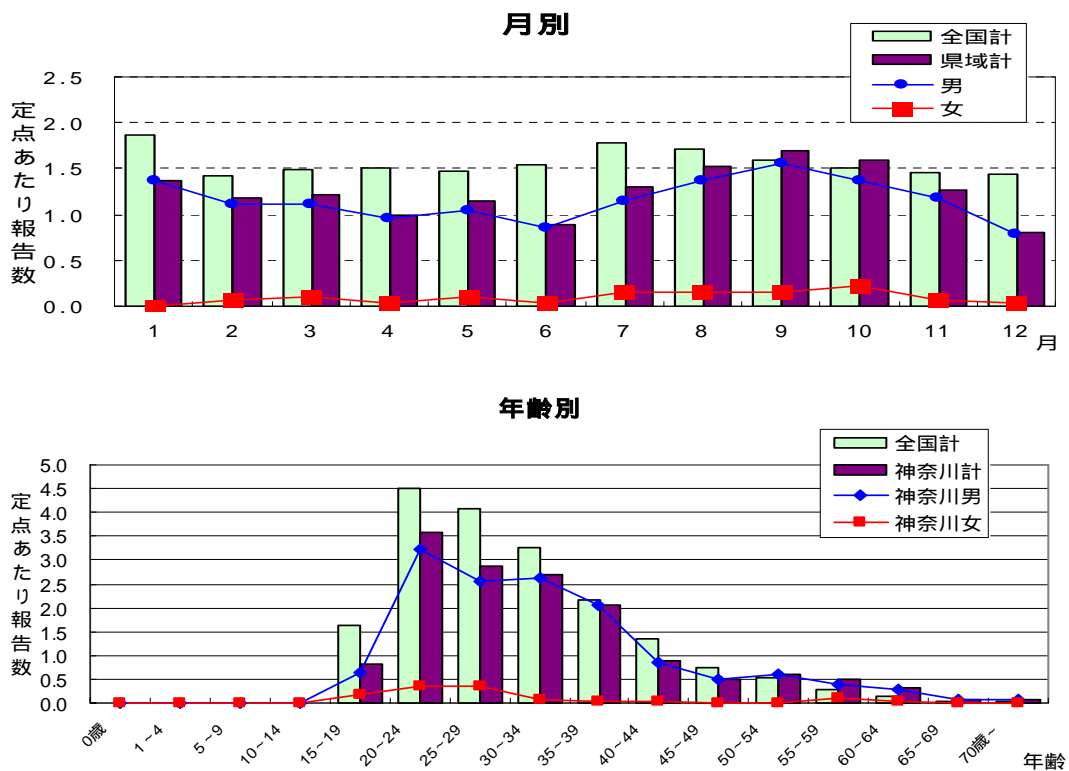
尖圭コンジローマ

10月に報告数のピークが見られた。年齢別では女性の若年化が進み報告数が多く見られている。



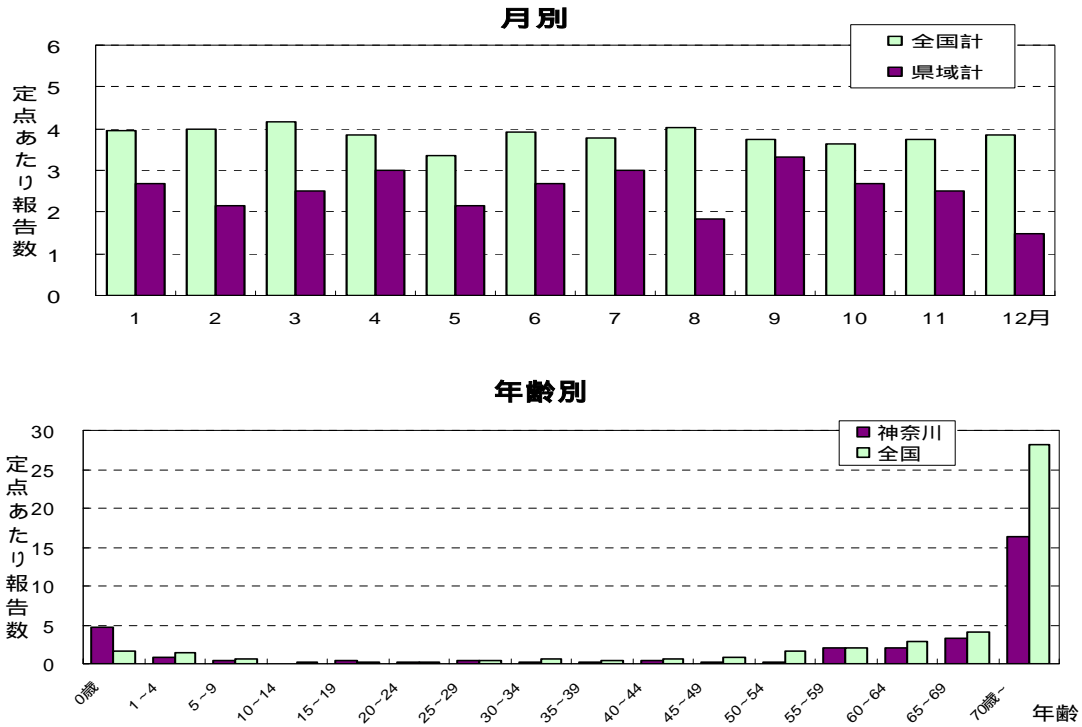
淋菌感染症

男女別で、例年同様圧倒的に男性の報告が多く女性は非常に少ない傾向を示した。



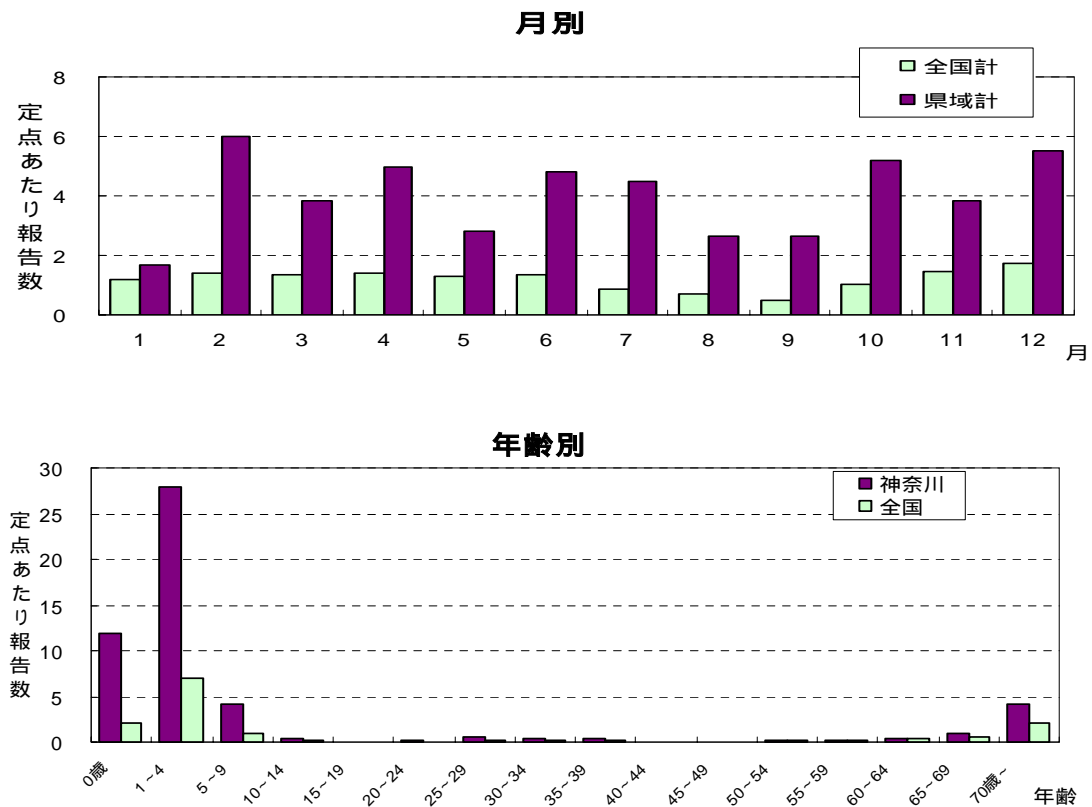
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

通年報告が見られ、年齢別でも幼児と高齢者の報告が顕著であった。



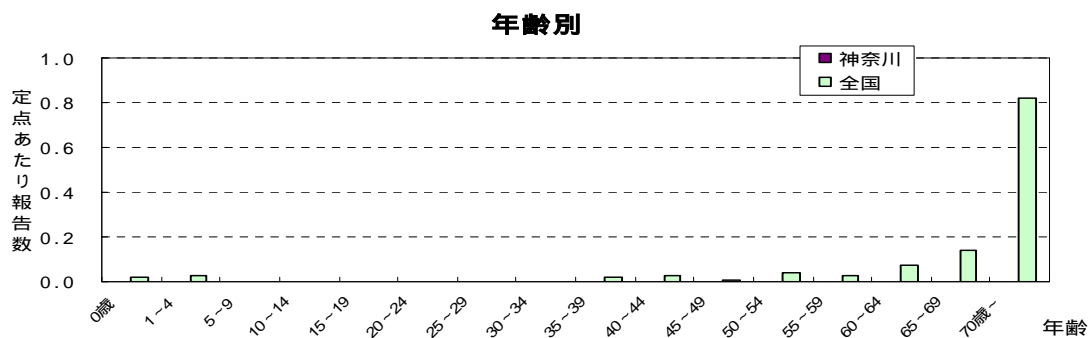
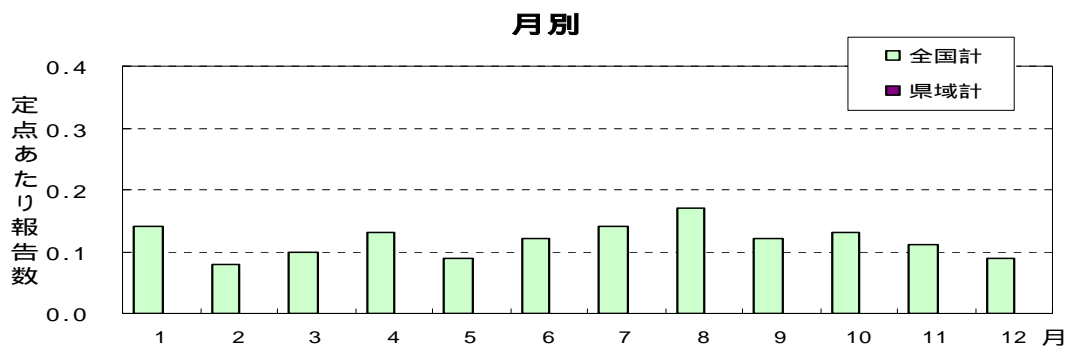
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

1月に報告数の減少がみられたが、年間を通して報告が見られた。年齢別では乳幼児に多く見られた。



薬剤耐性緑膿菌感染症

県域での報告はなかった。



細菌性感染症

1 腸チフス・パラチフス

(1) 発生状況

腸チフスは県内で 8 例の報告があり、その内訳は県域 1 例、横浜市 3 例、川崎市 4 例であった。

パラチフスは県内で 7 例の報告があり、その内訳は県域 3 例、横浜市 2 例、川崎市 1 例、相模原市 1 例であった。

(2) チフス菌等のファージ型別結果（神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市）

平成 16 年 1 月～12 月の間に神奈川県内で分離されたチフス菌は以下のとおりである。

表 神奈川県内で分離されたチフス菌等のファージ型別結果

番号	分離機関	分離月日	性別	年齢	菌種	ファージ型	備考
1	神奈川県衛生研	4.12	女	29	チフス菌	E1	海外渡航歴なし
2	神奈川県衛生研	4.27	男	54	パ ^ラ チフスA菌	1	ネ ^パ ールへ渡航
3	神奈川県衛生研	9.10	女	21	パ ^ラ チフスA菌	UT	インド ^ネ シアへ渡航
4	神奈川県衛生研	9.18	男	31	パ ^ラ チフスA菌	4	インド ^ネ シアへ渡航
5	横浜市衛生研	2.27	女	85	チフス菌	UVS4	海外渡航歴なし
6	横浜市衛生研	5.6	女	17	チフス菌	E9	パ ^ラ グ ^レ ー ^シ へ渡航
7	横浜市衛生研	9.27	男	20	パ ^ラ チフスA菌	UT	インド ^ネ シアへ渡航
8	横浜市衛生研	10.8	男	25	パ ^ラ チフスA菌	4	パ ^キ スタ ^ン へ渡航
9	横浜市衛生研	12.8	女	25	チフス菌	E1	インド ^ネ シアへ渡航
10	川崎市衛生研	3.22	男	66	チフス菌	E6	保菌者
11	川崎市衛生研	6.7	女	34	チフス菌	UVS1	インド ^ネ シアから来日
12	川崎市衛生研	6.23	男	28	パ ^ラ チフスA菌	2	インド ^ネ シアへ渡航
13	川崎市衛生研	8.23	男	23	チフス菌	UVS1	フィリ ^ピ ン ^シ ンへ渡航
14	川崎市衛生研	9.2	男	32	チフス菌	E1	カンボ ^ヂ ア ^シ アへ渡航
15	相模原市衛生研	11.19	男	31	パ ^ラ チフスA菌	4	インド ^ネ シアへ渡航

1. 神奈川県域（横浜・川崎市を除く）で分離されたチフス菌等のファージ型別結果

神奈川県衛生研究所

平成 16 年 1～12 月の間に分離されたチフス菌等は 4 件で、その内訳はチフス菌 1 件、パラチフス A 菌 3 件であった（表）。

チフスの発生地区は茅ヶ崎保健福祉事務所管内で、渡航歴のない患者血液から分離され、チフス菌のファージ型は E1 であった。患者家族は度々ベトナムへ渡航していることから、持ち帰った食品等による感染が疑われた。

パラチフスの発生地区は、秦野保健福祉事務所管内、厚木保健福祉事務所管内および相模原市において各 1 件で患者にはいずれも海外渡航歴があり、渡航先はネパール、インド、インドネシアであった。秦野および厚木保健福祉事務所管内の患者は各々血液からパラチフス A 菌が分離され、ファージ型は 1 型および型別不能（各 1 件）であった。相模原市の患者は便からパラチフス A 菌が分離され、ファージ型は 4 型であった。

（鈴木理恵子、高橋孝則、新川隆康）

2. 横浜市で分離されたチフス菌等のファージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成 16 年 1 月～12 月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は 3 件で、パラチフス A 菌は 2 件であった。チフス菌 1 株は、海外渡航歴がなく、胆汁から菌が検出されたことから胆のう内に保菌していたと思われた。他のチフス 2 株、パラチフス A 菌 2 株は海外旅行歴のある患者から分離されており、旅行先はインド、バングラデシュ、パキスタンであった。これらの菌が分離された検体は静脈血であった。情報とチフス菌のファージ型別内訳は表に示したとおりである。薬剤感受性は、インド、バングラデシュ渡航のチフス菌 2 株と、インド渡航のパラチフス A 菌 1 株は NA 耐性であった。バングラデシュ渡航のチフス菌は NA だけでなく CP、SM、ABPC、SXT にも耐性であった。

(松本裕子、山田三紀子、武藤哲典)

3. 川崎市で分離されたチフス菌等のファージ型別結果

川崎市衛生研究所

平成 16 年 1～12 月に川崎市内でチフス菌 4 件、パラチフス菌 1 件が分離された。詳細は表に示したとおりである。

(小嶋由香)

4. 相模原市で分離されたチフス菌等のファージ型別結果

相模原市衛生試験所

相模原市で分離されたパラチフス A 菌は、9 月 18 日(土)に J 病院にて同定された。その後、9 月 28 日(火)に国立感染症研究所細菌第一部へファージ型の検査依頼し、11 月 19 日(金)に分離菌株のファージ型 4 と判明した。

患者本人の行動については、平成 16 年 8 月 17 日(火)～23 日(月)までインドネシアへ旅行。その後、8 月 29 日(日)～9 月 10 日(金)まで中国(台湾等)へ出張し、出張中の 8 月 29 日から悪寒、頭痛、39 台の高熱の症状を呈した。また、その日は嘔吐 1 回、経口摂取困難あり。下痢は、一日数回あったとのこと。9 月 13 日(月)に同病院に入院し、点滴注射が開始された。9 月 14 日(火)以降、一転し、解熱傾向へ。その後、順調に軽快し、10 月 4 日、5 日、6 日の検便は全て陰性となり、終息に至った。

2 腸管病原菌検出状況

(1) 散発下痢症からの病原菌分離状況について

神奈川県衛生研究所

神奈川県における感染症発生動向調査の一環として、県内小児科医院一般検査定点の外来患者を対象に、感染性下痢症が疑われる患者の便材料について腸管系病原菌の検索を行った。平成16年1～12月の間に実施した10件の直接培養法での検索結果を表に示した。

腸炎起因菌として推定し得た症例および不確実ながらその疑いがある菌を検出した症例は、10症例中7症例(70.0%)あり、3症例(30.0%)は既知腸管系病原菌を検出できなかった。7症例から検出された菌種は、腸管病原性大腸菌(EPEC):4症例、カンピロバクター・ジェジュニ:2症例、エロモナス・キャビエ:2症例であった。なお、1症例からはカンピロバクター・ジェジュニおよびエロモナス・キャビエが同時検出された。

EPECの血清型はO1:2株、O159、O167:各々1株であり、これら分離株について志賀毒素(*Stx*)遺伝子の保持について検索したところ、いずれの株も*Stx*遺伝子は保持しておらず、三類感染症対象菌ではなかった。

(鈴木理恵子、三宅芳枝、高橋孝則、新川隆康)

表 散発下痢症における病原菌分離状況(平成16年)

推定原因菌	症例	(%)
腸管病原性大腸菌(EPEC)	4	57.1
カンピロバクター・ジェジュニ	2 ^a	28.6
エロモナス・キャビエ	2 ^a	28.6

a: 同時検出1例

(2) 横浜市における海外渡航者からの病原菌分離状況について

横浜市衛生研究所

昭和 54 年以来海外渡航者による腸管系病原菌の持ち込みを調査する目的で、市内在住の海外渡航者とその家族および接触者を対象とした病原菌検索を行っている。今回は、平成 16 年 1 月から 12 月までの 1 年間に取扱った検体 173 件のうち、2 回以上検査した者を除く 168 件の病原菌検査結果を報告する。

1. 検査方法

各種病原菌の分離・同定検査は前年と同じ検査方法で、大腸菌のエンテロトキシン検索は逆受身ラテックス凝集法および PCR 法で行った。なお腸管病原性大腸菌は、血清型のみでの検査である。

2. 結果および考察

168 件中 2 件(1.2%) から 3 株の病原菌が分離された。2 件ともフィリピンへの旅行者で、下痢を呈していた下痢現症者 1 名から *S.sonnei* 相が検出され、健康者 1 名から腸管病原性大腸菌 (O111:HNM) と *S.Anatum* が検出された。二類および三類感染症患者の家族、二類感染症患者の接触者として同職場の全職員の検査を行ったが、病原菌は検出されなかった。

以上の成績は実際に海外から持込まれていると予想される病原菌の一部に過ぎないと思われる。海外渡航者によってもたらされる腸管病原菌の国内における下痢症の流行への影響を考慮し、今後も検査を続けていきたい。

(山田三紀子、武藤哲典、北爪晴恵、鈴木正樹、松本裕子)

表 海外渡航者からの腸管系病原菌検出状況

被検者種別	下痢現症者	健康者	家族	接触者	合計
件数	6	52	26	84	168
陽性者数	1	1	0	0	2
菌株	1	2	0	0	3
毒素原性大腸菌	0	0	0	0	0
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	1	0	0	1
コレラ菌	0	0	0	0	0
腸炎ビブリオ	0	0	0	0	0
NAGビブリオ	0	0	0	0	0
ビブリオ・ミミクス	0	0	0	0	0
赤痢菌	1	0	0	0	1
パラチフスA菌	0	0	0	0	0
サルモネラ	0	1	0	0	1
カンピロバクター	0	0	0	0	0
プレジオモナス	0	0	0	0	0
エロモナス	0	0	0	0	0

(3) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況

川崎市衛生研究所

川崎市内の開業医師依頼の下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施しているが、今回は平成16年1～12月までの検査成績について報告する。

1. 材料と検査方法

材料は、市内医療機関に Cary-Blair の輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を經由して搬入された検体について検査を行った。

検査方法は、既報と同様である。

2. 結果及び考察

1) 病原菌検出状況

病原菌検出状況は表1に示すとおり、検体数685件中腸管病原菌陽性数110件(16.1%)であり、そのうちサルモネラ19件(2.8%)、腸管病原性大腸菌(EPEC)5件(0.7%)、腸管出血性大腸菌(EHEC)2件(0.3%)、腸炎ビブリオ6件(0.9%)、カンピロバクター・ジェジュニ79件(11.5%)、エロモナス・ソブリア1件(0.1%)の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニが71.8%を占め、下痢症患者の主要病原菌であった。同一患者から2菌種の病原菌が検出された事例は2事例みられた。

2) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表2に示すとおりである。

サルモネラは19株分離され、8血清型に型別された。*S. Enteritidis*が10株、*S. Infantis*が2株、*S. Thompson*が2株、*S. Agona*、*S. Brunei*、*S. Hadar*、*S. Stanley*、*S. Typhimurium*がそれぞれ1株ずつであった。

EPECは4血清型に型別され、0119が2株、044、0111、0142が1株ずつであった。

EHECは0157:H7(VT1+VT2)、026:H11(VT1)がそれぞれ1株ずつであった。

腸炎ビブリオは6株分離され、血清型はすべて03:K6であった。分離菌株の耐熱性溶血毒はすべて陽性であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が16.1%検出され、カンピロバクター・ジェジュニが11.5%と最も多く検出された。また、その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も細菌性下痢症の原因菌追究のため検査を強化していく必要があると思われる。

(小嶋由香、本間幸子、須藤始代、赤木英則、岡田京子、小川正之)

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況（平成16年）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	26	43	61	52	39	56	92	78	70	42	65	61	685
陽性数	1	4	4	9*	7	13	19*	23	11	10	5	4	110*
(%)	(3.8)	(9.3)	(6.6)	(17.3)	(17.9)	(23.2)	(20.7)	(29.5)	(15.7)	(23.8)	(7.7)	(6.6)	(16.1)
サルモネラ				1		5	4*	3	1	4	1		19(2.8)*
腸管病原性大腸菌			1	1	2		1*						5(0.7)*
腸管出血性下痢症				1*				1					2(0.3)*
腸炎ピブリオ							1	5					6(0.9)
カンパクタージエリ	1	4	3	7*	5	8	14	14	9	6	4	4	79(11.5)*
ロタウイルス									1				1(0.1)

備考：*印は、同一人から2菌種の病原菌が検出された事例（2事例）

表2 検出病原菌の血清型（平成16年）

病原菌	株数	菌種および血清型
サルモネラ	19	<i>S. Enteritidis</i> (10)、 <i>S. Infantis</i> (2)、 <i>S. Thompson</i> (2)、 <i>S. Agona</i> (1)、 <i>S. Brunei</i> (1)、 <i>S. Hadar</i> (1)、 <i>S. Stanley</i> (1)、 <i>S. Typhimurium</i> (1)
腸管病原性大腸菌	5	O119(2)、O44(1)、O111(1)、O142(1)
腸管出血性大腸菌	2	O157:H7(VT1;VT2)(1)、O26:H11(VT1)(1)
腸炎ピブリオ	6	O3:K6(6)

(4) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況

横須賀市衛生試験所

平成 16 年 1 月から 16 年 12 月の 1 年間に実施した市内各医療機関からの下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料の腸管系病原菌検査の結果について報告する。

1. 材料と方法

材料は菌株材料 240 件、糞便材料 70 件の合計 310 件で、検査方法は定法により行った。

2. 結果

病原菌検出状況は表 1 に示す。検査した 310 件全ての内、陽性数は 32 件(10.3%)であった。陽性の内訳は、腸管病原性大腸菌が 13 株、次いで腸管出血性大腸菌 O157 以外が 7 株、腸管出血性大腸菌 O157 が 5 株、サルモネラが 4 株、毒素原性大腸菌が 2 株、赤痢菌、及びカンピロバクターが各 1 株であった。複数菌種検出例としてはインドネシアに旅行した下痢症患者から腸管病原性大腸菌 O126:H27 とサルモネラ O 群別不定の 2 菌種検出事例が 1 例あった。

検出病原菌の血清型は表 2 に示す。赤痢菌は *S. sonnei* が 1 株、サルモネラは *S. Derby*(健常者由来)、*S. Typhimurium*、*S. Infantis*(健常者由来)、及び O 群別不定が各 1 株、腸管出血性大腸菌は O26:H11 が 6 株、O157:H7 が 4 株、O157:NM、及び O111:NM が各 1 株、毒素原性大腸菌は O6:H16、O25:NM が各 1 株、腸管病原性大腸菌は O111:H21 が 7 株と昨年同様多かった他、O128:H12 が 3 株、O26:NM、O86a:NM、及び O126:H27 が各 1 株であった。

以上、本年は昨年同様、腸管出血性大腸菌に該当する血清型(他の大腸菌を含む)菌株材料の検査数が 240 件であり全体の約 8 割(77.4%)を占めた。また、全ての検出病原菌に対する腸管出血性大腸菌及び腸管病原性大腸菌の占める割合も約 8 割(75.8%)と多い結果であった。

一方、糞便材料から検出された病原菌は赤痢菌、サルモネラ、毒素原性大腸菌、及びカンピロバクター等と種々であった。今後ともこれら散発下痢症患者の病原菌検査については引続き実施していくことが重要と思われた。

(蛭田徳昭、山口純子、天野肇、増山 亨)

表 1 散発下痢症からの病原菌検出状況 (平成 16 年 1 月～16 年 12 月)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	28(4)	22(1)	34(2)	27(2)	23(1)	32(2)	22(5)	36(2)	30(0)	22(2)	16(1)	18(5)*	310†(27)*
陽性数	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	7(1)	4(1)	5(1)	2(0)	5(0)	4(0)	3(2)*	32(5)*
(%)	(3.6)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.3)	(21.9)	(18.2)	(13.9)	(6.7)	(22.7)	(25.0)	(16.7)	(10.3)
病原菌													
赤痢菌						1(1)							1(1)
サルモネラ								1(0)		1(0)	1(0)	1(1)*	4(1)*
腸管出血性大腸菌 O157						1(0)		2(0)	1(0)		1(0)		5(0)
腸管出血性大腸菌 O157以外	1(0)								1(0)	4(0)	1(0)		7(0)
毒素原性大腸菌								1(1)				1(1)	2(2)
腸管病原性大腸菌					1(0)	4(0)	4(1)	1(0)			1(0)	2(1)*	13(2)*
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ						1(0)							1(0)

備考：†印の内訳(菌株 240 件、糞便 70 件)

* 印は同一人からの複数菌検出例

()は海外渡航者由来、8月と11月に検出されたサルモネラは健常者由来

表2 検出病原菌の血清型 (平成16年1月～16年12月)

病原菌	株数	菌種及び血清型
赤痢菌	(1)	<i>S. sonnei</i> (1)
サルモネラ	(4)	<i>S. Derby</i> (1), <i>S. Typhimurium</i> (1), <i>S. Infantis</i> (1), O群別不定 (1)
腸管出血性大腸菌 O157	(5)	O157:H7 (4), O157:NM (1)
腸管出血性大腸菌 O157以外	(7)	O26:H11 (6)*, O111:NM (1)
毒素原性大腸菌	(2)	O6:H16 (1), O25:NM (1)
腸管病原性大腸菌	(13)	O26:NM (1), O86a:NM (1), O111:H21 (7), O126:H27 (1), O128:H12 (3)

備考：()は菌株数を示す。

* 印()内の株数は全て同一人由来株です。

(5) 相模原市の2類及び3類感染症発症者の家族等の病原菌検索について

相模原市衛生試験所

平成16年1月から12月までに、二類及び三類感染症を発症した患者の家族、家族以外の患者接触者及び海外旅行同行者の病原菌検索を実施した。

検査対象の事例は7事例で、発症者の発症原因の推定については、海外渡航先での感染が疑われるものが5事例、渡航経験はなく国内での感染が疑われるものが2事例であった。

家族等の病原菌検索対象者は16名で、検査対象者別に見ると、患者の家族12名、家族以外の患者接触者3名、海外旅行同行者1名、検索病原菌別に見ると、赤痢菌11名(4事例)、腸管出血性大腸菌5名(3事例)であった。

検査法については、赤痢菌については直接平板塗抹により分離、同定を行った。腸管出血性大腸菌については、増菌培養と直接平板塗抹とを併用し分離、同定を行った。また病原性大腸菌のベロトキシン検索にはPCR法を実施した。

検査対象者のなかには軟便症状を呈する者もあったが、病原菌検索の結果、すべての検体から病原菌は検出されなかった。しかしながら今回検査対象となった7事例のなかには感染原因が不明なものや、家族以外での患者接触者も検査対象者となっていることから、感染の拡大が広範囲に渡る可能性が示唆されている。そのため、今後とも発症者からの感染拡大防止の一環として、迅速な対応を図りたい。

(清水壽美子、田向香織、榊原幸枝、前谷史恵)

3 河川等の環境調査

(1) 河川水腸管系病原菌調査

神奈川県衛生研究所

コレラ菌を対象にして昭和 54 年より実施している感染の定点調査は、平成元年より河川水腸管系病原菌調査として継続的に行っている。ここでは平成 16 年 1 月から平成 16 年 12 月までの成績を報告する。

1. 材料および方法

県内(政令三市所管地域を除く)の一級および二級河川の河口等の 10 調査定点において、毎月 1 回、定期的に採取した河川水について、以下の腸管系病原菌の検索を行った。

調査の対象菌種はコレラ菌 O1,O139、チフス菌、パラチフス A 菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の二類および三類感染症原因菌と、サルモネラ、*Vibrio cholerae* non-O1,O139 とした。

各増菌培地に、河川水 500ml を濾過して菌を捕捉したメンブランフィルターを接種し、培養した。赤痢菌の検索は、少量の Buffered Peptone Water でメンブランフィルターを洗浄し、その洗浄液の 1 白金耳を直接塗抹した。腸管出血性大腸菌 O157 は、36、8 時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用いて分離した。各病原菌の検索方法の概要と使用した増菌および分離培地を表 1 に示した。分離に応じた確認試験を行い、生化学的性状および血清学的性状等の確認を行い、菌種および菌型を同定した。

2. 結果および考察

河川水 120 検体からの病原菌分離状況を表 2 に示した。平成 16 年度は二類および三類感染症原因菌は分離されなかった。

V. cholerae non-O1,O139 は 47 検体 (39.1%) から分離された。チフス菌あるいはパラチフス A 菌以外のサルモネラは 34 検体 (28.3%) から 48 株分離された。主な血清型は *S. Agona*、*S. Infantis*、*S. Newport* および *S. Typhimurium* (各々 3 株ずつ) であった。

本年の調査においては、防疫措置の対象となる病原菌は検出されなかった。しかし、*V. cholerae* non-O1,O139 とサルモネラが年間を通じて検出され、河川が腸管病原菌に経常的に汚染されている実態を把握することができた。

表1 調査項目および使用培地

調査項目	増菌培地	分離培地
1. コレラ菌 O1,O139	アルカリ性ペプトン水	TCBS, PMT
2. <i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139		
3. チフス菌	セレナイト・シスチン	SS, DHL
4. パラチフス菌		
5. <i>Salmonella</i>	ハーナ・テトラチオン酸塩基礎培地	SS, DHL, ESサルモネラ *
6. 腸管出血性大腸菌 O157	Buffered Peptone Water (8時間、IMS法)	CT-SMAC

7. 赤痢菌	直接塗抹	SS, DHL

* : 平成16年5月より使用。

表2 腸管系病原菌検出状況 (平成16年)

検出菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コレラ菌O1,0139	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Vibrio cholerae</i> non-O1,0139	1	1	0	2	3	4	4	9	8	8	1	6	4	7
<i>Salmonella</i>	0	1	2	0	3	7	7	3	3	3	0	5	3	4

表3 分離されたサルモネラの血清型

血清型	分離株数	血清型	分離株数
Agona	3	Newport	3
Albany	1	Othmarschen	1
Amager	1	Saintpaul	1
Carvallis	1	Senftenberg	2
Derby	1	Typhimurium	3
Enteritidis	2	Warthington	1
Haardt	1	04群	9
Hadar	1	07群	3
Infantis	3	08群	2
London	3	09群	1
Muenster	1	013群	2
Nagoya	1	0群別不能	1
		計	48

(2)河川水腸管系病原菌検索

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和 53 年より継続しており、現在は鶴見川水系が 2 定点、これ以外は各水系ともすべて 1 定点で計 8 定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌 O1、O139 以外、腸炎ビブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌を含むサルモネラである。今回は平成 16 年 1 月から 12 月までの検査成績について報告する。

1. 材料および方法

上記 8 定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月 1 回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

2. 結果および考察

(1) 河川水からの病原菌の検出状況

河川水からの病原菌の検出状況を表 1 に示した。赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌は、今年はいずれの定点からも検出されなかった。しかし、コレラ菌は 5 月、6 月、7 月および 11 月に 10 定点で検出されたが、いずれもコレラトキシンは非産生であった。

コレラ菌 O1、O139 以外は、延べ 44 定点 (45.8%) で検出され、例年とほぼ同様の検出率であった。チフス、パラチフス菌以外のサルモネラは延べ 4 定点 (4.2%) で 8 菌種が分離された。

(2) 定点別コレラ菌 O1、O139 以外の検出状況

河川水および底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の検出状況を表 2、3 に示した。各河川とも前年同様年間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の菌数は、平成 6 年からと同様に年間を通しては低い値を示していたが、本年は 8 月と 9 月に高い値を示した。

(3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

表 4 に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオは 13 定点より検出され昨年より減少した。2 月、3 月、4 月、8 月および 10 月は河川水定点から検出されなかった。

(4) 定点別サルモネラ検出状況

河川水からのサルモネラの検出状況を表 5 に示した。チフス菌およびパラチフス菌以外のサルモネラは、本年は 1、3、4、6、7 および 10 月に検出された。検出されたサルモネラの血清型は表 6 に示した。O7 群で 3 菌種、O8 群で 2 菌種検出された。S.Infantis が 2 定点で検出されたが、毎年検出されている S.Enteritidis は検出されなかった。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的な解析が必要である。

(武藤哲典、松本裕子、山田三紀子、鈴木正樹、北爪晴恵)

表1 河川水からの病原菌検出状況(定点数)

病原菌	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
赤痢菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌		0	0	0	0	1	1	7	0	0	0	1	0	10
コレラ菌01、O139以外		3	3	1	5	0	5	0	7	8	5	4	3	44
腸炎ビブリオ		1	0	0	0	2	1	2	0	3	0	1	3	13
サルモネラ														
チフス菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		1	0	1	2	0	2	1	0	0	2	0	0	9

表2 河川水中のコレラ菌01、O139以外

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋		+	-	-	+	-	+	-	+	+	-	-	+
2. 川向橋		-	+	-	-	-	+	-	-	+	-	+	-
3. 水道橋		-	+	-	+	-	+	-	+	+	+	-	-
4. 清水橋		-	+	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+
5. 小泉橋		+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-
6. 待従橋		-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-
7. 鷹匠橋		+	-	+	+	-	+	-	+	+	+	-	+
8. 東西橋		-	-	-	+	-	+	-	+	+	-	-	+

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌01、O139以外のMPN

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌01、O139以外	<0.2	<0.2	<0.2	2.3	<0.2	<0.2	<0.2	11	0.4	11	0.2	4

(個/100ml)

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1. 臨港鶴見川橋		- (+)	- (+)	- (-)	- (+)	- (-)	- (+)	- (-)	- (+)	+	+	- (+)	- (+)	+
2. 川向橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
3. 水道橋		+	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	
4. 清水橋		-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	
5. 小泉橋		-	-	-	-	+	+	+	-	+	-	+	+	
6. 待従橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	
7. 鷹匠橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8. 東西橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

()内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ

地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2. 川向橋	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6. 侍従橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
7. 鷹匠橋	+	-	-	+	-	+	-	-	-	+	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型

	血清型	分離菌株数
07群	Infantis	2
	Haelsingborg	1
	Thompson	1
08群	Bovismorbificans	1
	Hadar	1
09群	Itami	1
03,10群	Orion	1
018群	Cerro	1
計		9

(3) 河川水腸管系病原菌検索

横須賀市衛生試験所

平成 16 年 1 月から 16 年 12 月まで実施した河川水のコレラ菌、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフス A 菌、腸管出血性大腸菌、ビブリオ・ミミカス、腸炎ビブリオ、その他のサルモネラなど、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

1. 定点と検査方法

調査定点は市内 10 河川 10 定点であり、採水は 2 月、5 月、8 月、11 月の年 4 回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

2. 結果及び考察

(1) 河川水からの病原菌検出状況

河川水の病原菌検出状況は表 1 に示した。本年はコレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外が延べ 24 定点 (60.0%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリアは 26 定点(65.0%)、ビブリオ・ミミカスは 16 定点(40.0%)、腸炎ビブリオは 14 定点 (35.0%)、カンピロバクター・ジェジュニ/コリは 3 定点(7.5%)、腸管出血性大腸菌 O157 (VT1、VT2 産生)、エルシニア・エンテロコリチカ、及びプレジオモナス・シゲロイデスがそれぞれ 1 定点(2.5%)から検出された。しかし、コレラ菌 O1,O139 (CT+)、赤痢菌、チフス菌、パラチフス A 菌、腸管出血性大腸菌 O157 以外、ビブリオ・フルビアーリス/ファーニシイ、その他のサルモネラ、毒素原性大腸菌、組織侵入性大腸菌、及び腸管病原性大腸菌はいずれも検出されなかった。

(2) コレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外の検出状況

コレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外の検出状況を表 2 に示した。コレラ菌 O1,O139 (CT+)以外は 8 月には全ての定点から検出され、夏季に多く検出された。また、10 定点の内 2 定点においては毎回検出された。

(3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

腸炎ビブリオの検出状況は表 3 に示した。腸炎ビブリオは 11 月には 5 定点、5 月は 4 定点、8 月は各 3 定点、2 月は 2 定点から検出された。また、10 定点の内 1 定点においては毎回検出された。

以上、市内 10 河川、10 定点 (河川水) の病原菌についてはコレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア、プレジオモナス・シゲロイデス、カンピロバクター、エルシニア・エンテロコリチカ、腸管出血性大腸菌 O157 など種々検出された。

特に 8 月の調査では腸管出血性大腸菌 O157 が検出されたため、同一定点とその河川の上流域 2 定点の河川水について O157 の再調査が実施された。その結果、いずれの検体からも O157 は検出されず、菌の排出は一過性と考えられたため調査は終了された。

この調査では排出源、排出経路等について明らかにされなかったが、O157 をはじめ重篤な疾病を引起す病原菌の環境への排出及び拡散は問題と思われる。今後とも市内河川の定点観測を引き続き実施することが重要と考えられた。

(蛭田徳昭、山口純子、天野肇、増山亨)

表1 河川水から検出した病原菌 (平成16年1月～16年12月)

病原菌	月				計 (%)
	2	5	8	11	
コレラ菌01,0139 (CT+)	0	0	0	0	0
コレラ菌01,0139 (CT+)以外	3	6	10	5	24 (60.0)
腸炎ビブリオ	2	4	3	5	14 (35.0)
ビブリオ・ミミカス	1	4	5	6	16 (40.0)
ビブリオ・フルビアース/ファーニシイ	0	0	0	0	0
エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア	4	7	7	8	26 (65.0)
プレジオモナス・シゲロイデス	0	0	1	0	1 (2.5)
赤痢菌	0	0	0	0	0
チフス菌	0	0	0	0	0
パラチフスA菌	0	0	0	0	0
その他のサルモネラ	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌0157	0	0	1	0	1 (2.5)
腸管出血性大腸菌0157以外	0	0	0	0	0
毒素原性大腸菌	0	0	0	0	0
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	0	0	0	0
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ	1	0	0	2	3 (7.5)
エルシニア・エンテロコリチカ	1	0	0	0	1 (2.5)
検体数 *	10	10	10	10	40

備考：*印は腸管出血性大腸菌0157検出に伴う再調査（8月実施）を含まず。

表2 定点別コレラ菌01,0139(CT+)以外の検出状況 (平成16年1月～16年12月)

定点	月				計
	2	5	8	11	
鷹取川(追浜橋)	-	-	+	-	1
平作川(夫婦橋)	-	-	+	-	1
松越川(竹川合流後)	-	+	+	+	3
野比川(野比橋)	+	+	+	-	3
長沢川(長沢橋)	+	+	+	+	4
津久井川(新津久井橋)	+	+	+	+	4
川間川(新川間橋)	-	-	+	+	2
芦名川(芦名橋)	-	+	+	-	2
前田川(前田中橋)	-	-	+	+	2
関根川(粒石橋)	-	+	+	-	2

表3 定点別腸炎ビブリオの検出状況（平成16年1月～16年12月）

定 点	月				計
	2	5	8	11	
鷹取川（追浜橋）	-	+	+	+	3
平作川（夫婦橋）	+	+	+	+	4
松越川（竹川合流後）	+	+	-	+	3
野比川（野比橋）	-	-	-	+	1
長沢川（長沢橋）	-	-	-	-	0
津久井川（新津久井橋）	-	-	-	-	0
川間川（新川間橋）	-	+	+	+	3
芦名川（芦名橋）	-	-	-	-	0
前田川（前田中橋）	-	-	-	-	0
関根川（粒石橋）	-	-	-	-	0

1 インフルエンザ

(1) 神奈川県が発生状況

神奈川県保健福祉部健康増進課

インフルエンザについては、その実数をつかむことが困難なため、学校等における集団発生状況を参考とする。

平成 16 年 11 月から平成 17 年 3 月にかけて発生した集団かぜは、ウイルス分離状況から、昨シーズン同様 A 香港型と B 型によるものと考えられたが、ウイルス分離数の比率は B 型がほとんどを占めた。

平成元年以降の集団かぜの発生に伴うウイルスの分離状況は、表 1 のとおりである。今期の集団かぜによる欠席者数は、961 施設、14,634 人であった。施設別の発生状況は、表 2 のとおりである。

表 1 集団かぜ発生状況

区分 年度	発成年月日	終息年月日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
元	元.11.13	2. 3.12	2,168	5,138	52,483	A (H3N2) B
2	2.12.13	3. 3.11	1,138	2,125	20,227	A (H3N2)
3	3.11.25	4. 3.16	832	1,485	14,721	A (H1N1)
4	4.11.25	5. 3.17	1,316	1,875	20,308	A (H3N2) B
5	5.11.24	6. 3.17	336	444	4,792	A (H3N2)
6	6.11.10	7. 3.16	990	1,272	14,424	A (H3N2) B
7	7.11.30	8. 3.18	381	451	5,628	A (H1N1)
8	8.11.26	9. 3.17	410	495	5,219	A (H3N2) B
9	9.12. 3	10. 3.19	1,794	3,293	38,782	A (H3N2)
10	10.11. 6	11. 3.18	1,938	2,949	33,370	A (H3N2) B
11	11.11.19	12. 3.17	1,070	1,498	18,778	A (H1N1) A (H3N2)
12	12.12.12	13. 3.19	143	144	1,535	A (H1N1) B
13	13.11.16	14. 3.19	791	1,059	12,336	A (H1N1) A (H3N2)
14	14.12.13	15. 3.17	1,115	1,430	19,024	A (H3N2) B
15	15.12. 8	16. 3.22	552	697	8,919	A (H3N2) B
16	16.11.25	17. 3.23	961	1,250	14,634	A (H3N2) B

A (H1N1): A ソ連型 A (H3N2): A 香港型 B: B 型

表 2 集団かぜ発生状況 (平成 16 年)

	施設数	学級閉鎖数	欠席者数	学年閉鎖数	学校閉鎖数
幼稚園	70	73	1,318	2	13
小学校	860	1,145	12,801	62	2
中学校	26	31	430	5	0
その他	5	1	85	19	0
計	961	1,250	14,634	88	15

(2) 神奈川県域のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

平成 16 年度冬季における県域のインフルエンザ流行は、17 年 1 月から 3 月にかけて起こった。感染症発生動向調査によると、罹患数は 17 年 3 週以降に急増して 7 週にピーク（定点あたり罹患数 58.84 人）をむかえた後、9 週以降は急速に減少していった。本シーズン（16 年 44 週～17 年 17 週）における罹患数の累積は 4 万 7 千人あまりと昨シーズンの 2 倍以上となり、過去 5 年間で最も大きな流行となった。（図 1）

感染症発生動向調査病原体定点で採取された 255 検体についてウイルス分離を実施した。シーズンを通じて、A 香港（H3）型と B 型が混在して分離される傾向が続いた。分離ウイルスの内訳は、インフルエンザウイルス A 香港（H3）型 69 株、同 B 型 99 株、アデノウイルス 2 型 1 株、コクサッキーウイルス B5 型 1 株であった。

県域および相模原市の各保健所管内初発集団かぜ（10 集団 37 名）について、病原体検索を行った。1 月に 8 集団、2 月に 2 集団の検査依頼があり、1 月は 3 集団が A 香港（H3）型、5 集団が B 型、2 月は A 香港（H3）型と B 型がそれぞれ 1 集団ずつであった。また、インフルエンザウイルスは分離されなかったが、単純ヘルペスウイルス 1 型が分離された患者が 1 名いた。

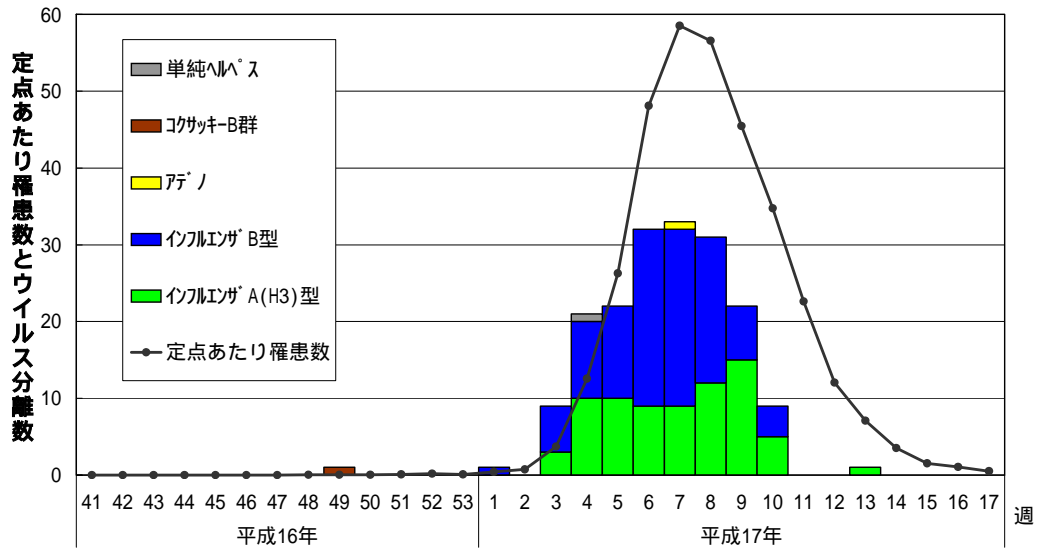
なお、感染症発生動向調査、集団かぜ検査ともに、A ソ連（H1）型は分離されなかった。

インフルエンザ分離株の抗原性の変異を HI 試験の成績から見ると、A 香港（H3）型はワクチン株の A/ワイオミング/03/2003（H3N2）類似株（HI 価がホモ価と 2 倍差以内）がほぼ全数を占めた。B 型は、全分離株が山形系統に属する株であったが、B/ヨハネスバーグ/5/99（山形系統）のホモ価と 2 倍差以内の値を示す株の割合が 2/3、4～8 倍差の値を示す株の割合が 1/3 であった。

本シーズンは過去 5 年間で最も大きな流行となったが、その背景として、県民の B 型に対する抗体保有率が極めて低い（インフルエンザ感受性調査の項を参照）ことが B 型の大規模流行を招き、また、シーズン当初から A 香港（H3）型と B 型が同時流行し終息時までその傾向が持続されたことも流行が大きくなった要因であると考えられる。

（渡邊寿美、斎藤隆行、高橋孝則、新川隆康）

図1 インフルエンザ様患者の定点あたり罹患数とウイルス分離数の推移



(3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成 16 年 11 月から平成 17 年 5 月までのインフルエンザ様疾患患者数は 37,707 人と昨シーズン同期間における 16,278 人を大きく上回り、過去 10 年では最大の患者発生であった。定点あたり患者数は例年に比べて立ち上がりが遅く 1 月下旬から増えはじめ、2 月（第 7 週）に 52.0 人とピークとなり、その後減少した（図 1）。

集団かぜの初発は平成 16 年 11 月 25 日（第 47 週）に港北区の幼稚園からの報告であった。その後、平成 17 年 1 月第 4 週から終息までの発生数は 13 区 29 施設 131 学級であった。検査依頼のあった 8 集団 35 人についてウイルス学的調査を実施し、2 集団から AH3 型ウイルスが分離または遺伝子が検出され、6 集団は B 型ウイルスが分離された（表 1）。また、集団かぜ調査以外では 4 月 9 日（第 14 週）に港北区の特別老人ホームにおいて感染症発生報告があり、ウイルスの調査を行った結果、インフルエンザ AH3 型ウイルスの遺伝子が 3 件検出された。

定点ウイルス調査においては平成 16 年 11 月から平成 17 年 5 月までの 7 カ月間に採取した咽頭ぬぐい液 320 検体より、AH3 型 56 株、B 型 73 株の合計 129 株が分離または遺伝子が検出された。ウイルス型の分離・検出割合は AH3 型 43.4%、B 型 56.6%であった。なお、この中には、RT-PCR で AH3 型と B 型の両方が検出され、B 型ウイルスが分離された 1 例と、RT-PCR で B 型ウイルスが検出され、AH3 型ウイルスが分離された 2 例が含まれていた。AH3 型については平成 16 年 12 月 27 日（第 53 週）に港南区の定点検体からはじめて 2 株分離され、その後 2 月第 9 週をピークとして 5 月第 22 週まで分離された。一方、B 型ウイルスは 12 月 2 日（第 49 週）に金沢区定点検体からはじめて 1 株分離された。年明け後は 1 月第 1 週に港北区定点からはじめて分離され、2 月第 6 週をピークとして 4 月第 14 週まで分離が続いた（図 2）

分離株について HA 抗原の性状を調べたところ、今シーズン分離された多くの株はワクチン株である A / Wyoming / 03 / 2003 および A / 熊本 / 102 / 2002 と HI 価が類似していた。しかし、昨シーズンまで抗原性状が類似していた A / Panama / 2007 / 99 に対しては低い反応性であった。また、シーズン後半には A / Panama / 2007 / 99 にまったく反応しない株の比率が多くなった（表 2）。一方、B 型 89 株はワクチン株である山形系統の B / Shanghai / 361 / 2002 や B / Johannesburg / 5 / 99 に類似した抗原性状を示し、Victoria 系統の B / Shandong / 07 / 97 や B / 横浜 / 4 / 2003 の抗血清には反応しなかった（表 3）

系統樹解析では、AH3 型については今シーズン代表株のほとんどは 2005/2006 シーズンの北半球ワクチン推奨株 A / California / 7 / 2004 や A / New York / 55 / 2004 と同じグループであった。しかし、シーズン前半の株の中には今シーズンのワクチン株である A / Wyoming / 03 / 2003 に近縁なグループの株があり、シーズンの前半と後半では進化レベルの異なった AH3 型ウイルスが流行していたと推察された（図 3）。B 型については今シーズン分離された株はすべて山形系統の B / Shanghai / 361 / 2002 グループであった。このグループの株は横浜市では 5 シーズン連続して分離されていたが、流行の主流となったのは初めてであった（図 4）。

以上のように横浜市における 2004/2005 シーズンにおけるインフルエンザの流行は大規模なものであ

った。主流となったのは前半はB型ウイルス、後半はAH3型ウイルスであった。

(川上千春、百木智子、七種美和子、野口有三、佐々木一也、鳥羽和憲)

図1 定点あたり患者数

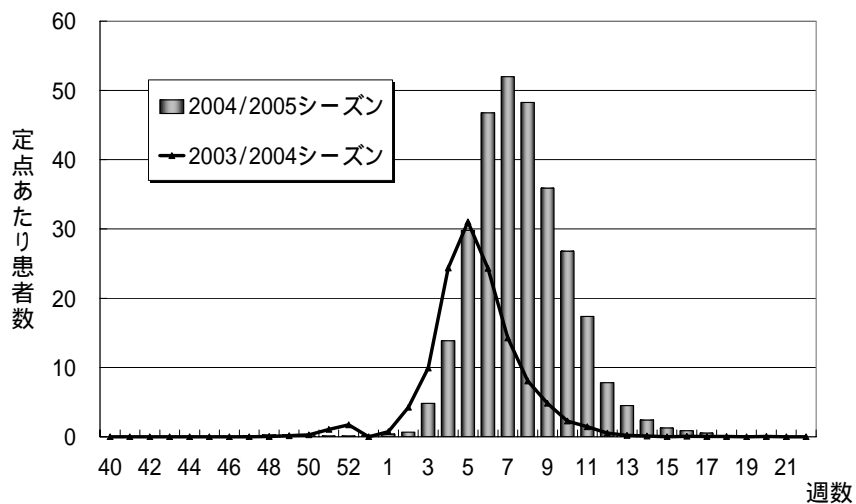


表1 集団かぜ調査等の検査

発生年月日	週	区	施設	ウイルス分離			遺伝子検出	
				検体数	分離株数	型	判定数	判定結果
平成16.11.25	第47週	港北	T幼稚園	5	0		1	AH3
平成17. 1.24	第4週	南	M幼稚園	3	2	B	1	B
1.25	第4週	泉	I幼稚園	5	1	AH3	0	
1.27	第4週	鶴見	T小学校	4	3	B	2	B
1.31	第5週	戸塚	K小学校	4	4	B	3	B
2. 4	第5週	旭	M幼稚園	4	3	B	2	B
2. 9	第6週	金沢	K小学校	5	4	B	1	B
2.25	第8週	中	R幼稚園	5	2	B	1	B
合計				35	19	AH3:1 B:18	14	AH3:1 B:10
4. 9	第14週	港北	特別老人ホームK園	20	0		3	AH3

図2 ウイルス分離・検出状況

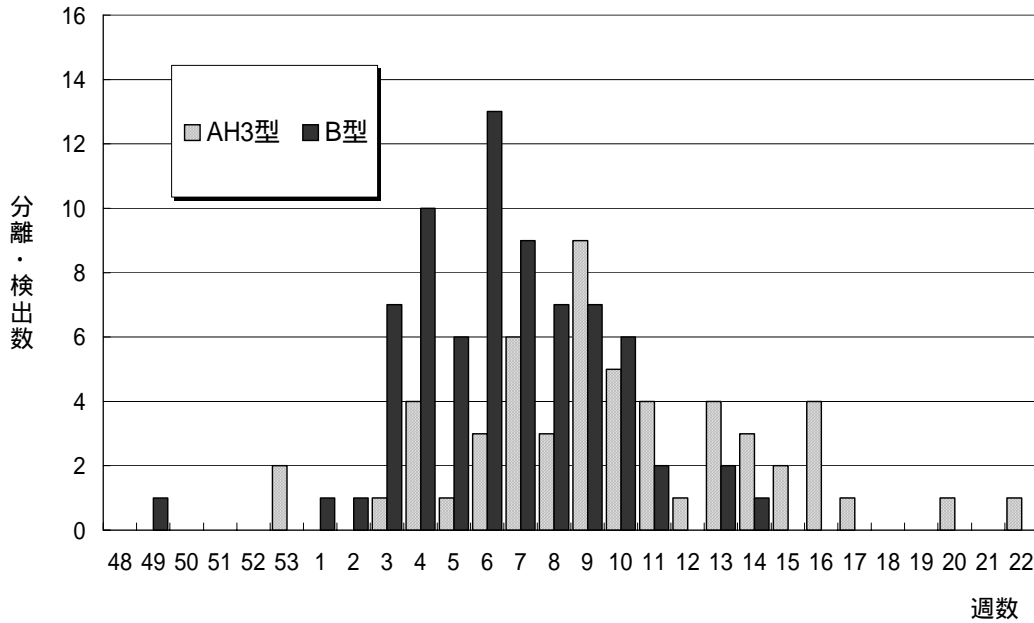


表2 AH3型ウイルスの抗原性状

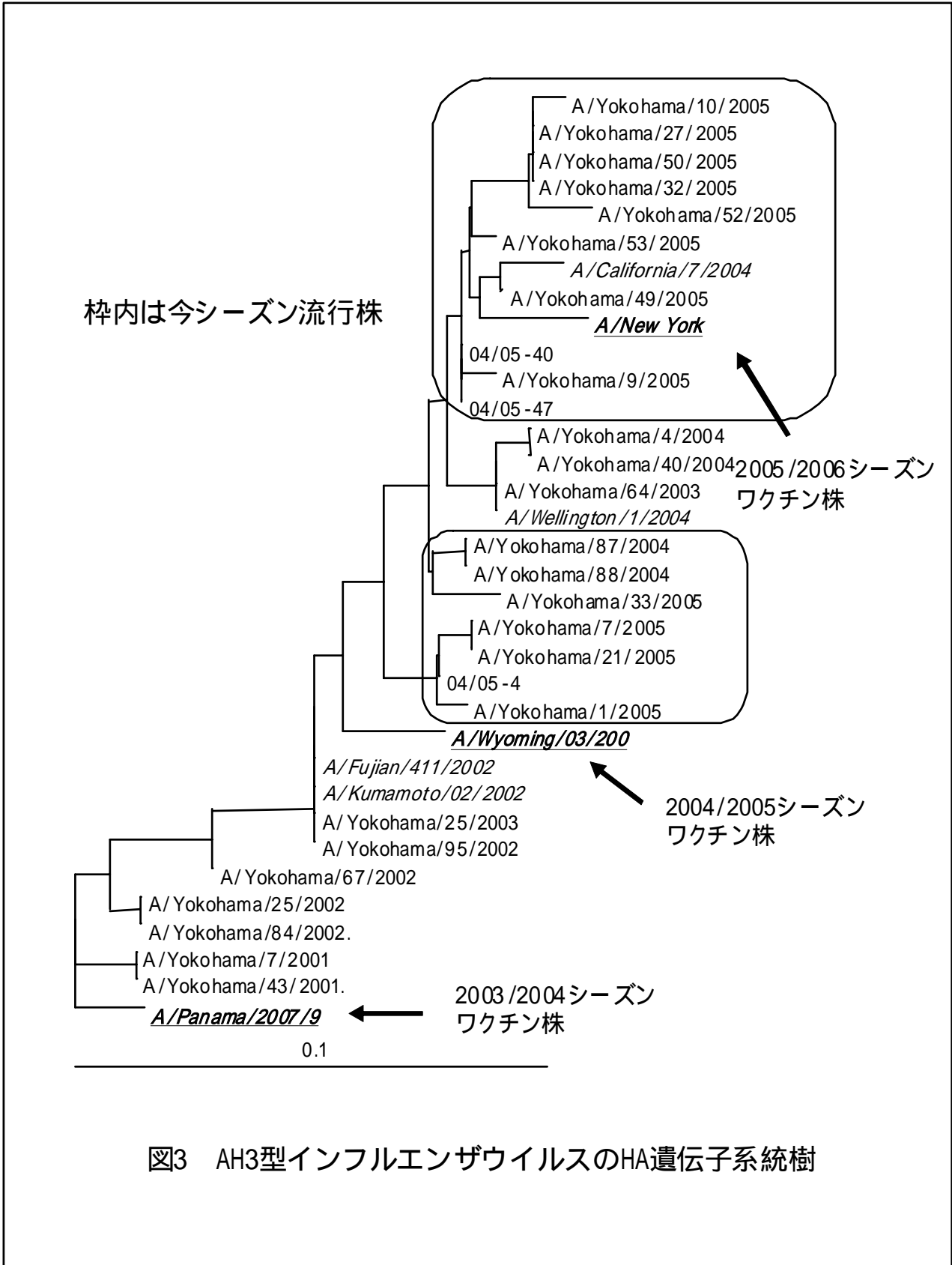
抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清			
	A/Wyoming/03/2003 (1280)*	A/Panama/2007/99 (640)	A/熊本/102/2002 (640)	A/横浜/59/2003 (160)
A/横浜/88/2004	640	20	1280	10
A/横浜/7/2005	1280	20	1280	20
A/横浜/9/2005	640	20	640	10
A/横浜/32/2005	320	< 10	320	< 10
A/横浜/50/2005	320	< 10	640	< 10

* () 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価

表3 B型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレット、ヒツジ、受精卵またはマウスで免疫した抗血清			
	B/Shanghai/361/2002 (160)*	B/Johannesburg/05/99 (2560)	B/Shandong/07/97 (160)	B/横浜/04/2003 (320)
B/横浜/05/2004	40	1280	< 10	< 10
B/横浜/01/2005	40	2560	< 10	< 10
B/横浜/32/2005	80	2560	< 10	< 10
B/横浜/46/2005	80	2560	< 10	< 10
B/横浜/85/2005	80	2560	< 10	< 10

* () 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価



(4) 川崎市のインフルエンザの動向

川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況(図1)から、患者発生が初めて確認されたのが平成15年12月の第5週(52週)であった。1月の3週に定点あたりの患者数が4.54、その後急速に増加し、2月の3週(7週)で50.83と流行のピークを迎えた。患者数は少しずつ減少して4月の5週(18週)に終息した。集団かぜは平成16年1月19日に発生しはじめ、3月18日に終息するまでに26施設28学級でみられた。集団かぜ発生施設のうち、平成16年12月21日から17年2月2日までの4施設14名についてウイルス分離を行ったところ、うがい液から4施設9名においてインフルエンザウイルスが分離された。このうち7名からはB型インフルエンザウイルスが分離され、2名からはA香港型インフルエンザウイルスが分離された。

平成16年4月から平成17年3月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液136例についてウイルス分離を行った。そのうち87例(64.8%)からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳はA香港型35株、B型52株であった。週別インフルエンザ分離状況(図2)では、はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは12月17日(51週)でA香港型が分離された。12月の分離数はA香港型2株であった。1月にはいると分離数は増加し、A香港型10株、B型23株が分離された。2月はA香港型が21株、B型28株分離され、3月はA香港型2株が分離された。最後に分離されたのは4月19日(16週)のA香港型であった。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは2血清型が分離されたが、A香港型、B型の混合流行で、B型は1月17日から2月22日までにみられ、終息した。

(清水英明、平位芳江)

図1 インフルエンザ様疾患患者数

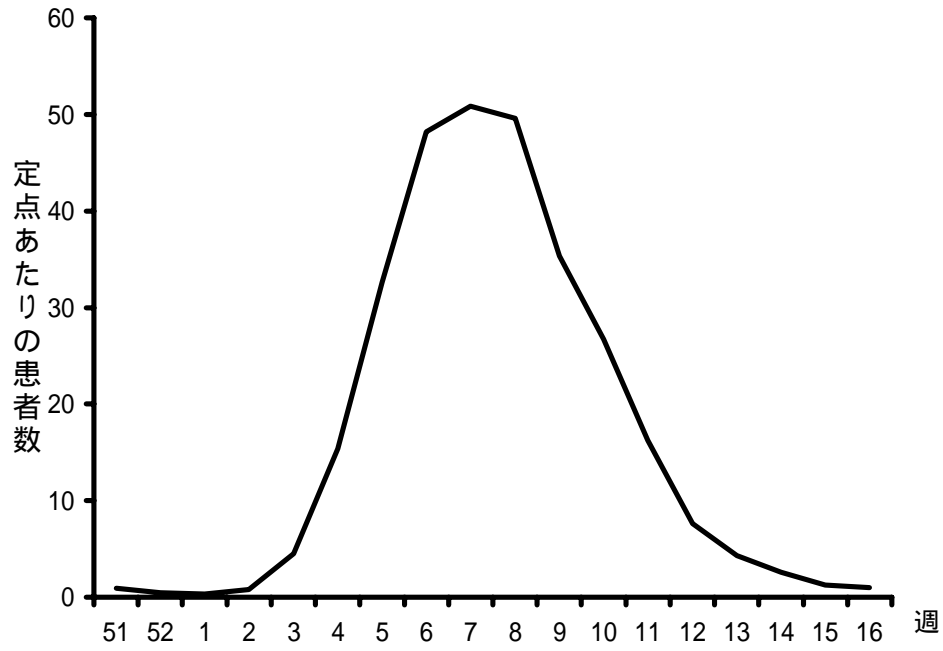
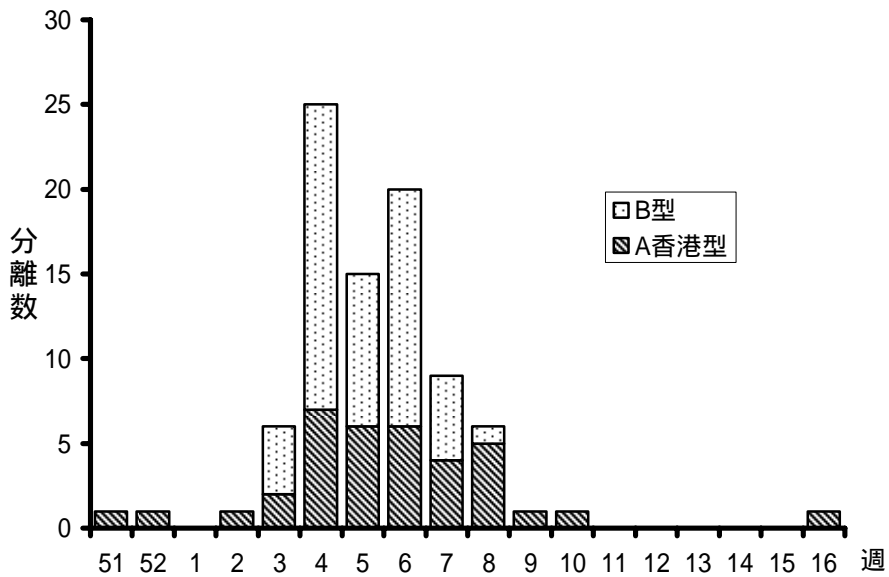


図2 週別インフルエンザウイルス分離状況



(5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成 16 年 7 月から 9 月の間に採取された 0 歳以上の県民 265 名 (0~4、5~9、10~14、15~19、20~29、30~39、40~49、50~59、60 歳以上の 9 区分の年齢群各 25~31 名ずつ) の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1)、A/ワイオミング/3/2003 (H3N2)、B/上海/361/2002、B/プリズベン/32/2002 の 4 種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の 10HI 価と、感染防御能があるとされている 40HI 価の 2 点で集計した (図 1)。

A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1) は、12 年度から 5 期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15~19 歳の 86.7%、最低が 50~59 歳の 22.6%、40HI 価でみると最高が 10~14 歳および 15~19 歳の 63.3%、最低は 50~59 歳の 3.2%であった。全体としては、前年度とほぼ同等の抗体保有率を維持していた。(図 1.a)

A/ワイオミング/3/2003 (H3N2) は、16 年度から新しくワクチン使用株に採用された株である。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 5~9 歳および 10~14 歳の 100%、最低が 0~4 歳の 53.3%、40HI 価でみると最高が 10~14 歳の 96.7%、最低が 50~59 歳の 19.4%であった。ワイオミング株は新しい調査対象株であるにもかかわらず、前年度よりも全体的に抗体保有率の上昇が見られた。本県では過去 3 シーズンにわたって A (H3) 型 (NA 亜型は未同定) が流行株となっており、これらの流行時に獲得した抗体がワイオミング株にも良く反応したため、抗体保有率が高くなったと考えられる。また、感染症研究所の解析によれば前年度の流行期には福建株の類似株 (ワイオミング株も含まれる) が広く浸透しており、そのためワイオミング株に対する抗体を獲得していた可能性もあると考えられた。(図 1.b)

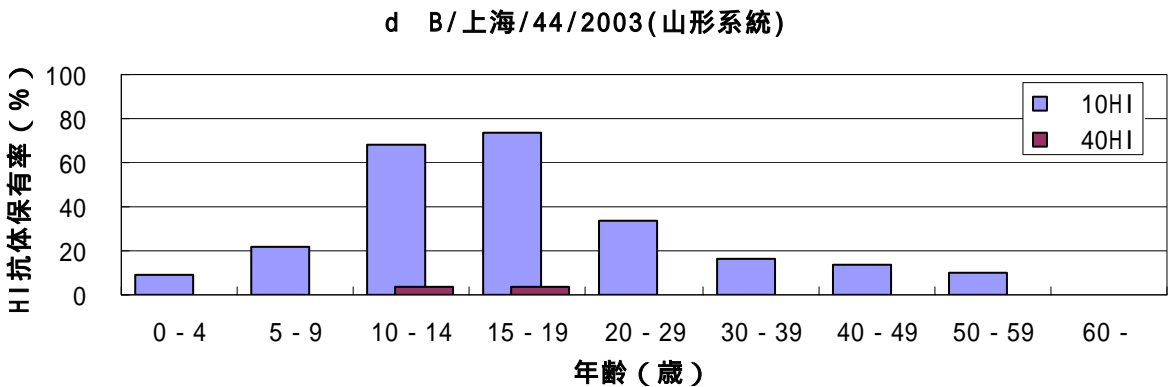
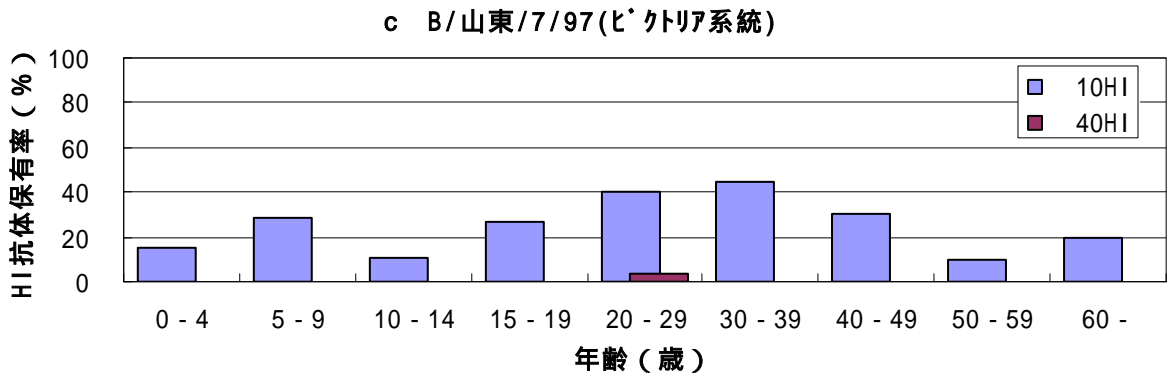
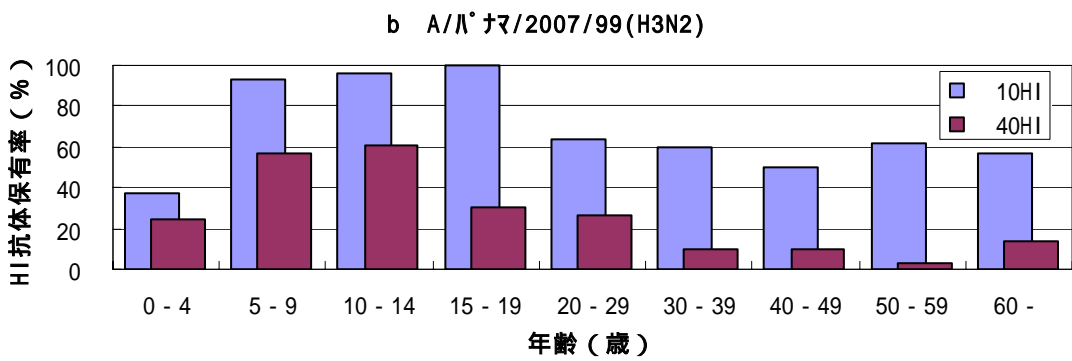
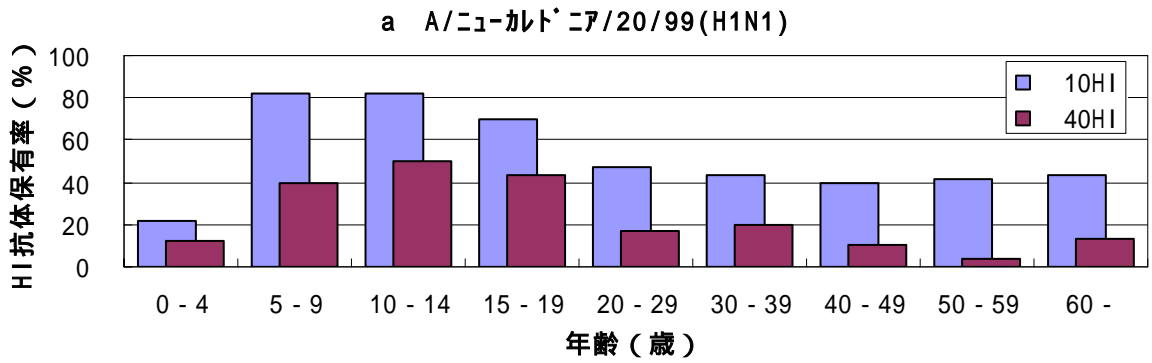
B/上海/361/2002 は、16 年度のワクチン使用株で“山形系統”に属する。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 10~14 歳および 15~19 歳の 93.3%、最低が 60 歳以上の 12.9%であった。40HI 価でみると最高が 15~19 歳の 50%、最低が 60 歳以上の 0%であった。山形系統株に対する抗体保有率は前年度よりも全体的に上昇しており、13 年度の調査対象時 (調査対象株は当時のワクチン株であるヨハネスバーグ株) と抗体保有率の年齢分布が似ていた。(図 1.c)

B/プリズベン/32/2002 は、ワクチン使用株 (上海株) とは抗原的に別系統の“ビクトリア系統”に属する。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 20~29 歳の 61.3%、最低が 50~59 歳の 6.5%であった。40HI 価の以上の抗体保有者は極めて少なく 265 名中 7 名であった。ビクトリア系統株に対する抗体保有率は、前年度とほぼ同等であった。また、20 歳代に保有率 (10HI 価) のピークがあることが特徴であった。(図 1.d)

A (H1N1) 型は 0~9 歳および 20 歳以上の各年齢群で、A (H3N2) 型は 0~4 歳および 20~59 歳の各年齢群で、B 型の山形系統は 0~14 歳および 20 歳以上の各年齢群で、B 型のビクトリア系統は全年齢群で 40HI 価以上の抗体保有者の割合が 50%未満であった。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

(渡邊寿美、高橋孝則、新川隆康)

図 インフルエンザ感受性調査



2 その他の感染症

(1) 神奈川県内のノロウイルスによる感染性胃腸炎の検出結果

平成 16 年 1 月～12 月の間に神奈川県内の感染性胃腸炎から検出されたノロウイルスの検出結果は以下のとおりである。

表 ウイルス性集団胃腸炎におけるノロウイルス検出結果（平成 16 年）

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	遺伝子検出法 陽性	遺伝子群
1	神奈川県衛研	H16.2	施設	20	23	8	G
2	神奈川県衛研	H16.2	施設	33	19	10	G
3	神奈川県衛研	H16.3	施設	88	23	8	G
4	神奈川県衛研	H16.10	その他	148	83	27	G
5	神奈川県衛研	H16.12	施設	48	48	30	G
6	神奈川県衛研	H16.12	病院	8	17	6	G
7	神奈川県衛研	H16.12	病院	85	46	24	G
8	神奈川県衛研	H16.12	施設	30	7	5	G
9	神奈川県衛研	H16.12	施設	17	6	4	G
10	横浜市衛研	H16.1	病院	不明	8	4	G
11	横浜市衛研	H16.1	施設	35	11	11	G
12	横浜市衛研	H16.1	施設	117	35	3	G
13	横浜市衛研	H16.2	施設	80	13	4	G
14	横浜市衛研	H16.3	施設	139	23	7	G
15	横浜市衛研	H16.4	施設	21	22	7	G
16	横浜市衛研	H16.4	施設	18	21	6	G
17	横浜市衛研	H16.11	幼稚園	不明	13	4	G
18	横浜市衛研	H16.11	その他	11	11	4	G
19	横浜市衛研	H16.12	施設	14	27	7	G
20	横浜市衛研	H16.12	施設	20	31	16	G
21	川崎市衛研	H16.2	施設	55	38	12	G
22	川崎市衛研	H16.2	保育園	24	35	5	G
23	川崎市衛研	H16.2	施設	45	10	5	G
24	川崎市衛研	H16.2	施設	110	6	5	G
25	川崎市衛研	H16.3-5	施設	49	76	13	G
26	川崎市衛研	H16.12	施設	21	67	23	G
27	横須賀衛試	H16.3	飲食店	4	8	2	G
28	横須賀衛試	H16.11	飲食店	12	16	2	G
29	横須賀衛試	H16.12	飲食店	12	13	2	G
30	相模原市衛試	H16.3	施設	20	8	3	G
31	相模原市衛試	H16.3	その他	192	5	5	G

神奈川県ではノロウイルスが原因の感染性胃腸炎が神奈川県域で 9 事例、横浜市では 11 事例、川崎市では 6 事例、横須賀市では 3 事例、相模原市では 2 事例発生した。検出された遺伝子群は感染性胃腸炎事例では GII のみであった。

(2) 神奈川県域のノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

神奈川県衛生研究所

神奈川県域ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎（食中毒等を含む）が 15 事例発生した。検出された遺伝子群は GII が 14 事例、GI と GII が重複して検出されたものが 1 事例あった。平成 16 年県域で検出されたノロウイルスは GII が多く、全国状況と一致していた。

（古屋由美子、片山 丘、高橋孝則、新川隆康）

(3) 横浜市のノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横浜市衛生研究所

感染症としての集団発生事例を除き、横浜市で有症苦情等を含む食中毒等の疑いで平成 16 年にノロウイルスが陽性であった事例数は、48 事例であった。その内、原因施設が市外と考えられる他自治体からの照会事例は、30 事例（62.5%）と多数を占めていた。

当所で検査を実施した 44 事例の遺伝子型をみると、35 事例は G 型、5 事例が G 型、4 事例が G 型と G 型の混在事例であった。G 型の 5 事例は、4 月に 3 事例、8 月に 2 事例と限局しており、3 事例は静岡県関連、1 事例が栃木県関連、1 事例は横浜中華街との関連事例であった。

G 型と G 型の混在の 5 事例については、東京都関連の中華料理店 1 事例、川崎市関連のレストラン 1 事例、横浜市内の中華料理店 2 事例と葬儀関連の 1 事例であった。注目すべき点としては、中華料理が原因の 3 事例中の 2 事例はシジミからも G 型と G 型のノロウイルスが検出されたことにより、明らかに原因食品と断定された事例であった。

（野口有三 宇宿秀三 藤井菊茂）

(4) 川崎市のノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

川崎市衛生研究所

川崎市ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎（食中毒等を含む）が 9 事例発生した。検出された遺伝子群は、GII が 8 事例、GI が 1 事例であった。

（奥山恵子、平位芳江）

(5) 横須賀市のノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横須賀市衛生試験所

横須賀市ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎（食中毒等を含む）が 3 事例発生した。検出された遺伝子群は、GII が 3 事例であった。なお、ノロウイルスによる食中毒の発生事例はなかった。

（石川英二 河崎正太郎）

(6) 相模原市のノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

相模原市衛生試験所

相模原市ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎（食中毒等を含む）が 4 事例発生した。検出された遺伝子群は、GII が 3 事例であった。1 事例についての検査は検査の実施にはいたらなかった。

（清水寿美子 田向香織 榊原幸枝 前谷文恵）

3 ウエストナイルウイルス

(1) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

神奈川県衛生研究所

近年、アメリカではウエストナイルウイルス(WNV)が流行し、ウエストナイル熱・脳炎患者が発生している。ウエストナイル熱・脳炎は WNV に感染した蚊に刺されることによって起こる病気である。WNV は自然界においては、鳥と蚊の間で感染環が維持されている。これまで日本では患者の発生はなく、成田空港周辺等、一部の地域で行われていた鳥や蚊等の調査では WNV は検出されてはいない。しかし、WNV の侵入監視・流行予測の観点から、県域の蚊を捕獲し WNV ウイルス遺伝子の検出を試みた。

蚊は平成 16 年 7 月から 10 月までの期間に、月 2 回合計 8 回、厚木保健所管内、大和保健所管内の二カ所で、捕獲機(ライトトラップ)を用いて捕獲した。

捕獲されたヤブカ類(6 プール、合計 31 匹)、イエカ類(3 プール、合計 3 匹)、クロヤブカ類(1 プール、2 匹)について検査したところ、WNV 遺伝子は全て検出されず、WNV の感染は確認されなかった。今後も WNV の動向を監視するために、蚊の調査を継続する必要があると考えられた。

(佐藤利明、稲田貴嗣、古屋由美子、高橋孝則、新川隆康)

(2) 横浜市におけるウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

横浜市衛生研究所

横浜市におけるウエストナイルウイルス(WNV)のサーベイランス事業は、近年の米国における WNV の流行に伴い、行政的な防疫対策として死亡カラスと蚊を用いて平成 15 年 7 月 15 日から開始し、本年度は 2 年目の事業となる。

本年度の死亡カラスの検査数は、金沢区福祉保健センターより平成 16 年 6 月 28 日に搬入された 1 羽のみで、WNV 遺伝子(脳・心臓・腎臓の各 3 検体)は不検出であった。

蚊における調査は、昨年度と同様にドライアイス併用のライトトラップにより採集された蚊を用いて行った。ライトトラップの設置場所は、緑政局管理の公園計 18 カ所(各区 1 カ所)及び港湾局管理の敷地内 2 カ所の合計 20 カ所と、今年度新たに中区の独自事業として追加した 2 カ所(大榎橋と畜犬センター)の総計 22 カ所である。採集方法としては、毎週火曜日の夕方にライトトラップを設置し、翌日の朝にライトトラップと採集された蚊を回収する方法で行い、午前中までに当所へ蚊が搬入された。これら一連のライトトラップの設置、検体(死亡カラスと蚊)の回収、当所への検体の搬送に関しては、神奈川県ペストコントロール協会に委託して実施した。20 週 22 カ所で採集され、検査した蚊の総個体数は、8,637 匹で、蚊の種類別ではアカイエカ群 3,330 匹、ヒトスジシマカ 4,261 匹、コガタアカイエカ 45 匹、その他 1,001 匹であった。また、WNV 遺伝子についての検査結果は、全て不検出であった。

(野口有三、宇宿秀三、金山彰宏、小曾根恵子、藤井菊茂)

表 横浜市の WNV サーベイランス調査における蚊の月別および種別採集数

採集日(2004年)		6月	7月	8月	9月	10月	総計	
主管(緑政局)		1~4	5~8	9~13	14~17	18~20		
回数	区名							トラップ設置公園
1	鶴見	みその公園	1	14	18	10	1	44
2	神奈川	三ツ沢公園	15	79	67	105	6	272
3	西	野毛山公園	18	126	175	104	3	426
4	中	根岸森林公園	180	451	366	128	2	1127
5	南	清水が丘公園	30	89	121	52	6	298
6	港南	久良岐公園	5	40	32	9	0	86
7	保土ヶ谷	横浜市児童遊園地	9	49	59	26	0	143
8	旭	こども自然公園	25	57	37	20	0	139
9	磯子	根岸なつかし公園	25	78	68	22	2	195
10	金沢	長浜公園	6	60	22	16	5	109
11	港北	岸根公園	50	69	71	44	3	237
12	緑	霧が丘公園	17	65	137	47	1	267
13	青葉	桜台公園	12	44	49	31	3	139
14	都筑	センター南公園	29	109	68	17	3	226
15	戸塚	舞岡公園	20	235	187	46	4	492
16	栄	飯島わんわん公園	19	101	129	9	1	259
17	泉	泉中央公園	18	90	147	56	10	321
18	瀬谷	瀬谷狚窪公園	82	317	445	158	2	1004
主管(港湾局)								
19	中	シンボルタワー	267	315	260	227	97	1166
20	鶴見	大黒中央公園	39	70	57	76	6	248
中区独自事業								
21	中	大棧橋	-	16	15	7	7	45
22	中	畜犬センター	-	446	563	200	185	1394
合計			867	2920	3093	1410	347	8637
蚊の種類		回数	1~4	5~8	9~13	14~17	18~20	総計
アカイエカ群			488	1192	912	436	302	3330
ヒトスジシマカ			234	1214	1924	861	28	4261
コガタアカイエカ			0	11	14	16	4	45
ヤマトヤブカ			0	361	164	74	6	605
その他			145	142	79	23	7	396
総計			867	2920	3093	1410	347	8637
WNV 遺伝子の検出結果			(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

(備考) 1.蚊の種類の中には、キンバラナガハシカ、オオクロヤブカ、カラツイエカ等を含む。

2.WNV 遺伝子検査は、オスの蚊を除く。

(3) 川崎市におけるウエストナイル(WNV)熱媒体蚊のサーベイランス

川崎市衛生研究所

市内7箇所の保健所に設置したライトトラップに捕獲された蚊を毎週1回採取し、平成16年4月21日から11月25日まで(全31週145回)の蚊におけるウエストナイルウイルスの保有状況145件を、また、ヒトスジシマカにおいてはデングウイルスの保有状況35件も調査した。検査はPCR法を用いて行った。329匹の蚊においてウエストナイルウイルス遺伝子はすべて陰性であった。また、ヒトスジシマカ98匹のデングウイルス遺伝子もすべて陰性であった。蚊の種類はアカイエカ群が全体の66.6%(219/329)、ヒトスジシマカが29.8%(98/329)、コガタアカイエカは3.3%(11/329)であった。

(清水英明、奥山恵子、平位芳江)

表 川崎市のWNVサーベイランス調査における蚊の月別および種別採集数

採取日 2004年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	総計
回数	2	4	5	4	4	5	3	4	31
保健所名									
川崎保健所		2	5	3	4	4	2	4	24
幸保健所	1	1	1	4	2	1	1	2	13
中原保健所		1	4	4	4	1	1	1	16
高津保健所		2	1	2	3	5		2	15
宮前保健所		2		1					3
多摩保健所	1	1	3	4		3	1	3	16
麻生保健所	2	2	5	4	2	4		1	20
合計	4	11	19	22	15	18	5	13	107
蚊の種類									
アカイエカ群	7	12	55	54	31	17	27	16	219
ヒトスジシマカ		4	4	8	32	44	3	3	98
コガタアカイエカ					1		3	7	11
カラツイエカ								1	1
総計	7	16	59	62	64	61	33	27	329
ウエストナイルウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性
デングウイルス遺伝子の検出結果		陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性

備考 検体は全てメス

(4) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

横須賀市衛生試験所

昨年に引き続きウエストナイルウイルス媒介蚊の調査として平成16年7月より10月までの各月1回、7、9、10月は横須賀市衛生試験所構内、8月はヴェルニー公園内汐入ポンプ場にて蚊を捕獲（ライトトラップ法）し、分類した後、神奈川県衛生研究所にPCR法による遺伝子検査を依頼した。結果は表に示すとおりである。

今後もウエストナイルウイルスの国内侵入、流行を監視するため、引き続き調査を行っていくことが必要であると思われる。

（有沢幸雄、石川英二、河崎正太郎）

表 ウエストナイルウイルス遺伝子検査結果

	採取日	種類	匹数	結果
7月分	7月20日	ヤブカ類	1匹	陰性
"	"	イエカ類	3匹	陰性
8月分	8月24日	ヤブカ類	8匹	陰性
9月分	9月21日	ヤブカ類	5匹	陰性
10月分	10月25日	イエカ類	1匹	陰性

4 その他の感染症

(1) 日本脳炎感染源調査

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎患者は、西日本を中心に発生が見られている。日本脳炎ウイルス(JEV)の侵淫度を追跡し流行予測を行うため、ブタの JEV 抗体保有状況を調査した。

神奈川食肉センターに持ち込まれた生後 5~8 月齢の県内産の豚を対象に、平成 16 年 7 月から 9 月までの期間に、8 回、20 頭ずつ、計 160 頭について、血中の JaGAR01 株に対する血球凝集抑制 (HI) 抗体及び 2-ME 感受性抗体をそれぞれ測定した。

その結果、HI 抗体および 2-ME 感受性抗体は検出されなかった。県内での調査結果から JEV の侵淫度は低いと思われた。神奈川県では平成 16 年度も平成 15 年度と同様に、患者発生はなかった。

(佐藤利明、古屋由美子、高橋孝則、新川隆康)

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く)における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和 53 年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成 6 年 10 月の予防接種法改正にともない勧奨性に変った。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和 54 年以降、赤血球凝集抑制 (HI) 抗体の保有状況について調査を行ってきた。しかし HI 抗体の測定に必要なミドリザル血球の入手が困難になったため、平成 11 年度から麻疹ウイルス抗原を吸着してあるゼラチン粒子による凝集反応法 (PA) により抗体の保有状況調査を行った。

平成 16 年 8 月から 12 月の間に神奈川県立足柄上病院で採取された小児の血清 90 例について PA 法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は 1 歳以下が 73.7%、他の年齢層 (2~14 歳) は 93.9~100% を示し、平均抗体保有率は 92.2% であった。

現在の予防接種が個人接種法で行われていることから、予防接種率の低下が予想される。今後も継続して麻疹に対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性和麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

(古屋由美子、片山 丘、高橋孝則、新川隆康)

麻疹抗体保有状況 (採血 平成 16 年 8 月~12 月)

年齢 (歳)	PA 抗体価									検査数	陽性率 (%)
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024		
0-1	5	1		1	1	2	2		7	19	73.7
2-3							2		7	9	100.0
4-5									7	7	100.0
6-7						1	1	3	7	12	100.0
8-9					1		3	1	5	10	100.0
10-14	2			1			5	6	19	33	93.9
合計 (%)	7 7.8	1 1.1	0 0.0	2 2.2	2 2.2	3 3.3	13 14.4	10 11.1	52 57.8	90	92.2

(3) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

風疹流行の予測とその推移を知るため、住民の風疹ウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。

平成16年においては、一般健康人男女189名を対象として、風疹ウイルスに対する赤血球凝集抑制(HI)抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下12.5%、1~4歳35.0%、5~9歳5.0%、10~14歳40.0%、15歳以上5.0~25.0%となり平均陰性率は17.5%であった。

次にHI抗体価をみると16~128倍が65.1%を占め、平均抗体価は $2^{6.2}$ であった。

以上の成績より、抗体保有率の低い年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。現在、生後12~90か月を対象にワクチン接種が実施されているが、これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への風疹ワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

(古屋由美子、片山 丘、高橋孝則、新川隆康)

風疹抗体保有状況 (採血 平成16年8~12月)

年齢 (歳)	HI 抗体価									検査数	陰性率 (%)
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024		
<1	1	5	2							6	12.5
1-4	7	3	1		6	2		1		20	35.0
5-9	1		1	6	6	6				20	5.0
10-14	8		3	2	5		1	1		20	40.0
15-19	4	2	3	1	5	2	2	1		20	20.0
20-24	3			2	3	2	2			12	25.0
25-29	2	2	1	1	6	3	4			19	10.5
30-34	1		1	6	6	1	1			16	6.3
35-39	2			1	11					14	14.3
40-49	3			7	4	4	2			20	15.0
50	1	3	2	5	3	3	2	1		20	5.0
合計	33	15	14	31	55	23	14	4	0	189	17.5
(%)	17.5	7.9	7.4	16.4	29.1	12.2	7.4	2.1	0.0		100.0

(4) HIV 患者・感染者の状況について

神奈川県保健福祉部健康増進課

世界の患者・感染者状況 (2003年12月末現在)

1981年6月に世界で初めての症例が報告されて以来、UNAIDS(国連合同エイズ計画)及びWHOの改良されたツールと手法を過去に適用すると、2004年12月末現在で、HIV感染者は3,940万人(3,590~4,430万人)に達したと推計される。

また、この1年間では490万人(430~640万人)が新たにHIVに感染し、310万人(280~350万人)が死亡したと推計される。

HIVに関する地域別推進値・特徴 (2004年末)

地域	HIV感染者数 (成人・子供)	新規HIV感染者数 (成人・子供)	成人HIV 陽性率(%)*	AIDSによる死亡者数 (成人・子供)
サハラ以南 アフリカ	2,540万 〔2,340-2,840万〕	310万 〔270-380万〕	7.4 〔6.9-8.3〕	230万 〔210-260万〕
北アフリ カ・ 中東	540000 〔23-150万〕	92000 〔34000-350000〕	0.3 〔0.1-0.7〕	28000 〔12000-72000〕
南アジア・ 東南アジア	710万 〔440-1,060万〕	89万 〔48-200万人〕	0.6 〔0.4-0.9〕	49万 〔30-75万〕
東アジア	110万 〔56-180万〕	29万 〔84000-830000〕	0.1 〔0.1-0.2〕	51000 〔25000-86000〕
オセアニア	35000 〔25000-48000〕	5000 〔2100-13000〕	0.2 〔0.1-0.3〕	700 〔1700未満〕
ラテンアメ リカ	170万 〔130-220万〕	24万 〔17-43万〕	0.6 〔0.5-0.8〕	95000 〔73000-120000〕
カリブ海沿 岸	44万 〔27-78万〕	53000 〔27000-140000〕	2.3 〔1.5-4.1〕	36000 〔24000-61000〕
東欧・ 中央アジア	140万 〔92-210万〕	21万 〔11-48万〕	0.8 〔0.5-1.2〕	60000 〔39000-87000〕
西欧・中欧	61万 〔48-76万〕	21000 〔14000-38000〕	0.3 〔0.2-0.3〕	6500 〔8500未満〕
北アメリカ	100万人 〔54-160万〕	44000 〔16000-120000〕	0.6 〔0.3-1.0〕	16000 〔8400-25000〕
合計	3,940万人 〔3,590-4,430万〕	490万 〔430-640万〕	1.1% 〔1.0-1.3%〕	310万 〔280-350万〕

* 2004年の成人(15-49歳) HIV陽性率は2004年の人口統計を使用。

推計値の下の〔 〕内の範囲に実際の数値が存在する。推計値・範囲は現在入手可能な最良のデータを基にして算出したものである。

患者・感染者状況

日本の状況（2004年12月31日現在）

日本の現状

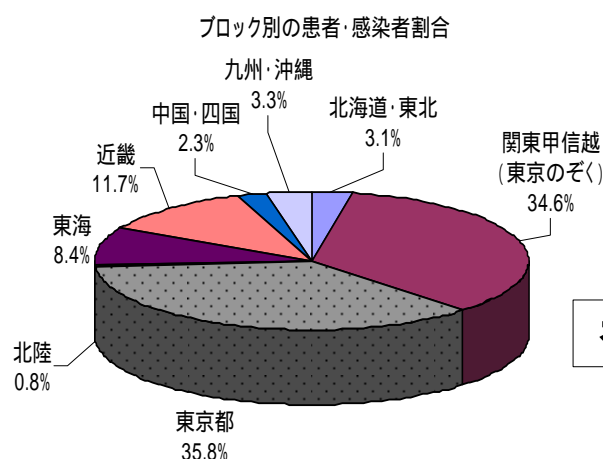
1985年に初めて患者が確認されて以来、2004年12月31日までの累積では、HIV感染者6,560件、AIDS患者3,277件の合計9,837件が報告されている。

平成16年（2004）では、HIV感染者780件、AIDS患者385件の報告があった。年次推移で見ると、平成16年には平成15年に比しHIV感染者数は140件、AIDS患者数は49件の増加が認められた。

平成16年12月31日までの患者・感染者（累積9,837件）の都道府県別報告数では、東京都3,521件、神奈川県829件、大阪府729件の順になっており、関東甲信越地区が6,926件（70.4%）を占めている。男女比は8:2、日本人男性6,468件（65.7%）、外国人男性1,255件（12.8%）、日本人女性691件（7.0%）、外国人女性1,423件（14.5%）となっている。感染経路別では異性間性的接触3,996件（40.6%）、同性間性的接触3,443件（35.0%）、その他不明2,398件（24.4%）となっている。年齢別では30歳代3,136件（31.9%）、20歳代3,013件（30.6%）、40歳代1,824件（18.5%）の順となっている。

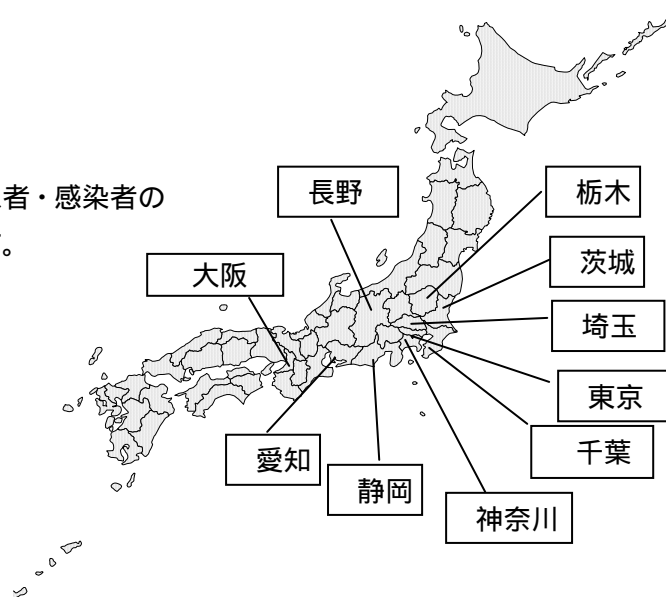
平成16年12月31日までの累積死亡者数は、1,506名であった。

なお、血液凝固因子製剤による感染者の1,434名（内患者167名）は含まれていない。



都道府県別

都道府県別
の中の番号は患者・感染者の
多い順位です。



都道府県別エイズ患者・感染者数

(2004年12月31日現在)

順位	都道府県別	患者・感染者報告件数	構成割合 (%)	ブロック別患者・感染者数報告件数(件)	構成割合 (%)
	1 北海道	107 (16)	1.1%	北海道・東北	306 3.1%
	2 青森県	25 (4)	0.3%		
	3 岩手県	21 (0)	0.2%		
	4 宮城県	65 (14)	0.7%		
	5 秋田県	18 (2)	0.2%		
	6 山形県	21 (2)	0.2%		
	7 福島県	49 (4)	0.5%		
	8 茨城県	595 (26)	6.0%	関東・甲信越	6,926 70.3%
	9 栃木県	218 (16)	2.2%		
	10 群馬県	160 (9)	1.6%		
	11 埼玉県	417 (41)	4.2%		
	12 千葉県	672 (56)	6.8%		
	13 東京都	3521 (411)	35.8%		
	14 神奈川県	829 (82)	8.4%		
	15 新潟県	78 (8)	0.8%		
	16 山梨県	104 (9)	1.1%		
	17 長野県	332 (39)	3.4%		
	18 富山県	26 (2)	0.3%	北 陸	79 0.8%
	19 石川県	20 (2)	0.2%		
	20 福井県	33 (5)	0.3%		
	21 岐阜県	60 (3)	0.6%	東 海	830 8.4%
	22 静岡県	248 (31)	2.5%		
	23 愛知県	413 (72)	4.2%		
	24 三重県	109 (8)	1.1%		
	25 滋賀県	42 (6)	0.4%	近 畿	1,149 11.7%
	26 京都府	123 (24)	1.3%		
	27 大阪府	733 (132)	7.5%		
	28 兵庫県	158 (26)	1.6%		
	29 奈良県	56 (8)	0.6%		
	30 和歌山県	37 (4)	0.4%		
	31 鳥取県	5 (0)	0.1%	中国・四国	225 2.4%
	32 島根県	7 (1)	0.1%		
	33 岡山県	32 (7)	0.3%		
	34 広島県	66 (20)	0.7%		
	35 山口県	18 (2)	0.2%		
	36 徳島県	11 (3)	0.1%		
	37 香川県	20 (7)	0.2%		
	38 愛媛県	47 (5)	0.5%		
	39 高知県	19 (4)	0.2%		
	40 福岡県	128 (17)	1.3%		
	41 佐賀県	5 (0)	0.1%		
	42 長崎県	25 (3)	0.3%		
	43 熊本県	31 (5)	0.3%		
	44 大分県	17 (6)	0.2%		
	45 宮崎県	13 (3)	0.1%		
	46 鹿児島県	33 (6)	0.3%		
	47 沖縄県	70 (14)	0.7%		
		9837 (1,165)	100.0%		100.0%

注1 血液凝固因子製剤による感染者は除いています。 数字は感染者数の多い順です。
 ()内は平成16年中(16年12月31日まで)の報告数です。

患者・感染者状況

全国（2004年12月31日現在）

- 年次推移 -

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
男性	総数	207	290	335	455	492	519	676	669	816	804	864	1042
	感染者	135	171	194	254	283	319	418	389	534	536	573	698
	患者	72	119	141	201	209	200	258	280	282	268	291	344
女性	総数	156	144	111	155	155	134	155	122	137	118	112	123
	感染者	142	127	83	122	114	103	112	73	87	78	67	82
	患者	14	17	28	33	41	31	43	49	50	40	45	41
合計	総数	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976	1,165
	感染者	277	298	277	376	397	422	530	462	621	614	640	780
	患者	86	136	169	234	250	231	301	329	332	308	336	385

- 感染経路別 -

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	2,666	3,439	1,618	7,723
	感染者	1,495	2,593	804	4,892
	患者	1,171	846	814	2,831
女性	総数	1,330	4	780	2,114
	感染者	1,075	1	592	1,668
	患者	255	3	188	446
合計	総数	3,996	3,443	2,398	9,837
	感染者	2,570	2,594	1,396	6,560
	患者	1,426	849	1,002	3,277

* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

* 同性間性的接触には、両性間性的接触も含まれています。

- 国籍別 -

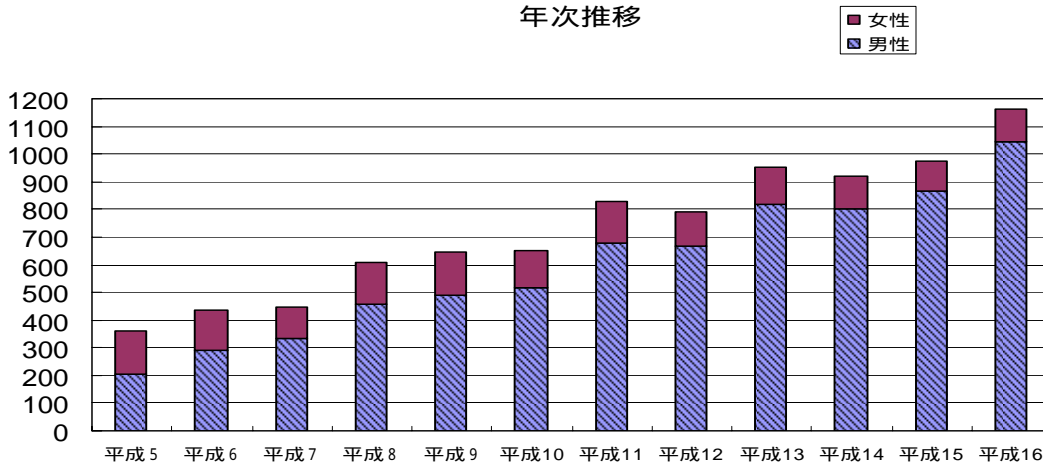
		日本人	外国人	合計
男性	総数	6,468	1,255	7,723
	感染者	4,170	722	4,892
	患者	2,298	533	2,831
女性	総数	691	1,423	2,114
	感染者	503	1,165	1,668
	患者	188	258	446
合計	総数	7,159	2,678	9,837
	感染者	4,673	1,887	6,560
	患者	2,486	791	3,277

- 年齢区分別 -

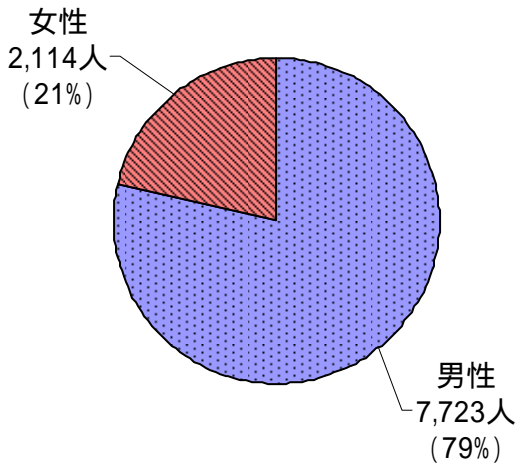
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	不明	合計
男性	総数	65	1,867	2,598	1,668	1,521		7,723
	感染者	54	1,546	1,735	878	675	4	4,892
	患者	11	321	863	790	846	0	2,831
女性	総数	134	1,145	537	158	132	7	2,113
	感染者	124	1,007	366	88	76	7	1,668
	患者	10	139	172	68	57	0	446
合計	総数	199	3,013	3,136	1,824	1,654	11	9,837
	感染者	178	2,553	2,101	966	751	11	6,560
	患者	21	460	1,035	858	903	0	3,277

* 血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

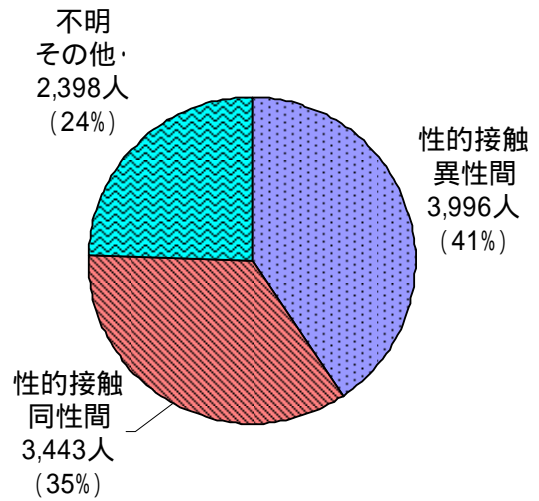
年次推移



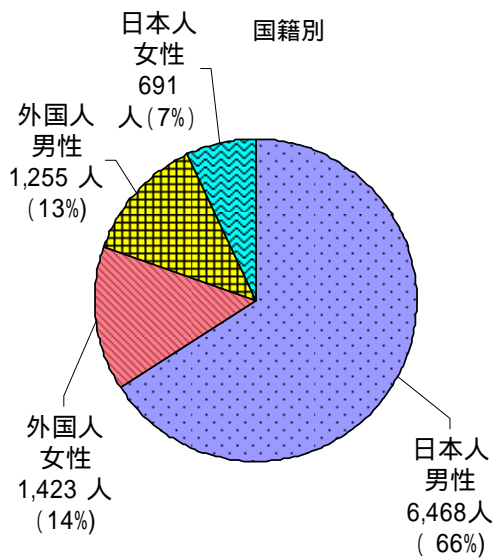
男女別



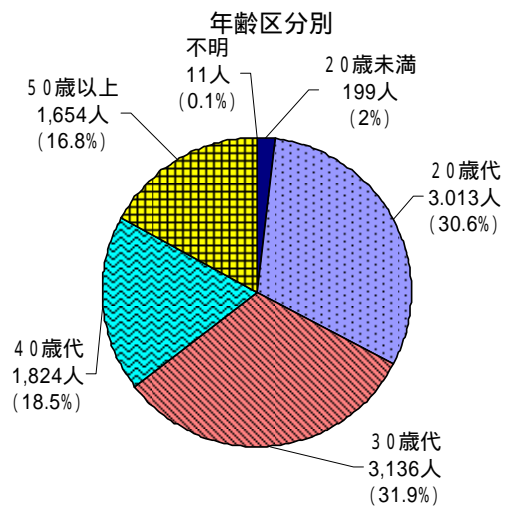
感染経路別



国籍別



患者



者・感染者状況

全国(2004年12月31日現在)

日本のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）

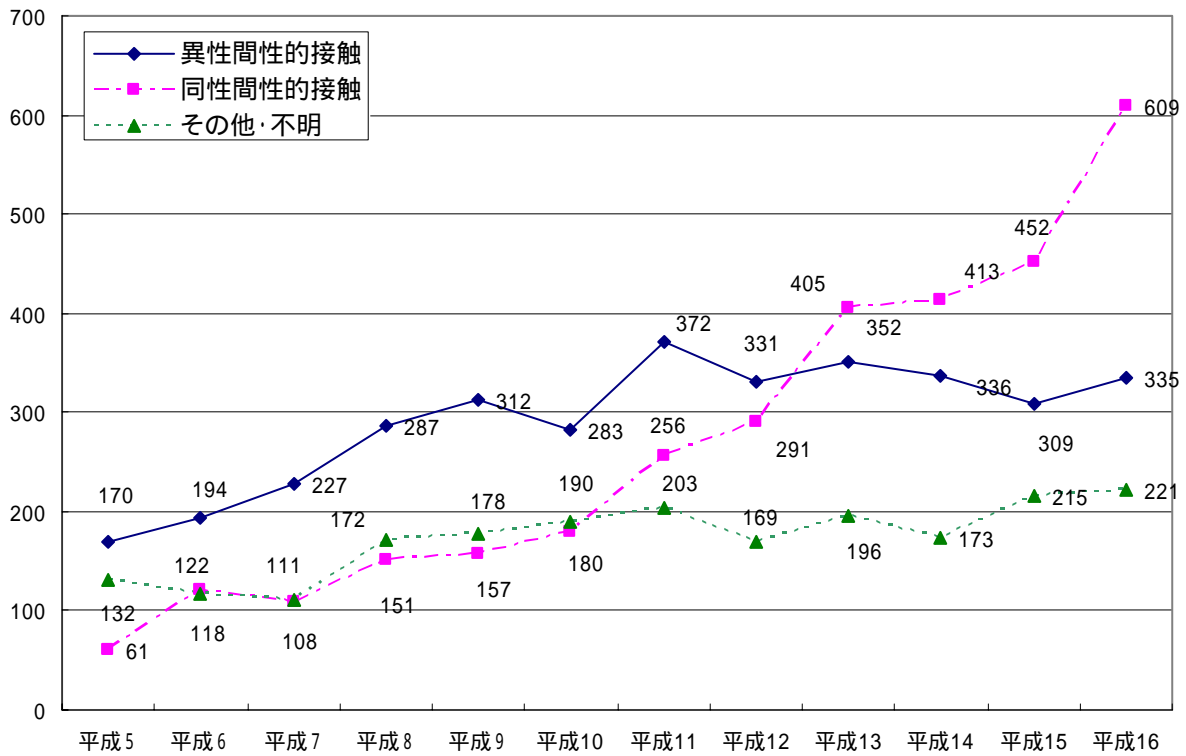
	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
異性間性的接触	170	194	227	287	312	283	372	331	352	336	309	335
同性間性的接触	61	122	108	151	157	180	256	291	405	413	452	609
その他・不明	132	118	111	172	178	190	203	169	196	173	215	221
（内母子感染）	4	4	3	9	4	2	3	5	2	3	1	2
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976	1165

* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

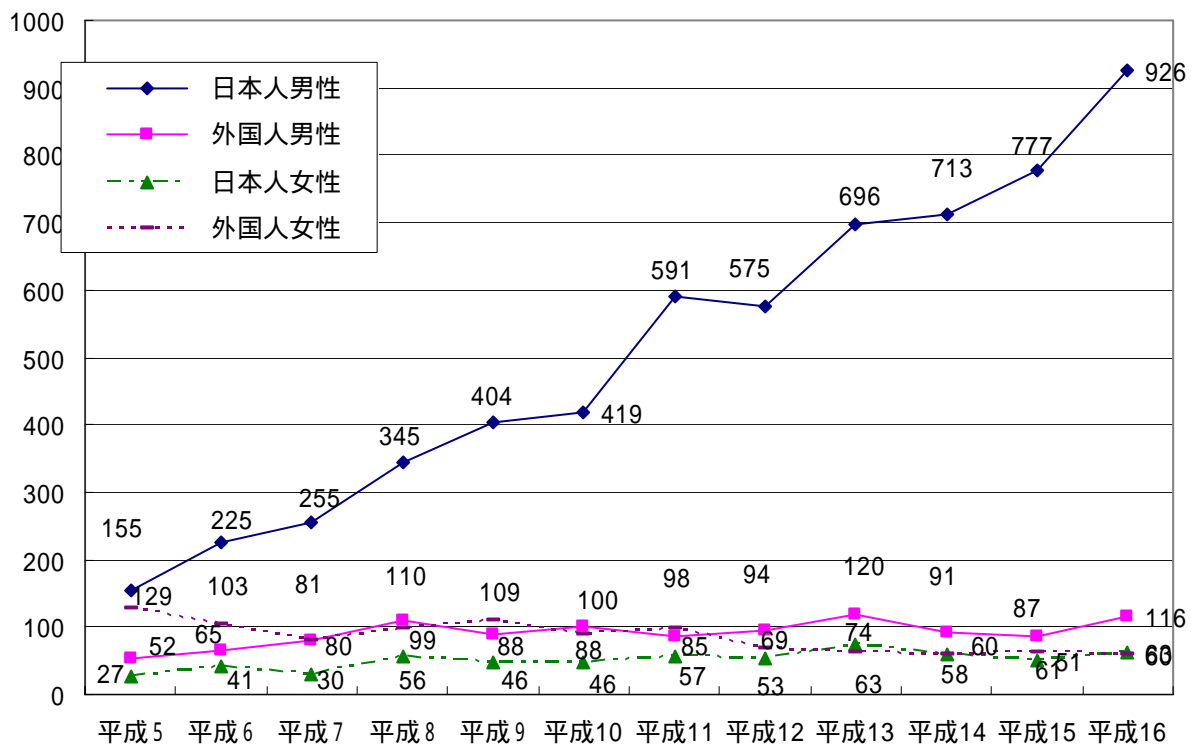
日本のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
日本人男性	155	225	255	345	404	419	591	575	696	713	777	926
外国人男性	52	65	80	110	88	100	85	94	120	91	87	116
日本人女性	27	41	30	56	46	46	57	53	74	60	51	63
外国人女性	129	103	81	99	109	88	98	69	63	58	61	60
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922	976	1165

日本のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）



日本のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）



患者・感染者状況

神奈川県(2004年12月31日現在)

- 年次推移 -

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
男性	総数	16	33	34	42	44	58	64	50	65	62	73	74
	感染者	8	23	18	23	27	36	39	32	36	40	39	45
	患者	8	10	16	19	17	22	25	18	29	22	34	29
女性	総数	10	12	7	13	24	12	15	12	18	7	13	8
	感染者	9	11	6	10	13	10	15	9	10	7	5	8
	患者	1	1	1	3	11	2	0	3	8	0	8	0
合計	総数	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86	82
	感染者	17	34	24	33	40	46	54	41	46	47	44	53
	患者	9	11	17	22	28	24	25	21	37	22	42	29

- 感染経路別 -

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	250	268	141	659
	感染者	144	186	68	399
	患者	106	82	73	260
女性	総数	105	0	65	170
	感染者	87	0	45	132
	患者	18	0	20	38
合計	総数	355	268	206	829
	感染者	231	186	114	531
	患者	124	82	92	298

- 国籍別 -

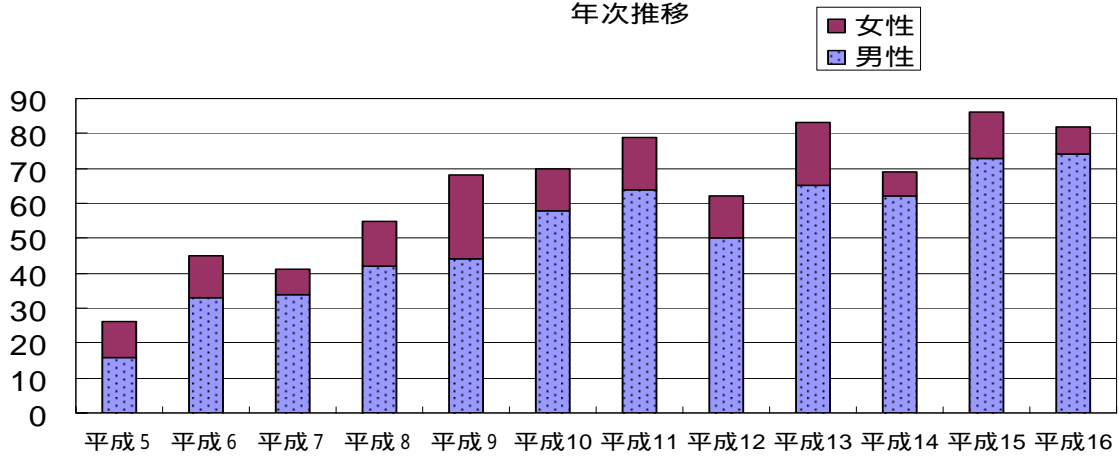
		日本人	外国人	不明	合計
男性	総数	549	106	4	659
	感染者	337	59	3	399
	患者	212	47	1	260
女性	総数	62	107	1	170
	感染者	49	83	0	132
	患者	13	24	1	38
合計	総数	611	213	5	829
	感染者	386	142	3	531
	患者	225	71	2	298

- 年齢区分別 -

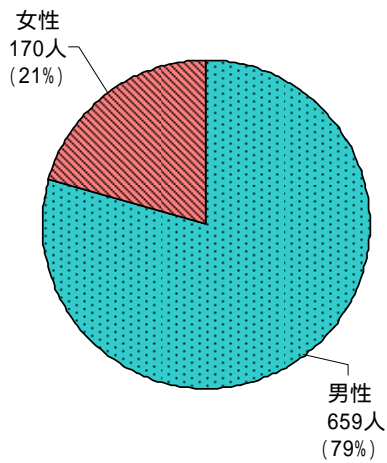
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	合計
男性	総数	9	159	205	148	138	659
	感染者	8	127	135	74	55	399
	患者	1	32	70	74	83	260
女性	総数	7	84	53	16	10	170
	感染者	7	75	32	9	9	132
	患者	0	9	21	7	1	38
合計	総数	16	243	258	164	148	829
	感染者	15	203	167	83	64	531
	患者	1	41	91	81	84	298

* 血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

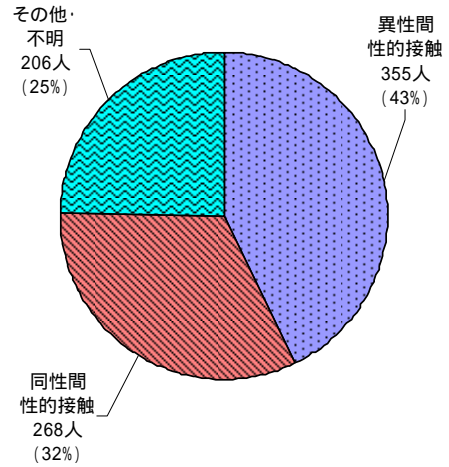
年次推移



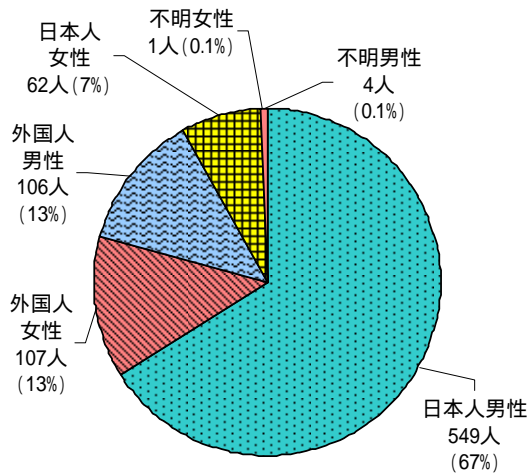
男女別



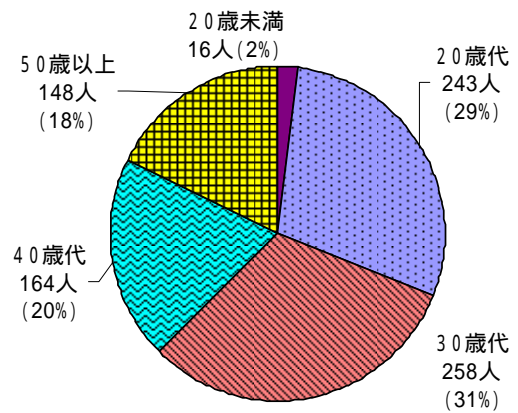
感染経路別



国籍別



年齢区分別



患者・感染者状況

神奈川県（2004年12月31日現在）

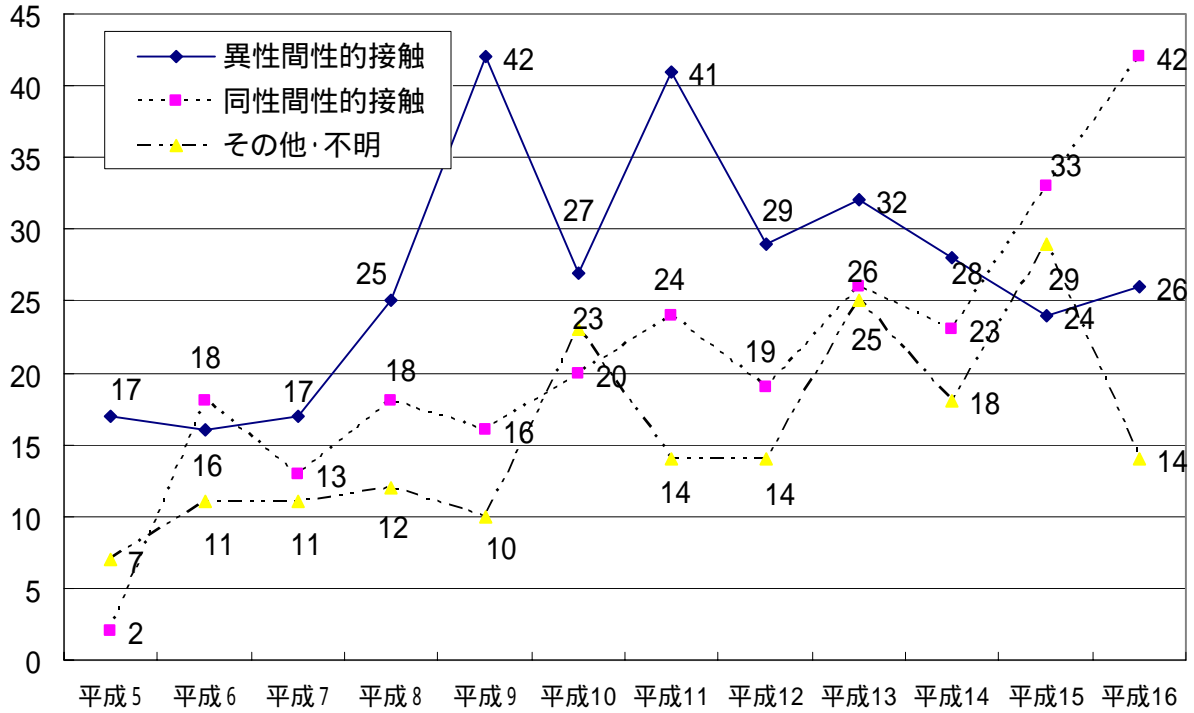
神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
異性間性的接触	17	16	17	25	42	27	41	29	32	28	24	26
同性間性的接触	2	18	13	18	16	20	24	19	26	23	33	42
その他・不明	7	11	11	12	10	23	14	14	25	18	29	14
（内母子感染）	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0
合計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86	82

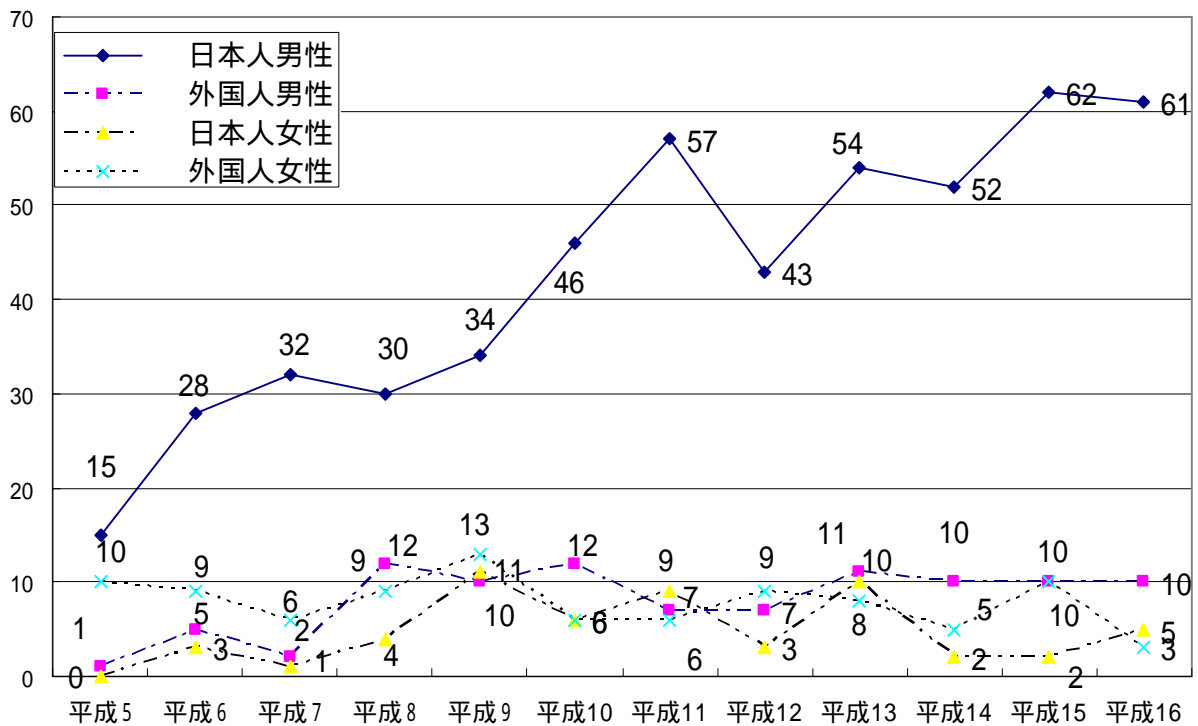
神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
日本人男性	15	28	32	30	34	46	57	43	54	52	62	61
外国人男性	1	5	2	12	10	12	7	7	11	10	10	10
日本人女性	0	3	1	4	11	6	9	3	10	2	2	5
外国人女性	10	9	6	9	13	6	6	9	8	5	10	3
不明											2	3
合計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69	86	82

神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（感染経路別）



神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移（男女国籍別）

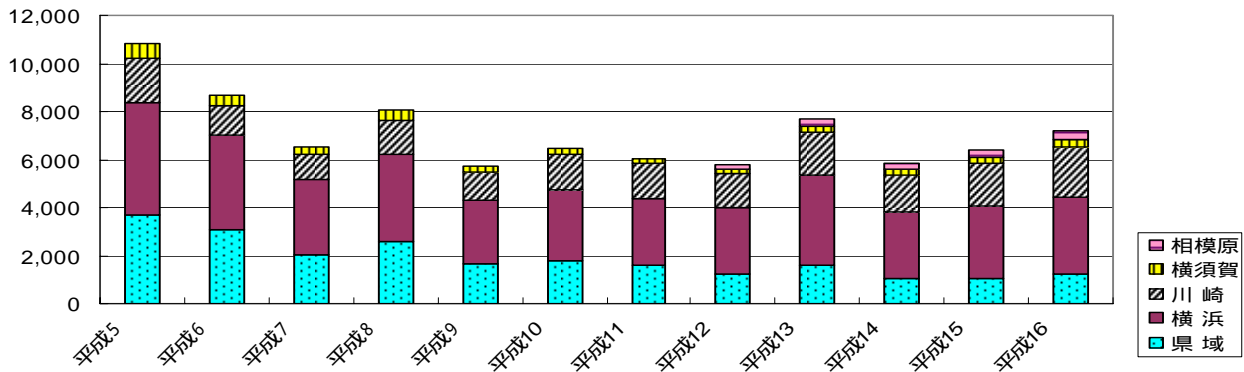


神奈川県 - 検査実施年次推移 -

神奈川県 (2 0 0 4 年 1 2 月 3 1 日 現 在)

	平成 5	平成 6	平成 7	平成 8	平成 9	平成 10	平成 11	平成 12	平成 13	平成 14	平成 15	平成 16
県 域	3,715	3,054	2,057	2,614	1,663	1,756	1,630	1,235	1,583	1,045	1,026	1,247
横 浜	4,669	3,963	3,135	3,580	2,619	2,994	2,740	2,787	3,759	2,763	3,036	3,197
川 崎	1,810	1,225	1,044	1,463	1,192	1,459	1,451	1,405	1,818	1,560	1,802	2,077
横 須 賀	646	435	317	409	233	253	211	195	201	218	237	299
相 模 原								193	357	236	301	401
合 計	10,840	8,677	6,553	8,066	5,707	6,462	6,032	5,815	7,718	5,822	6,402	7,221

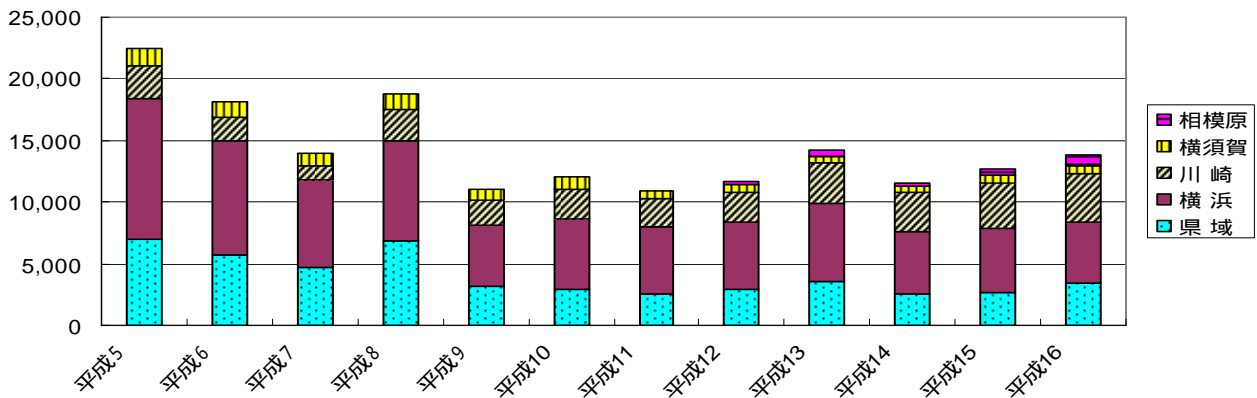
* 相模原は平成 1 2 年 4 月 から 保 健 所 政 令 市



神奈川県 - 相談年次推移 -

	平成 5	平成 6	平成 7	平成 8	平成 9	平成 10	平成 11	平成 12	平成 13	平成 14	平成 15	平成 16
県 域	6,965	5,723	4,698	6,854	3,124	2,916	2,567	2,923	3,582	2,560	2,648	3,462
横 浜	11,433	9,304	7,139	8,109	5,021	5,729	5,483	5,425	6,316	5,110	5,269	4,891
川 崎	2,626	1,870	1,066	2,544	1,982	2,455	2,219	2,475	3,361	3,124	3,626	3,972
横 須 賀	1,441	1,239	1,012	1,313	873	906	679	581	484	522	617	603
相 模 原								248	436	291	492	847
合 計	22,465	18,136	13,915	18,820	11,000	12,006	10,948	11,652	14,179	11,607	12,652	13,775

* 相模原は平成 1 2 年 4 月 から 保 健 所 政 令 市



その他の感染症

1 神奈川県で発生したつつが虫病について

神奈川県衛生研究所

昭和58年から平成16年までのつつが虫病患者発生数を年次別にみると、昭和58年から昭和63年までは確定患者2～19名で推移し、平成元年81名、平成2年112名と増加したが、平成3年からは65名、平成4年52名（含む紅斑熱患者2名）、平成5年24名、平成6年39名、平成7年22名、平成8年9名、平成9年9名と減少した。その後、平成10年14名、平成11年31名、平成12年42名と僅かながらであるが増加し、平成13年7名、平成14年4名、平成15年は6名と再び減少し、平成16年は18名であった（図1）。

またつつが虫病患者発生を季節別にみると、昭和58年から平成15年の20年間すべてで毎年秋期（9～11月）に患者が多く、平成16年についても、10月4名、11月12名、12月2名であり、秋期に大部分の患者が発生した。さらに患者の感染場所（聞き取り調査により推定できたもの）を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成16年では山北町、南足柄市であった。

また、平成16年のつつが虫病感染時の行動も、昨年と同様に畑、田圃など平地での農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

（片山 丘、古屋由美子、高橋孝則、新川隆康）

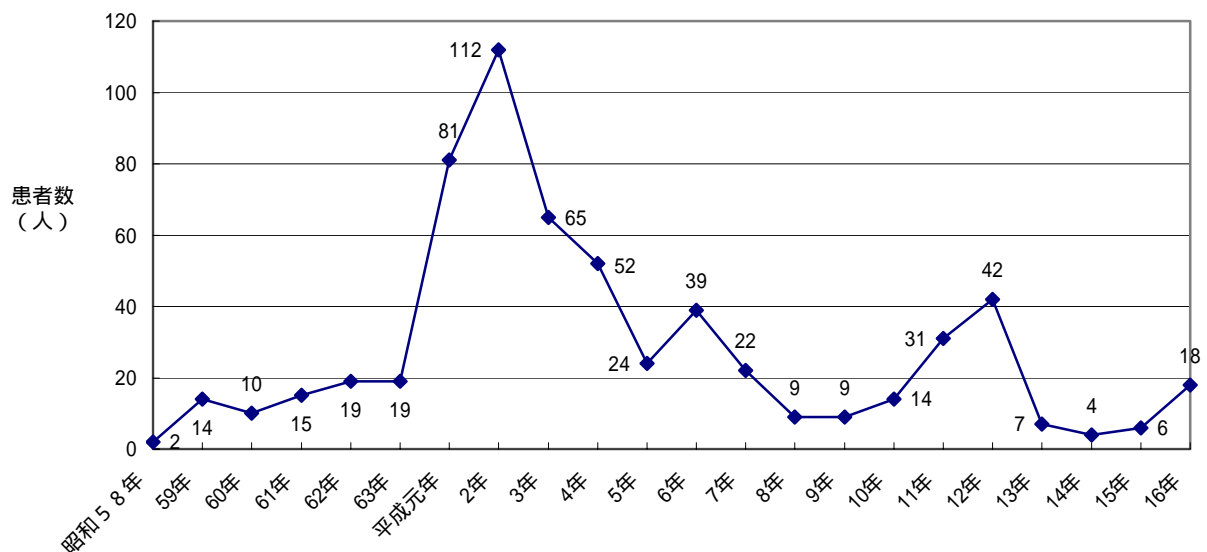


図1 神奈川県における恙虫病患者発生状況

：紅斑熱患者を含む

1 平成16年 全数把握対象の感染症 保健所報告数

全数類型	二類				三類	四類								五類								保健所別計				
	コレラ	細菌性赤痢	腸チフス	パラチフス	腸管出血性大腸菌感染症	A型肝炎	オウム病	コクシジオイデス症	つつが虫病	デング熱	マラリア	レジオネラ症	レプトスピラ症	アメーバ赤痢	ウイルス性肝炎	急性脳炎	クロイツフェルト・ヤコブ病	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	後天性免疫不全症候群	ジアルジア症	髄膜炎菌性髄膜炎		先天性風しん症候群	梅毒	破傷風	バンコマイシン耐性腸球菌
神奈川県計	8	44	10	7	168	8	2	1	19	5	9	2	1	53	16	3	11	5	82	9	3	1	20	4	4	495
横浜市計	5	20	4	3	76	4				5	7	1		27	2	1	5	2	29	6			5	1	1	204
鶴見区					8						1			1	1											11
神奈川	1	2			2									1				2				1				9
西		3			1									2												6
中		1			3									1				1				1				7
南			1							1								5				1				8
港南区					6													3				1				10
保土ヶ谷	1	5		2	1					2	5			1				4					1			21
旭		1	1		1					1				2			1					1				8
磯子					1																					1
金沢					3													9						1		13
港北	1	3		1	18					1	1			3				1		5						34
緑	1	1			2																					4
戸塚		1	1		5	4								5		1										17
瀬谷												1														5
栄泉		2			4													1								7
青葉	1		1		13									3	1		1	2	1					1	25	
都筑		1			4									8			3	2								18
川崎市計	1	10	5	1	25				1	1				11	1		2	19		2		4	1		84	
川崎		1	1		9				1	1				3			1	8				1			26	
幸		1	1		5									1								1			9	
中原		1		1	4									3	1			4				1	1		16	
高津		1	3		5																				9	
宮前	1	4												3			1	6		2		1			18	
多摩		1			2									1				1							5	
麻生		1																							1	
横須賀市計		1			8							1	1	4		2	1	3	2			3			26	
相模原市計		3		1	6									4	4		1	1	9			3			32	
県域計	2	10	1	2	53	4	2	1	18		1			7	9		2	22	1	1	1	5	2	3	149	
平塚					3										2							1	1		7	
鎌倉		2		1	1	1					1				1		1	2						1	11	
藤沢	2	1			4	1								3	3			1	1						16	
小田原		1			22			1	1													1			26	
三崎					6																				6	
厚木		2		1	1	1	1							1				8		1				2	18	
足柄上					8				16									1							25	
津久井					6									1	2			2	5			1			6	
秦野					2				1									6							8	
大茅		4	1			1	1							2	1							1	2	1	12	

2 細菌検出状況

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

神奈川県衛生研究所

（月別）

（平成16年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計												
	1月		2月		3月		4月		5月		6月			7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外
<i>Escherichia coli</i> (Total)*										1	1				23	1					3	1			30
<i>Shigella</i> (Total)																									1
<i>Salmonella</i> Paratyphi A																									1
<i>Salmonella</i> O4 (B)															1		1								4
<i>Salmonella</i> O8 (C2,C3)									1																1
<i>Salmonella</i> O9 (D1)																				1		1			2
<i>Vibrio cholerae</i> O1 & O139 以外			1																						1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>			1												24		1								26
<i>Campylobacter jejuni</i>							5				10				1		2		1		1				20
<i>Campylobacter coli</i>																	4								4
<i>Staphylococcus aureus</i> *															5										5
<i>Clostridium perfringens</i> *							23																		23
<i>Streptococcus, A</i>										6		2													8
<i>Mycoplasma pneumoniae</i>																						3	1		4
合計			2				28		1		17		3		55		9		2		10		3		130

【注】*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるものみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計												
	1月		2月		3月		4月		5月		6月			7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型										1		1		1							2				5
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC															22		1				1		1		25
合計										1		1		23		1					3		1		30

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採取月												計												
	1月		2月		3月		4月		5月		6月			7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外
<i>Shigella sonnei</i>															1										1
合計															1										1

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

横浜市衛生研究所

（月別）

（平成16年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計														
	1		2		3		4		5		6			7		8		9		10		11		12			
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	6		2		2		4		6		14		29		21	2	6		4	1	11	1	6	1	111	5	
<i>Shigella</i> (Total)							1		1		1						1							3	3	7	4
<i>Salmonella</i> Typhi			1		1																			1		3	4
<i>Salmonella</i> Paratyphi A																	1		1						2	3	
<i>Salmonella</i> O4 (B)												5		1										1		6	
<i>Salmonella</i> O8 (C2,C3)							1																		2	2	
<i>Salmonella</i> O9 (D1)								2											1						3	3	
<i>Salmonella</i> O3,10 (E1,E2,E3)					1																		1	1	2	1	
<i>V. cholerae</i> O1:El Tor, Ogawa, CT(+)									2						1		1								4	4	
<i>V. cholerae</i> O1:El Tor, Ogawa, CT(-)																						1			1	1	
<i>V. cholerae</i> O1:El Tor, Inaba, CT(+)					1	1																			1	1	
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>												1	10					1						14	12		
<i>Campylobacter jejuni</i>					4		2			13			1		10		2		2		1			14	38		
<i>Staphylococcus aureus</i> *																	7								7		
<i>Streptococcus, A</i>							1				1		1						1				3		7		
合計	6		3		4		11	1	12	1	31		36		35	2	18		8	1	13	1	29	5	206	11	

【注】*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるものみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	ヒト由来検出数													平成16年累計												
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月			
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数		内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性												1		8		2	2	1		2	1	1	1		15	4
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型	3				1									1		1							5	1	12	1
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	1		2				2		6		13		20		18		5		2		8		1		78	6
<i>Escherichia coli</i> その他・不明	2				1		2															1			6	6
合計	6		2		4		4		6		14		29		21	2	6		4	1	11	1	1		111	5

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	ヒト由来検出数													平成16年累計													
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月				
	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数		内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外	総数	内海外		
<i>Shigella flexneri</i> 2a								1	1																1	1	
<i>Shigella sonnei</i>							1				1													3	3	6	3
合計							1	1	1	1														3	3	7	4

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

川崎市衛生研究所

（月別）

（平成16年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	内訳
<i>Escherichia coli</i> (Total)*			1	2	2		1	1						7
<i>Salmonella</i> O4 (B)							2	1						3
<i>Salmonella</i> O7 (C1,C4)						2				1	1			4
<i>Salmonella</i> O8 (C2,C3)							1			1				2
<i>Salmonella</i> O9 (D1)				1		3	1	2	1	2				10
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							1	5						6
<i>Aeromonas sobria</i>									1					1
<i>Campylobacter jejuni</i>	1	4	3	7	5	8	14	14	9	6	4	4		79
合計	1	4	4	10	7	13	20	23	11	10	5	4		112

【注】*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	ヒト由来検出数												平成16年累計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内訳
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型			1	1	2		1							5
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC				1				1						2
<i>Escherichia coli</i> その他・不明														
合計			1	2	2		1	1						7

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

横須賀市衛生試験所

（月別）

（平成16年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	内訳
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	1				1	6	4	4	2	47	3	3	2	71
<i>Shigella</i> (Total)						1	1							1
<i>Salmonella</i> O4 (B)										1	1			2
<i>Salmonella</i> O7 (C1)					1			1						2
<i>Salmonella</i> O9 (D1)							1		1					2
<i>Salmonella</i> O群不定												1		1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								4						4
<i>Aeromonas hydrophila</i>								1						1
<i>Campylobacter jejuni/coli</i> 種別せず					14	1								15
<i>Staphylococcus aureus</i>					1						1			2
<i>Clostridium perfringens</i>					1				1				1	3
<i>Bacillus cereus</i>											2			2
合計	1				18	8	1	5	1	10	4	48	5	106

【注】*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	ヒト由来検出数												平成16年累計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内訳
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性								1	1					2
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型					1	4	4	1	1		1	2	1	13
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	1					1		2	2	4	2			12
合計	1				1	5	4	1	4	2	3	3	2	27

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	ヒト由来検出数												平成16年累計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	内訳
<i>Shigella sonnei</i>						1	1							1
合計						1	1							1

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

相模原市保健所

（月別）

（平成16年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	内訳
<i>Salmonella</i> O9 (D1)										2				2
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								7						7
<i>Campylobacter jejuni</i>					12	6								18
<i>Campylobacter coli</i>					1	1								2
<i>Streptococcus</i> , A	1	2	3	2		4		1						13
合計	1	2	3	2	13	11		8		2				42

【注】*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

3 ウイルス検出状況

ウイルス検出状況（ヒト由来）

神奈川県衛生研究所

（月別）

（平成16年1月～12月）

検出ウイルス	平成15年計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成16年計
インフルエンザ A H 3	92	107	48	4										159
インフルエンザ B	27	1	2											3
パラインフルエンザ 3								1						1
RS												1	2	3
コクサッキー A 2								3						3
コクサッキー A 4	5							4	1					5
コクサッキー A 6	1						2	1						3
コクサッキー A 9							1							1
コクサッキー A 1 2	9							1						1
コクサッキー A 1 6								3	2		2	2		9
コクサッキー B 1	4								2					2
コクサッキー B 4									1					1
コクサッキー B 5									1				1	2
エコー 6	1								1					1
エコー 1 8					2	1		4						7
ムンプス	2				1									1
アデノ 2								1						1
アデノ 3	1					1	1	3			1	1	2	9
アデノ 4 0 / 4 1							1							1
口 タ	10		1	2										3
ノ 口	145	46	26	20	21		2		3		27	7	180	332
未同定	1							1	2					3
合 計	298	154	77	26	24	2	7	22	13	0	30	11	185	551

（疾患別）

検出ウイルス	疾患名	感染性胃腸炎	手足口病	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	食中毒	合計
インフルエンザ A H 3				61			61
インフルエンザ B				96			96
コクサッキー A 1 6			1				1
アデノ 2				1			1
アデノ 3					3		3
単純ヘルペス 1				1			1
口 タ		1					1
ノ 口		39				83	122
合 計		40	1	159	3	83	286

ウイルス検出状況（ヒト由来）

横浜市衛生研究所

（月別）

（平成16年1月～12月）

検出ウイルス	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
検体数	68	77	42	43	34	37	40	32	27	32	37	50	519
分離株数	48	40	12	9	6	7	20	23	18	25	17	21	246
Adeno 1型			1	2			1	1					5
2型						1	1						2
3型		1		1	1	1							4
7型											1		1
37型							3						3
(型未同定)			1			1					2		4
Influenza AH3型	45	33	4									2	84
B型	1	1	4	3								1	10
Parainfluenza 1型							3	2				1	6
2型						1	1		2	1	1		6
Coxsackie A 2型										1			1
Coxsackie B 1型								1	1				2
3型							1		2	2			5
4型						1							1
5型							1						1
Polio 1型+2型									1				1
2型											1		1
ECHO 3型								2			1		3
6型					2					1			3
RS	1	1			1	1		1	1	3	10	16	35
Rhino				3	2		2	9	6	8			30
未同定	1	4	2			2	10	6	6	6	1		38
合計	48	40	12	9	6	7	20	23	18	25	17	21	246

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	重症急性呼吸器症候群	E型肝炎	ウエストナイル	A型肝炎	Q熱	狂犬病	高病原性鳥インフルエンザ	つづが病	デング熱	日本紅斑熱	日本脳炎	ウイリス肝炎(A・E型以外)	急性性脳炎	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	風しん	ヘルパンギーナ	麻しん(成人麻しんを除く)	流行性耳下腺炎	インフルエンザ	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	性器ヘルペス	成人麻疹	食中毒	その他	合計
インフルエンザ AH3													1								59								24	84
インフルエンザ B																					1	3							5	9
パラインフルエンザ 1																													6	6
パラインフルエンザ 2																													6	6
RS																1	1					2							31	35
ポリオ 1																													1	1
ポリオ 2																													2	2
コクサッキー A9																													1	1
コクサッキー B1																													2	2
コクサッキー B3																													5	5
コクサッキー B4																	1												1	1
コクサッキー B5																													1	1
エコー 3																1													2	3
エコー 6																													3	3
エンテロ(PCR)																1	2		6										24	33
アデノ 1																2													5	7
アデノ 2																													2	2
アデノ 3																2						1							2	5
アデノ 7																													1	1
アデノ 37																									3				3	3
アデノ(型未決定)																							1	1					2	4
ライノ													1									3			1				33	38
未同定																						3	2						3	8
合計													2	4	3	4		6		1	71	1	6	1				161	260	

ウイルス検出状況（ヒト由来）

川崎市衛生研究所

（月別）

（平成 16 年 1 月～12 月）

検出ウイルス	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
インフルエンザ AH3	57	26	3									4	90
インフルエンザ B				1									1
コクサッキー A16								5	2	2	1		10
コクサッキー A24							1						1
コクサッキー B1	2												2
コクサッキー B3									3			2	5
コクサッキー B5							3						3
エコー 6								2	2	2			6
エコー 7									1				1
エコー 11												1	1
エコー 30								2					2
ムンプス										1			1
アデノ 2												1	1
アデノ 3						2	2		1		1		6
アデノ 4							1						1
アデノ 8										1	1		2
アデノ 19										6	1		7
単純ヘルペス 1												1	1
ノロ			2	2									4
ノーウォーク	9	32	3	14	2	1		1	1		1	33	97
合計	68	58	8	17	2	3	6	11	10	12	5	42	242

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	麻疹様疾患	水痘	流行性耳下腺炎	溶連菌感染症	異型肺炎	感染性胃腸炎	乳児嘔吐下痢症	手足口病	伝染性紅斑	突発性発疹	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	HCLS（川崎病）	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	細菌性髄膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	ライ症候群	脊髄炎	脳脊髄炎	その他のウイルス肝炎	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス	その他	記載なし	合計
	インフルエンザ AH3												90															
インフルエンザ B												1																1
コクサッキー A16								10																		1		10
コクサッキー A24																												1
コクサッキー B1																	2											2
コクサッキー B3																5												5
コクサッキー B5																3												3
エコー 6																6												6
エコー 7													1															1
エコー 11												1																1
エコー 30																	2											2
ムンプス																	1											1
アデノ 2												1																1
アデノ 3														6														6
アデノ 4															1													1
アデノ 8																2												2
アデノ 19																7												7
単純ヘルペス 1												1																1
ノロ						4																						4
ノーウォーク様						97																						97
合計						101		10				94		7	10			19								1	242	

ウイルス検出状況（ヒト由来）

横須賀市衛生試験所

（月別）

（平成 16 年 1 月～12 月）

検出ウイルス	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
インフルエンザ AH3	15	5	2								1		23
アデノ(型未定)							2						2
ノロ		2									2	2	6
合計	15	7	2				2				3	2	31

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	重症急性呼吸器症候群	E型肺炎	ウエストナイル熱	A型肝炎	Q熱	狂犬病	高病原性鳥インフルエンザ	つつが虫病	デング熱	日本紅斑熱	日本脳炎	ウイルス肝炎(A・E型以外)	急性脳炎	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	風しん	ヘルパンギーナ	麻しん(成人麻しんを除く)	流行性耳下腺炎	インフルエンザ	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	細菌性髄膜炎	性器ヘルペス	成人麻しん	食中毒	その他	合計			
																																23	2	6
インフルエンザ AH3																						23												23
アデノ(型未決定)															2																			2
ノロ																	6																	6
合計														2	6	6						23											31	

ウイルス検出状況(ヒト由来)

相模原市保健所

(月別)

(平成16年1月~12月)

検出ウイルス	採取月												計																				
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月																					
インフルエンザ AH3	1	2																															3
エコー 6				1																													1
ムンプス																						1											1
アデノ 3.7											2	1																					3
ノロ	1	2	34																											1	2		40
合計	2	4	35								2	1										1							1	2		48	

(疾患別)

疾患名 検出ウイルス	重症急性呼吸器症候群	E型肺炎	ウエストナイル熱	A型肝炎	Q熱	狂犬病	高病原性トリインフル	つつが虫病	デング熱	日本紅斑熱	日本脳炎	ウイルス肝炎(A・E型以外)	急性脳炎	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	風しん	ヘルパンギーナ	麻しん(成人麻しんを除く)	流行性耳下腺炎	インフルエンザ	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	細菌性髄膜炎	性器ヘルペス	成人麻しん	食中毒	その他	合計		
																																3	1
インフルエンザ AH3																						3											3
エコー 6																																	1
ムンプス																																	1
アデノ 3.7																																	3
ノロ																																	18
合計																							3										22

4 予防接種実施状況

(1) ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）

年度 区分	11(年度)	12(年度)	13(年度)	14(年度)	15(年度)	15年度内訳	
						第1期	第2期
接種者数	208,531 人	359,497 人	360,402 人	356,081 人	368,280 人	323,760 人	44,520 人

(2) 急性灰白髄炎

区分	対象者数	接種者数	接種率	
11	159,110 人	163,413 人	102.7 %	
12	162,776	148,994	91.5	
13	163,048	166,398	102.1	
14	163,270	160,663	98.4	
15	161,748	159,413	98.6	
内訳	第1回	80,791	80,965	100.2
	第2回	80,958	78,448	96.9

(3) 麻しん

区分	対象者数	接種者数	接種率
11	82,413 人	82,749 人	100.4 %
12	82,606	79,161	95.8
13	82,732	87,541	105.8
14	82,608	83,311	100.9
15	82,247	83,200	101.2

(4) 風しん

区分	対象者数	接種者数	接種率	
11	196,014 人	120,259 人	61.4 %	
12	165,081	103,792	62.9	
13	158,305	76,102	48.1	
14	177,780	86,766	48.8	
15	175,886	94,263	53.6	
内訳	定期分	82,438	82,712	100.3
	経過措置	93,448	11,551	12.4

(5) 日本脳炎

区分	対象者数	接種者数	接種率
11	319,338 人	209,662 人	65.7 %
12	399,338	264,629	66.3
13	408,106	274,578	67.3
14	405,341	277,095	68.4
15	401,883	300,142	74.7

15年度内 訳	幼児初回接種 (1期初回第1 回)	82,740	79,994	96.7
	幼児初回接種 (1期初回第2 回)	82,740	73,884	89.3
	幼児 (1期追加)	81,130	63,431	78.2
	小学生 (2期)	79,304	52,548	66.3
	中学生 (3期)	75,969	30,285	39.9

(6) インフルエンザ

区分		対象者数	接種者数	接種率
13		1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
14		1,254,544	423,682	33.8
15		1,357,143	546,330	40.3
内訳	65歳以上	1,350,231	544,621	40.3
	予防接種法施行令で定める 60歳以上65歳未満の者	6,912	1,709	24.7

5 神奈川県感染症機関分布図

(番号は、次頁に掲げる一覧表を参照のこと)



6 神奈川県感染症機関一覧表

(印は合同庁舎)

分布 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
-	横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045(671)2463
1	横浜市鶴見福祉保健センター	横浜市鶴見区鶴見中央3-20-1	045(510)1827
2	横浜市神奈川福祉保健センター	横浜市神奈川区広台太田町3-8	045(411)7138
3	横浜市西福祉保健センター	横浜市西区中央1-5-10	045(320)8439
4	横浜市中福祉保健センター	横浜市中区日本大通り35	045(224)8332
5	横浜市南福祉保健センター	横浜市南区花之木町3-48-1	045(743)8241
6	横浜市港南福祉保健センター	横浜市港南区港南中央通10-1	045(847)8436
7	横浜市保土ヶ谷福祉保健センター	横浜市保土ヶ谷区川辺町2-9	045(334)6344
8	横浜市旭福祉保健センター	横浜市旭区鶴ヶ峰1-4-12	045(954)6146
9	横浜市磯子福祉保健センター	横浜市磯子区磯子3-5-1	045(750)2444
10	横浜市金沢福祉保健センター	横浜市金沢区泥亀2-9-1	045(788)7840
11	横浜市港北福祉保健センター	横浜市港北区大豆戸町26-1	045(540)2362
12	横浜市緑福祉保健センター	横浜市緑区寺山町118	045(930)2357
13	横浜市青葉福祉保健センター	横浜市青葉区市ヶ尾町31-4	045(978)2438
14	横浜市都筑福祉保健センター	横浜市都筑区茅ヶ崎中央32-1	045(948)2350
15	横浜市戸塚福祉保健センター	横浜市戸塚区戸塚町157-3	045(866)8426
16	横浜市栄福祉保健センター	横浜市栄区桂町303-19	045(894)6964
17	横浜市泉福祉保健センター	横浜市泉区和泉町4636-2	045(800)2444
18	横浜市瀬谷福祉保健センター	横浜市瀬谷区二ツ橋町190	045(367)5744
19	横浜市衛生研究所	横浜市磯子区滝頭1-2-17	045(754)9800
-	川崎市健康福祉局保健医療部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町 1	044(200)2441
20	川崎保健福祉センター	川崎市川崎区東田町8	044(201)3223
21	幸保健福祉センター	川崎市幸区戸手2-12-11	044(522)7318
22	中原保健福祉センター	川崎市中原区小杉町3-245	044(744)3271
23	高津保健福祉センター	川崎市高津区下作延274-2	044(861)3321
24	宮前保健福祉センター	川崎市宮前区宮前平2-20-5	044(856)3269

分布 番 号	機 関 名	所 在 地	電 話
25	多摩保健福祉センター	川崎市多摩区登戸1775-1	044(935)3306
26	麻生保健福祉センター	川崎市麻生区万福寺1-5-1	044(965)5163
27	川崎市衛生研究所	川崎市川崎区大島5-13-10	044(244)4985
28	横須賀市保健所	横須賀市西逸見町1-38-11	046(822)4300
29	横須賀市衛生試験所	横須賀市米が浜通2 - 7	046(822)4057
30	相模原市保健所	相模原市富士見6-1-1	042(754)1111
31	相模原市衛生試験所	相模原市富士見6-5-8	042(769)8348
-	神奈川県保健福祉部健康増進課	横浜市中区日本大通り1	045(210)4793
32	平塚市保健福祉事務所	平塚市豊原町6-21	0463(32)0130
33	鎌倉市保健福祉事務所	鎌倉市由比ガ浜2-16-13	0467(24)3900
34	藤沢市保健福祉事務所	藤沢市鵠沼石上2-7-1	0466(26)2111
35	茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎1-8-7	0467(85)1171
36	大和保健福祉事務所	大和市中央1-5-26	046(261)2948
37	小田原保健福祉事務所	小田原市荻窪350-1	0465(32)8000
38	三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合32	046(882)6811
39	秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋2-9-9	0463(82)1428
40	厚木保健福祉事務所	厚木市水引2-3-1	046(224)1111
41	足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島2489-2	0465(83)5111
42	津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野937-2	042(784)1111
43	神奈川県衛生研究所	茅ヶ崎市下町屋1-3-1	0467(83)4400
44	横浜検疫所	横浜市中区海岸通1-1	045(201)4456
45	東京検疫所川崎支所	川崎市川崎区千鳥町23-1	044(277)1856
46	横浜検疫所横須賀出張所	横須賀市田浦港町1-49	046(861)6650
47	横浜検疫所三崎出張所	三浦市向ヶ崎8-48	046(881)3805
48	輸入食品・検疫検査センター	横浜市金沢区長浜107-8	045(701)9502
49	横浜市立市民病院	横浜市保土ヶ谷区岡沢町56	045(331)1961

分布 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
50	川崎市立川崎病院	川崎市川崎区新川通12-1	044(233)5521
51	横須賀市立市民病院	神奈川県横須賀市長坂1-3-2	046(856)3136
52	藤沢市民病院	藤沢市藤沢2-6-1	0466(25)3111
53	平塚市民病院	神奈川県平塚市南原1-19-1	0463(32)0015
54	相模原協同病院	相模原市橋本2-8-18	042(772)4291
55	厚木市立病院	厚木市水引1-16-36	046(221)1570
56	神奈川県足柄上病院	神奈川県足柄上郡松田町松田惣領866 - 1	0465(83)0351